



Cisco Secure Firewall Management Center Snort 3 バージョン 7.2 コンフィギュレーションガイド

初版：2022年6月6日

シスコシステムズ合同会社

〒107-6227 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー

<http://www.cisco.com/jp>

お問い合わせ先：シスコ コンタクトセンター

0120-092-255（フリーコール、携帯・PHS含む）

電話受付時間：平日 10:00～12:00、13:00～17:00

<http://www.cisco.com/jp/go/contactcenter/>

【注意】 シスコ製品をご使用になる前に、安全上の注意（ www.cisco.com/jp/go/safety_warning/ ）をご確認ください。本書は、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。また、契約等の記述については、弊社販売パートナー、または、弊社担当者にご確認ください。

THE SPECIFICATIONS AND INFORMATION REGARDING THE PRODUCTS IN THIS MANUAL ARE SUBJECT TO CHANGE WITHOUT NOTICE. ALL STATEMENTS, INFORMATION, AND RECOMMENDATIONS IN THIS MANUAL ARE BELIEVED TO BE ACCURATE BUT ARE PRESENTED WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED. USERS MUST TAKE FULL RESPONSIBILITY FOR THEIR APPLICATION OF ANY PRODUCTS.

THE SOFTWARE LICENSE AND LIMITED WARRANTY FOR THE ACCOMPANYING PRODUCT ARE SET FORTH IN THE INFORMATION PACKET THAT SHIPPED WITH THE PRODUCT AND ARE INCORPORATED HEREIN BY THIS REFERENCE. IF YOU ARE UNABLE TO LOCATE THE SOFTWARE LICENSE OR LIMITED WARRANTY, CONTACT YOUR CISCO REPRESENTATIVE FOR A COPY.

The Cisco implementation of TCP header compression is an adaptation of a program developed by the University of California, Berkeley (UCB) as part of UCB's public domain version of the UNIX operating system. All rights reserved. Copyright © 1981, Regents of the University of California.

NOTWITHSTANDING ANY OTHER WARRANTY HEREIN, ALL DOCUMENT FILES AND SOFTWARE OF THESE SUPPLIERS ARE PROVIDED "AS IS" WITH ALL FAULTS. CISCO AND THE ABOVE-NAMED SUPPLIERS DISCLAIM ALL WARRANTIES, EXPRESSED OR IMPLIED, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, THOSE OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NON-INFRINGEMENT OR ARISING FROM A COURSE OF DEALING, USAGE, OR TRADE PRACTICE.

IN NO EVENT SHALL CISCO OR ITS SUPPLIERS BE LIABLE FOR ANY INDIRECT, SPECIAL, CONSEQUENTIAL, OR INCIDENTAL DAMAGES, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, LOST PROFITS OR LOSS OR DAMAGE TO DATA ARISING OUT OF THE USE OR INABILITY TO USE THIS MANUAL, EVEN IF CISCO OR ITS SUPPLIERS HAVE BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.

Any Internet Protocol (IP) addresses and phone numbers used in this document are not intended to be actual addresses and phone numbers. Any examples, command display output, network topology diagrams, and other figures included in the document are shown for illustrative purposes only. Any use of actual IP addresses or phone numbers in illustrative content is unintentional and coincidental.

All printed copies and duplicate soft copies of this document are considered uncontrolled. See the current online version for the latest version.

Cisco has more than 200 offices worldwide. Addresses and phone numbers are listed on the Cisco website at www.cisco.com/go/offices.

Cisco and the Cisco logo are trademarks or registered trademarks of Cisco and/or its affiliates in the U.S. and other countries. To view a list of Cisco trademarks, go to this URL: <https://www.cisco.com/c/en/us/about/legal/trademarks.html>. Third-party trademarks mentioned are the property of their respective owners. The use of the word partner does not imply a partnership relationship between Cisco and any other company. (1721R)

© 2022 Cisco Systems, Inc. All rights reserved.



目次

第 1 章

ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーの概要 1

ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーについて 1

Snort 検査エンジン 2

Snort 3 3

Snort 2 と Snort 3 の比較 5

Management Center 管理対象の Threat Defense での Snort 3 の機能制限 6

ポリシーがトラフィックで侵入を検査する方法 6

復号化、正規化、前処理：ネットワーク分析ポリシー 7

アクセス コントロールルール：侵入ポリシーの選択 9

侵入インスペクション：侵入ポリシー、ルール、変数セット 9

侵入イベントの生成 11

システム提供およびカスタムネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシー 12

システム提供のネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシー 13

カスタムネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーの利点 15

カスタム ネットワーク分析ポリシーの利点 15

カスタム侵入ポリシーの利点 16

カスタム ポリシーの制限 18

ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件 20

第 2 章

Snort 2 から Snort 3 への移行 21

Snort 3 検査エンジン 21

ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件 22

Snort 2 から Snort 3 への移行方法 22

Snort 2 から Snort 3 への移行の前提条件 22

個々のデバイス上での Snort 3 の有効化	23
複数のデバイスでの Snort 3 の有効化	23
Snort 2 のカスタム IPS ルールの Snort 3 への変換	24
すべての侵入ポリシーのすべての Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換	25
単一の侵入ポリシーの Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換	25
Snort 2 と Snort 3 のベースポリシーのマッピングの表示	26
Snort 2 のルールと Snort 3 の同期	26
設定変更の展開	28

第 1 部 : **Snort 3 での侵入検知と防御 31**

第 3 章	Snort 3 侵入ポリシーを開始するには 33
	侵入ポリシーの概要 33
	ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件 35
	カスタム Snort 3 侵入ポリシーの作成 35
	Snort 3 侵入ポリシーの編集 35
	ルールアクションのロギング 36
	侵入ポリシーのベースポリシーの変更 36
	侵入ポリシーの管理 37
	侵入防御を実行するためのアクセスコントロールルール設定 38
	アクセス コントロール ルール設定と侵入ポリシー 39
	侵入防御を実行するアクセスコントロールルールの設定 39

第 4 章	ルールを使用した侵入ポリシーの調整 41
	侵入ルールの調整の概要 41
	侵入ルールのタイプ 42
	ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件 43
	Snort 3 のカスタムルール 43
	侵入ポリシーの Snort 3 侵入ルールの表示 44
	侵入ルールアクション 44
	侵入ルールアクションのオプション 45

侵入ルールアクションの設定	45
侵入ポリシーの侵入イベント通知フィルタ	46
侵入イベントしきい値	46
侵入イベントしきい値の設定	46
Snort 3 での侵入ルールのしきい値の設定	48
侵入イベントしきい値の表示と削除	49
侵入ポリシー抑制の設定	49
侵入ポリシー抑制タイプ	50
Snort 3 での侵入ポリシーの抑制の設定	50
抑制条件の表示と削除	51
侵入ルールのコメントの追加	51
Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換	52
すべての侵入ポリシーのすべての Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換	52
単一の侵入ポリシーの Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換	53
ルールグループへのカスタムルールの追加	54
カスタムルールを含むルールグループの侵入ポリシーへの追加	55
Snort 3 でのカスタムルールの管理	56
カスタムルールの削除	57
ルールグループの削除	57

 第 5 章

ネットワーク資産に応じた侵入防御の調整	59
LSP 更新での Snort 3 ルールの変更	59
Cisco Secure Firewall 推奨ルールの概要	60
ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件	61
Snort 3 での新しい Cisco Secure Firewall 推奨事項の生成	61

 第 11 部 :

Snort 3 での詳細なネットワーク分析	65
-----------------------	----

 第 6 章

ネットワーク分析ポリシーを開始するには	67
ネットワーク分析ポリシーの概要	67
ネットワーク分析ポリシーの管理	68

ネットワーク分析ポリシーの Snort 3 の定義と用語	69
ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件	72
Snort 3 の場合のカスタムネットワーク分析ポリシーの作成	73
ネットワーク分析ポリシーのマッピング	76
ネットワーク分析ポリシーのマッピングの表示	77
ネットワーク分析ポリシーの作成	77
ネットワーク分析ポリシーの変更	77
[ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policy)] ページでのインスペクタの検索	78
インスペクタ設定のコピー	78
ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ	79
設定をオーバーライドするインスペクタのインライン編集	83
インライン編集時の未保存の変更を元に戻す	84
インスペクタとオーバーライドのリストの表示	85
オーバーライドした設定のデフォルト設定の復元	85
Snort 3 ポリシーの検証	86
カスタムネットワーク分析ポリシーの設定例	89
ネットワーク分析ポリシーの設定とキャッシュされた変更	100

第 III 部 : **Snort 3 向けの Encrypted Visibility Engine 103**

第 7 章 **暗号化された可視性エンジン 105**

Encrypted Visibility Engine の概要	105
EVE の仕組み	106
EVE の設定	107
EVE イベントの表示	107
EVE ダッシュボードの表示	108

第 IV 部 : **Snort 3 のエレファントフロー検出 111**

第 8 章 **エレファントフローの検出 113**

エレファントフローの検出と修復について	113
---------------------	-----

インテリジェント アプリケーション バイパスからのエレファントフローのアップグレード
114

エレファントフローの設定 114



第 1 章

ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーの概要

Snort 検査エンジンは、Cisco Secure Firewall Threat Defense (旧 Firepower Threat Defense) デバイスに不可欠な部分です。この章では、Snort 3 とネットワーク分析ポリシーおよび侵入ポリシーの概要について説明します。システム提供およびカスタムのネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーについても説明します。

- [ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーについて \(1 ページ\)](#)
- [Snort 検査エンジン \(2 ページ\)](#)
- [Snort 3 \(3 ページ\)](#)
- [Snort 2 と Snort 3 の比較 \(5 ページ\)](#)
- [Management Center 管理対象の Threat Defense での Snort 3 の機能制限 \(6 ページ\)](#)
- [ポリシーがトラフィックで侵入を検査する方法 \(6 ページ\)](#)
- [システム提供およびカスタムネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシー \(12 ページ\)](#)
- [ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件 \(20 ページ\)](#)

ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーについて

ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーは、侵入検知および防御の機能の一部として連携して動作します。

- 侵入検知という用語は、一般に、ネットワークトラフィックへの侵入の可能性を受動的にモニタおよび分析し、セキュリティ分析用に攻撃データを保存するプロセスを指します。これは「IDS」とも呼ばれます。
- 侵入防御という用語には、侵入検知の概念が含まれますが、さらにネットワークを通過中の悪意のあるトラフィックをブロックしたり変更したりする機能も追加されます。これは「IPS」とも呼ばれます。

侵入防御の展開では、システムがパケットを検査するときに次のことが行われます。

- **ネットワーク分析ポリシー**は、トラフィックのデコードと前処理の方法を管理し、特に、侵入を試みている兆候がある異常なトラフィックについて、さらに評価できるようにします。
- **侵入ポリシー**では侵入およびプリプロセッサルール（総称的に「侵入ルール」とも呼ばれる）を使用し、パターンに基づき、デコードされたパケットを検査して攻撃の可能性を調べます。侵入ポリシーは変数セットとペアになり、それによって名前付き値を使用してネットワーク環境を正確に反映することができます。

ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーは、どちらも親のアクセスコントロールポリシーによって呼び出されますが、呼び出されるタイミングが異なります。システムでトラフィックが分析される際には、侵入防御（追加の前処理と侵入ルール）フェーズよりも前に、別途ネットワーク分析（デコードと前処理）フェーズが実行されます。ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーを一緒に使用すると、広範囲で詳細なパケットインスペクションを行うことができます。このポリシーは、ホストとそのデータの可用性、整合性、機密性を脅かす可能性のあるネットワークトラフィックの検知、通知および防御に役立ちます。

システムには、同様の名前（Balanced Security and Connectivity など）が付いたいくつかのネットワーク分析ポリシーおよび侵入ポリシーが付属しており、それらは互いに補完しあい、連携して動作します。システム付属のポリシーを使用することで、Cisco Talos Intelligence Group (Talos) の経験を活用できます。これらのポリシーでは、Talos は侵入ルールとインスペクタールの状態を設定するとともに、インスペクタとその他の詳細設定の初期設定も提供します。

また、カスタムのネットワーク分析ポリシーや侵入ポリシーも作成できます。カスタムポリシーの設定を調整することで、各自に最も役立つ方法でトラフィックを検査できます。これによって、管理対象デバイスのパフォーマンスが向上し、ユーザは生成されたイベントにさらに効率的に対応できるようになります。

Web インターフェイスで同様のポリシーエディタを使用し、ネットワーク分析ポリシーや侵入ポリシーを作成、編集、保存、管理します。いずれかのタイプのポリシーを編集するときには、Web インターフェイスの左側にナビゲーションパネルが表示され、右側にさまざまな設定ページが表示されます。

追加のサポートと情報については、以下のビデオを参照してください。

- [Snort 3 基本の概要](#)
- [Snort 3 拡張の概要](#)

Snort 検査エンジン

Snort 検査エンジンは、Secure Firewall Threat Defense（旧 Firepower Threat Defense）デバイスに不可欠な部分です。検査エンジンは、トラフィックをリアルタイムで分析して、パケットを詳細に検査します。ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーでは、Snort 検査エンジンの機能を利用して、侵入を検出して保護します。

Snort 3

Snort 3 は Snort 検査エンジンの最新バージョンで、以前のバージョンの Snort と比較して大幅に改善されています。Snort の古いバージョンは Snort 2 です。Snort 3 はより効率的で、パフォーマンスとスケーラビリティが向上します。

Snort 3 はアーキテクチャが再設計され、Snort 2 と比較すると同等のリソースでより多くのトラフィックを検査します。Snort 3 では、トラフィックパーサーを簡単かつ柔軟に挿入できます。Snort 3 には、ルールの記述を容易にし、同等の共有オブジェクトルールを表示できる新しいルールシンタックスも用意されています。

Snort 3 のその他の重要な変更点は次のとおりです。

- 複数の Snort インスタンスを使用する Snort 2 とは異なり、Snort 3 は複数のスレッドを単一の Snort インスタンスに関連付けます。これにより、使用するメモリが少なくなり、Snort のリロード時間が短縮され、より多くの侵入ルールとより大きなネットワークマップがサポートされます。Snort スレッドの数はプラットフォームによって異なり、各プラットフォームの Snort 2 インスタンスの数と同じです。使用方法はほぼ透過的です。
- 脅威に対する防御 ことの Snort バージョン：Snort 検査エンジンは 脅威に対する防御 固有であり、Secure Firewall Management Center (旧 Firepower Management Center) 固有ではありません。Management Center はそれぞれが Snort のいずれかのバージョン (Snort 2 および Snort 3) である複数の 脅威に対する防御 を管理できます。Management Center の侵入ポリシーは一意ですが、システムは、デバイスの選択した検査エンジンに応じて、侵入保護のために Snort 2 または Snort 3 バージョンの侵入ポリシーを適用します。デバイスの検査エンジンの詳細については、[Snort 3 検査エンジン \(21 ページ\)](#) を参照してください。
- デコーダルール：パケットデコーダルールは、デフォルトの侵入ポリシーでのみ起動します。他のポリシーで有効にしたデコーダルールは無視されます。
- 共有オブジェクトルール：Snort 3 は、すべてでなく一部の共有オブジェクト (SO) の侵入ルール (ジェネレータ ID (GID) が 3 のルール) をサポートします。サポートされていない有効な共有オブジェクトルールはトリガーされません。
- セキュリティ インテリジェンスのマルチレイヤ検査：Snort 2 はマルチレイヤトラフィックの 2 つのレイヤを検査します。Snort 3 は、レイヤに関係なく最も内側の IP アドレスを検出します。
- プラットフォームのサポート：Snort 3 には Threat Defense 7.0 以降が必要です。ASA FirePOWER または NGIPSv ではサポートされていません。
- 管理対象デバイス：バージョン 7.0 の Management Center は、バージョン 6.4、6.5、6.6、6.7、および 7.0 の Snort 2 脅威に対する防御 とバージョン 7.0 の Snort 3 脅威に対する防御 を同時にサポートできます。
- Snort バージョンの切り替え時のトラフィックの中断：Snort のバージョンを切り替えると、トラフィックの検査が中断され、展開中にいくつかのパケットがドロップされる可能性があります。

- **統合ポリシー**：管理対象の脅威に対する防御で有効になっている基盤の Snort エンジンのバージョンに関係なく、Management Center で設定されたアクセスコントロールポリシー、侵入ポリシー、およびネットワーク分析ポリシーは、ポリシーの適用時にシームレスに機能します。Management Center バージョン 7.0 以降のすべての侵入ポリシーには、Snort 2 バージョンと Snort 3 バージョンの 2 つのバージョンがあります。侵入ポリシーは統合されます。つまり、共通の名前、ベースポリシー、および検査モードを持ちます。ただし、ポリシーには 2 つのバージョン (Snort 2 バージョンと Snort 3 バージョン) があります。侵入ポリシーの Snort 2 バージョンと Snort 3 バージョンでは、ルール設定の観点からは異なる場合があります。ただし、侵入ポリシーがデバイスに適用されると、システムはデバイスで有効になっている Snort バージョンを自動的に識別し、そのバージョンに設定されたルール設定を適用します。
- **Lightweight Security Package (LSP)**：Snort ルールの更新 (SRU) を Snort 3 の次世代の侵入ルールと設定の更新に置き換えます。更新をダウンロードすると、Snort 3 LSP と Snort 2 SRU の両方がダウンロードされます。

LSP の更新では、新規と更新後の侵入ルールとインスペクタールール、既存のルールの変更後の状態、および Management Center と脅威に対する防御バージョン 7.0 以降の変更後のデフォルトの侵入ポリシー設定が提供されます。Management Center をバージョン 6.7 以前から 7.0 にアップグレードすると、LSP と SRU の両方がサポートされます。LSP の更新では、システムにより提供されたルールが削除されたり、新しいルールカテゴリとデフォルトの変数が提供されたり、デフォルトの変数値が変更されたりすることもあります。LSP の更新については、『*Firepower Management Center Configuration Guide*』の最新バージョンの「*Update Intrusion Rules*」のトピックを参照してください。
- **Snort 2 と Snort 3 のルールと事前設定のマッピング**：Snort 2 と Snort 3 のルールがマッピングされ、マッピングはシステムによって提供されます。ただし、1 対 1 のマッピングではありません。システムによって提供される侵入ベースポリシーは、Snort 2 と Snort 3 の両方に対して事前に設定されており、ルールセットが異なる場合でも同じ侵入防御を提供します。システムによって提供される Snort 2 と Snort 3 のベースポリシーは、同じ侵入防御設定で相互にマッピングされます。詳細については、「[Snort 2 と Snort 3 のベースポリシーのマッピングの表示 \(26 ページ\)](#)」を参照してください。
- **Snort 2 と Snort 3 ルールオーバーライドの同期**：脅威に対する防御が 7.0 にアップグレードされると、脅威に対する防御の検査エンジンを Snort 3 バージョンにアップグレードできます。Management Center は Snort 2 バージョンの侵入ポリシーの既存のルールのすべてのオーバーライドを、Talos が提供するマッピングを使用して、対応する Snort 3 ルールにマッピングします。ただし、アップグレード後に実行した追加のオーバーライドがある場合や、新しい脅威に対する防御のバージョン 7.0 をインストール場合は、それらを手動で同期する必要があります。詳細については、[Snort 2 のルールと Snort 3 の同期 \(26 ページ\)](#) を参照してください。
- **カスタム侵入ルール**：Snort 3 でカスタム侵入ルールを作成できます。また、Snort 2 に存在するカスタム侵入ルールを Snort 3 にインポートすることもできます。詳細については、[Snort 3 のカスタムルール \(43 ページ\)](#) を参照してください。
- **Snort 2 エンジンと Snort 3 エンジンの切り替え**：Snort 3 をサポートする脅威に対する防御は Snort 2 もサポートできます。Snort 3 から Snort 2 への切り替えは、有効性の観点から推

奨されません。ただし、切り替えが必要な場合は、[Snort 3 検査エンジン \(21 ページ\)](#) の手順に従ってください。



重要 Snort のバージョンは自由に切り替えることができますが、Snort の一方バージョンでの侵入ルールを変更しても、もう一方のバージョンでは自動的に更新されません。Snort の一方のバージョンでルールのルールアクションを変更する場合は、Snort のバージョンを切り替える前に、もう一方のバージョンの変更を必ず複製してください。システムにより提供される同期オプションは、侵入ポリシーの Snort 2 バージョンの変更のみを Snort 3 バージョンに同期します。その逆の同期は行いません。

Snort 2 と Snort 3 の比較

Snort 3 はアーキテクチャが再設計され、Snort 2 と比較すると同等のリソースでより多くのトラフィックを検査します。Snort 3 では、トラフィックパーサーを簡単かつ柔軟に挿入できます。Snort 3 には、ルールの記述を容易にし、同等の共有オブジェクトルールを表示できる新しいルールシンタックスも用意されています。

次の表に、検査エンジン機能に関する Snort 2 バージョンと Snort 3 バージョンの違いを示します。

機能	Snort 2	Snort 3
パケットスレッド	プロセスごとに 1 つ	プロセスごとに任意の数
コンフィギュレーションメモリの使用	プロセス数 X x GB	合計 x GB。より多くのメモリをパケットに使用可能
設定のリロード	低速	より高速。1 つのスレッドを個別のコアにピン留め可能
ルールのシンタックス	一貫性がなく、改行が必要	任意の空白を含む均一なシステム
ルールのコメント	コメントのみ	#、#begin、および #end マーク。C 言語スタイル

追加リファレンス：[Firepower の Snort 2 と Snort 3 の違い](#)。

Management Center 管理対象の Threat Defense での Snort 3 の機能制限

次の表に、Snort 2 でサポートされているが、Management Center 管理対象の脅威に対する防御デバイスの Snort 3 ではサポートされていない機能を示します。

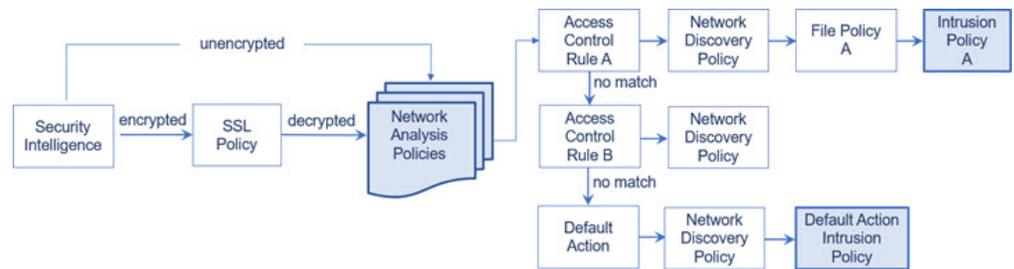
表 1: Snort 3 の機能制限

ポリシー/領域	サポートされない機能
アクセスコントロールポリシー (Access Control Policy)	次のアプリケーション設定 : <ul style="list-style-type: none"> • Safe Search • YouTube EDU
[侵入ポリシー (Intrusion Policy)]	<ul style="list-style-type: none"> • [ポリシー層 (Policy Layers)] • グローバルルールのしきい値 • ロギングの設定 : <ul style="list-style-type: none"> • SNMP • SRU ルールの更新 (Snort 3 は LSP ルールの更新のみをサポートしているため)
その他の機能	FQDN 名によるイベントのロギング

ポリシーがトラフィックで侵入を検査する方法

アクセスコントロールの展開の一部としてシステムがトラフィックを分析すると、ネットワーク分析（復号化と前処理）フェーズが侵入防御（侵入ルールおよび詳細設定）フェーズとは別にその前に実行されます。

次の図に、インラインでのトラフィック分析、侵入防御、およびネットワーク展開での AMP の順序を簡略化して示します。アクセスコントロールポリシーが他のポリシーを呼び出してトラフィックを検査するしくみ、およびそれらのポリシーが呼び出される順序が示されています。ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーの選択フェーズは強調表示されています。



インライン展開（つまり、ルーテッド、スイッチド、トランスペアレントインターフェイスまたはインラインインターフェイスのペアを使用して関連設定がデバイスに展開される展開）では、システムは上図のプロセスのほぼすべての段階において、追加のインスペクションなしでトラフィックをブロックすることができます。セキュリティインテリジェンス、SSLポリシー、ネットワーク分析ポリシー、ファイルポリシー、および侵入ポリシーのすべてで、トラフィックをドロップまたは変更できます。唯一の例外として、パッシブにパケットを検査するネットワーク検出ポリシーは、トラフィックフローに影響を与えることができません。

同様に、プロセスの各ステップで、パケットによってシステムがイベントを生成する場合があります。侵入およびプリプロセスイベント（総称的に「侵入イベント」とも呼ばれる）は、パケットまたはそのコンテンツがセキュリティリスクを含んでいる可能性を示唆しています。



ヒント SSL インスペクションの設定で暗号化トラフィックの通過が許可されている場合や、SSL インスペクションが設定されていない場合について、この図は、そのような場合のアクセスコントロールルールによる暗号化トラフィックの処理を反映していません。デフォルトでは、暗号化されたペイロードの侵入インスペクションとファイルインスペクションは無効になっています。これにより、侵入およびファイルインスペクションが設定されたアクセスコントロールルールに暗号化接続が一致したときの誤検出が減少し、パフォーマンスが向上します。

単一の接続の場合は、図に示すように、アクセスコントロールルールよりも前にネットワーク分析ポリシーが選択されますが、一部の前処理（特にアプリケーション層の前処理）はアクセスコントロールルールの選択後に実行されます。これは、カスタムネットワーク分析ポリシーでの前処理の設定には影響しません。

復号化、正規化、前処理：ネットワーク分析ポリシー

デコードと前処理を実行しないと、プロトコルの相違によりパターンマッチングを行えなくなるので、侵入についてトラフィックを適切に評価できません。これらのトラフィック処理タスクは、以下のタイミングでネットワーク分析ポリシーによる処理の対象となります。

- 暗号化トラフィックがセキュリティインテリジェンスによってフィルタリングされた後
- 暗号化トラフィックがオプションのSSLポリシーによって復号化された後
- ファイルまたは侵入ポリシーによってトラフィックを検査できるようになる前

ネットワーク分析ポリシーは、フェーズでのパケット処理を制御します。最初に、システムは最初の3つのTCP/IP層を通ったパケットを復号化し、次にプロトコル異常の正規化、前処理、および検出に進みます。

- パケットデコーダは、パケットヘッダーとペイロードを、インスペクタや後で侵入ルールで簡単に使用できる形式に変換します。TCP/IPスタックの各レイヤのデコードは、データリンク層から開始され、ネットワーク層、トランスポート層へと順番に行われます。パケットデコーダは、パケットヘッダーのさまざまな異常動作も検出します。
- インライン展開では、インライン正規化プリプロセッサは、攻撃者が検出を免れる可能性を最小限にするために、トラフィックを再フォーマット（正規化）します。その他のインスペクタや侵入ルールによる検査用にパケットを準備し、システムで処理されるパケットがネットワーク上のホストで受信されるパケットと同じものになるようにします。
- ネットワーク層とトランスポート層のさまざまなインスペクタは、IPフラグメントを悪用する攻撃を検出したり、チェックサム検証を実行したり、TCP および UDP セッションの前処理を実行したりします。

トランスポートおよびネットワークインスペクタの一部の詳細設定は、アクセスコントロールポリシーのターゲットデバイスで処理されるすべてのトラフィックにグローバルに適用されます。これらの詳細設定は、ネットワーク分析ポリシーではなくアクセスコントロールポリシーで設定します。

- 各種のアプリケーション層プロトコルデコーダは、特定タイプのパケットデータを侵入ルールエンジンで分析可能な形式に正規化します。アプリケーション層プロトコルのエンコードを正規化することにより、システムはデータ表現が異なるパケットに同じコンテンツ関連の侵入ルールを効果的に適用し、大きな結果を得ることができます。
- Modbus、DNP3、CIP、および s7commplus SCADA インスペクタは、トラフィックの以上を検出し、侵入ルールにデータを提供します。Supervisory Control and Data Acquisition (SCADA) プロトコルは、製造、水処理、配電、空港、輸送システムなどの工業プロセス、インフラストラクチャプロセス、および設備プロセスからのデータをモニタ、制御、取得します。
- 一部のインスペクタでは、Back Orifice、ポートスキャン、SYN フラッドおよび他のレートベースの攻撃など、特定の脅威を検出できます。

侵入ポリシーで、ASCII テキストのクレジットカード番号や社会保障番号などの機密データを検出する機密データインスペクタを設定することに注意してください。

新たに作成されたアクセスコントロールポリシーでは、1つのデフォルトネットワーク分析ポリシーが、同じ親アクセスコントロールポリシーによって呼び出されるすべての侵入ポリシー向けのすべてのトラフィックの前処理を制御します。初期段階では、デフォルトで[バランスの取れたセキュリティと接続 (Balanced Security and Connectivity)] ネットワーク分析ポリシーが使用されますが、別のシステム付属ポリシーやカスタムネットワーク分析ポリシーに変更できます。より複雑な展開では、上級ユーザは、一致するトラフィックの前処理にさまざまなカスタムネットワーク分析ポリシーを割り当てることによって、特定のセキュリティゾーン、ネットワーク、VLAN に合わせてトラフィックの前処理オプションを調整できます。

アクセスコントロールルール：侵入ポリシーの選択

最初の前処理の後、アクセスコントロールルール（ある場合）はトラフィックを評価します。ほとんどの場合、パケットが一致した最初のアクセスコントロールルールがそのトラフィックを処理することになります。ユーザは一致したトラフィックをモニタ、信頼、ブロック、または許可することができます。

アクセスコントロールルールでトラフィックを許可すると、ディスカバリデータ、マルウェア、禁止ファイル、侵入について、この順序でトラフィックを検査できます。アクセスコントロールルールに一致しないトラフィックは、アクセスコントロールポリシーのデフォルトアクションによって処理されます。デフォルトアクションでは、ディスカバリデータと侵入についても検査できます。



- (注) どのネットワーク分析ポリシーによって前処理されるかに関わらず、すべてのパケットは、設定されているアクセスコントロールルールと上から順に照合されます（したがって、侵入ポリシーによる検査の対象となります）。

[ポリシーがトラフィックで侵入を検査する方法（6 ページ）](#) の図に、インラインの侵入防御と AMP のネットワーク展開を次のように経由するトラフィックのフローを示します。

- アクセスコントロールルール A により、一致したトラフィックの通過が許可されます。次にトラフィックは、ネットワーク検出ポリシーによるディスカバリデータの検査、ファイルポリシー A による禁止ファイルおよびマルウェアの検査、侵入ポリシー A による侵入の検査を受けます。
- アクセスコントロールルール B も一致したトラフィックを許可します。ただし、このシナリオでは、トラフィックは侵入（あるいはファイルまたはマルウェア）について検査されないため、ルールに関連付けられている侵入ポリシーやファイルポリシーはありません。通過を許可されたトラフィックは、デフォルトでネットワーク検出ポリシーによって検査されます。したがって、この設定を行う必要はありません。
- このシナリオでは、アクセスコントロールポリシーのデフォルトアクションで、一致したトラフィックを許可しています。次に、トラフィックはネットワーク検出ポリシー、さらにその後侵入ポリシーによって検査されます。アクセスコントロールルールまたはデフォルトアクションに侵入ポリシーを関連付けるときに、必要に応じて、別の侵入ポリシーを使用できます。

ブロックされたトラフィックや信頼済みトラフィックは検査されないため、図の例には、ブロックルールや信頼ルールは含まれていません。

侵入インスペクション：侵入ポリシー、ルール、変数セット

トラフィックが宛先に向かうことを許可する前に、システムの最終防御ラインとして侵入防御を使用できます。侵入ポリシーは、セキュリティ違反に関するトラフィックの検査方法を制御し、インライン展開では、悪意のあるトラフィックをブロックまたは変更することができます。

す。侵入ポリシーの主な機能は、どの侵入ルールおよびプリプロセッサルールを有効にしてどのように設定するかを管理することです。

侵入ルールとインスペクタルール

侵入ルールはキーワードと引数のセットとして指定され、ネットワーク上の脆弱性を悪用する試みを検出します。システムは侵入ルールを使用してネットワークトラフィックを分析し、トラフィックがルールの条件に合致しているかどうかをチェックします。システムは各ルールで指定された条件をパケットに照らし合わせます。ルールで指定されたすべての条件にパケットデータが一致する場合、ルールがトリガーされます。

システムには、Cisco Talos インテリジェンスグループ (Talos) によって作成された次のタイプのルールが含まれています。

- 共有オブジェクト侵入ルール：コンパイルされており、変更できません（ただし、送信元と宛先のポートや IP アドレスなどのルール ヘッダー情報を除く）。
- 標準テキスト侵入ルール：ルールの新しいカスタムインスタンスとして保存および変更できます。
- プリプロセッサルール。ネットワーク分析ポリシーのインスペクタとパケットデコーダの検出オプションが関連付けられたルールです。インスペクタルールはコピーしたり、編集したりできません。ほとんどのインスペクタルールはデフォルトで無効になっています。イベントを生成し、インライン展開で、違反パケットをドロップするためにインスペクタを使用するには、ルールを有効にする必要があります。

システムで侵入ポリシーに従ってパケットを処理する際には、最初にルール オプティマイザが、基準（トランスポート層、アプリケーションプロトコル、保護されたネットワークへの入出力方向など）に基づいて、サブセット内のすべてのアクティブなルールを分類します。次に、侵入ルールエンジンが、各パケットに適用する適切なルールのサブセットを選択します。最後に、マルチルール検索エンジンが3種類の検索を実行して、トラフィックがルールに一致するかどうかを検査します。

- プロトコル フィールド検索は、アプリケーション プロトコル内の特定のフィールドでの一致を検索します。
- 汎用コンテンツ検索は、パケット ペイロードの ASCII またはバイナリ バイトでの一致を検索します。
- パケット異常検索では、特定のコンテンツが含まれているかどうかではなく、確立されたプロトコルに違反しているパケット ヘッダーやペイロードが検索されます。

カスタム侵入ポリシーでは、ルールを有効化および無効化し、独自の標準テキストルールを記述および追加することで、検出を調整できます。Cisco 推奨機能を使用して、ネットワーク上で検出されたオペレーティングシステム、サーバー、およびクライアントアプリケーションプロトコルを、それらの資産を保護するために作成されたルールに関連付けることもできます。



- (注) ブロックルールと照合して特定のトラフィックを処理するのに十分なパケットがない場合、システムは残りのトラフィックを他のルールと照合して評価を続行します。残りのトラフィックのいずれかが、ブロックするように設定されているルールに一致すると、セッションはブロックされます。ただし、通過させる残りのトラフィックをシステムが分析すると、トラフィックステータスには、完全なパケットが不足しているルールで保留中と表示されます。

変数セット

システムは侵入ポリシーを使用してトラフィックを評価するたびに、関連する変数セットを使用します。セット内の大部分の変数は、侵入ルールで一般的に使用される値を表し、送信元および宛先の IP アドレスとポートを識別します。侵入ポリシーにある変数を使用して、ルール抑制および動的ルール状態にある IP アドレスを表すこともできます。

システムには、定義済みのデフォルト変数から構成される1つのデフォルト変数セットが含まれています。システム提供の共有オブジェクトルールと標準テキストルールは、これらの定義済みのデフォルト変数を使用してネットワークおよびポート番号を定義します。たとえば、ルールの大半は、保護されたネットワークを指定するために変数 `$HOME_NET` を使用して、保護されていない（つまり外部の）ネットワークを指定するために変数 `$EXTERNAL_NET` を使用します。さらに、特殊なルールでは、他の定義済みの変数がしばしば使用されます。たとえば、Webサーバに対するエクスプロイトを検出するルールは、`$HTTP_SERVERS` 変数および `$HTTP_PORTS` 変数を使用します。



- ヒント システム提供の侵入ポリシーを使用する場合でも、シスコでは、デフォルトセットの主要なデフォルト変数を変更すること強く推奨します。ネットワーク環境を正確に反映する変数を使用すると、処理が最適化され、システムによって疑わしいアクティビティに関連するシステムをモニタできます。高度なユーザは、1つ以上のカスタム侵入ポリシーとペアリングするために、カスタム変数セットを作成して使用できます。



- 重要 カスタム変数セットを作成する場合は、カスタム変数セット名の最初の文字として数字を使用しないでください（たとえば、3Snort）。このようにして、Management Center の Threat Defense ファイアウォールに設定を展開すると、Snort 3 の検証が失敗します。

侵入イベントの生成

侵入されている可能性を特定すると、システムは侵入イベントまたはプリプロセスイベント（まとめて侵入イベントと呼ばれることもあります）を生成します。管理対象デバイスは Management Center にイベントを送信します。ここで、集約データを確認し、ネットワークアセットに対する攻撃を的確に把握できます。インライン展開では、管理対象デバイスは、有害であると判明しているパケットをドロップまたは置き換えることができます。

データベース内の各侵入イベントにはイベントヘッダーがあり、イベント名と分類、送信元と宛先の IP アドレス、ポート、イベントを生成したプロセス、およびイベントの日時に関する情報、さらに攻撃の送信元とそのターゲットに関するコンテキスト情報が含まれています。パケットベースのイベントの場合、システムは復号化されたパケットヘッダーとイベントをトリガーしたパケット（複数の場合あり）のペイロードのコピーもログに記録します。

パケットデコーダ、プリプロセッサ、および侵入ルールエンジンはすべて、システムによるイベントの生成を引き起こします。次に例を示します。

- (ネットワーク分析ポリシーで設定された) パケットデコーダが 20 バイト（オプションやペイロードのない IP データグラムのサイズ）未満の IP パケットを受け取った場合、デコーダはこれを異常なトラフィックと解釈します。パケットを検査する侵入ポリシー内の付随するデコーダルールが有効な場合、システムは後でインスペクティブイベントを生成します。
- IP 最適化プリプロセッサが重複する一連の IP フラグメントを検出した場合、インスペクタはこれを潜在的な攻撃と解釈し、付随するインスペクタルールが有効な場合は、システムによってインスペクティブイベントが生成されます。
- 侵入ルールエンジン内では、ほとんどの標準テキストルールおよび共有オブジェクトルールはパケットによってトリガーされた場合に侵入イベントを生成するように記述されます。

データベースに侵入イベントが蓄積されると、ユーザは攻撃の可能性について分析を開始できます。システムは、ユーザが侵入イベントを確認し、ネットワーク環境とセキュリティポリシーのコンテキストでそのイベントが重要であるかどうかを評価するために必要なツールを提供します。

システム提供およびカスタムネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシー

新しいアクセスコントロールポリシーを作成することは、システムを使用してトラフィックフローを管理するための最初のステップの1つです。デフォルトでは、新しく作成されたアクセスコントロールポリシーは、システムによって提供されるネットワーク分析ポリシーおよび侵入ポリシーを呼び出してトラフィックを検査します。

次の図は、インラインの侵入防御展開で、新たに作成されたアクセスコントロールポリシーが最初にトラフィックを処理するしくみを示しています。前処理と侵入防御フェーズは強調表示されています。



以下の点に注意してください。

- デフォルトのネットワーク分析ポリシーによって、アクセスコントロールポリシーで処理されるすべてのトラフィックの前処理が制御されます。初期段階では、システムによ

て提供される *Balanced Security and Connectivity* ネットワーク分析ポリシーがデフォルトです。

- アクセス コントロール ポリシーのデフォルト アクションは、システム付属の *Balanced Security and Connectivity* 侵入ポリシーによる検査に従って、悪意のないトラフィックをすべて許可します。デフォルトアクションはトラフィックの通過を許可するので、侵入ポリシーが悪意のあるトラフィックを検査して潜在的にブロックする前に、検出機能によって、ホスト、アプリケーション、ユーザ データについてトラフィックを検査できます。
- ポリシーは、デフォルトのセキュリティ インテリジェンス オプション（グローバルなブロックリストとブロックなしリストのみ）を使用し、SSL ポリシーによる暗号化トラフィックの復号化や、アクセス コントロール ルールを使用したネットワークトラフィックの特別な処理や検査は実行しません。

侵入防御展開を調整するために実行できるシンプルなステップは、システム付属のネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーの別のセットをデフォルトとして使用することです。システムには、これらのポリシーの複数のペアが提供されています。

または、カスタムポリシーを作成して使用することで、侵入防御展開を調整できます。それらのポリシーに設定されているインスペクタオプション、侵入ルール、およびその他の詳細設定が、ネットワークのセキュリティのニーズに適合しない場合があります。設定できるネットワーク分析ポリシーおよび侵入ポリシーを調整することにより、システムがネットワーク上のトラフィックを処理して侵入の有無について検査する方法を非常にきめ細かく設定できます。

システム提供のネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシー

システムには、ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーのペアがいくつか付属しています。システムによって提供されるネットワーク分析と侵入ポリシーを使用することで、Cisco Talos インテリジェンスグループ (Talos) の経験を活用できます。これらのポリシーでは、Talos が侵入ルールとインスペクタルールの状態とともに、インスペクタやその他の詳細設定の初期設定も提供します。

すべてのネットワークプロファイル、最小トラフィック、または防御ポスタチャに対応したシステム付属ポリシーはありません。これらの各ポリシーは一般的なケースとネットワークのセットアップに対応しているため、これらのポリシーに基づいて適切に調整された防御ポリシーを策定することができます。システム付属ポリシーは、変更せずにそのまま使用できますが、カスタムポリシーのベースとして使用し、カスタムポリシーを各自のネットワークに合わせて調整することが推奨されます。



ヒント システム付属のネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーを使用する場合でも、ネットワーク環境が正確に反映されるように、システムの侵入変数を設定する必要があります。少なくとも、デフォルトのセットにある主要なデフォルトの変数を変更します。

新たな脆弱性が判明すると、Talos は侵入ルールの更新 (*Lightweight Security Package (LSP)* ともいう) をリリースします。これらのルールの更新により、システムによって提供されるネットワーク分析ポリシーや侵入ポリシーが変更され、侵入ルールやインスペクタルールの新規作

成または更新、既存ルールの状態の変更、デフォルトのポリシー設定の変更が行われます。ルールアップデートでは、システム付属のポリシーからルールが削除されたり、新しいルールカテゴリが提供されたり、さらにデフォルトの変数セットが変更されることもあります。

ルール更新によって展開が影響を受けると、Web インターフェイスは影響を受けた侵入ポリシーやネットワーク分析ポリシー、およびそれらの親のアクセスコントロールポリシーを失効したものと扱います。変更を有効にするには、更新されたポリシーを再展開する必要があります。

必要に応じて、影響を受けた侵入ポリシーを（単独で、または影響を受けたアクセスコントロールポリシーと組み合わせて）自動的に再展開するように、ルールの更新を設定できます。これにより、新たに検出されたエクスプロイトおよび侵入から保護するために展開環境を容易に自動的に最新に維持することができます。

前処理の設定を最新の状態に保つには、アクセスコントロールポリシーを再展開する**必要があります**。これにより、現在実行されているものとは異なる、関連するSSLポリシー、ネットワーク分析ポリシー、ファイルポリシーが再展開され、前処理とパフォーマンスの詳細設定オプションのデフォルト値も更新できるようになります。

システムに付属しているネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーのペアは以下のとおりです。

[バランスのとれたセキュリティと接続性 (Balanced Security and Connectivity)] ネットワーク分析ポリシーおよび侵入ポリシー

これらのポリシーは、速度と検出の両方を目的として作成されています。一緒に使用すると、ほとんどの組織および展開タイプにとって最適な出発点となります。ほとんどの場合、システムは **Balanced Security and Connectivity** のポリシーおよび設定をデフォルトとして使用します。

Connectivity Over Security ネットワーク分析ポリシーおよび侵入ポリシー

これらのポリシーは、接続（すべてのリソースに到達可能な）の方がネットワークインフラストラクチャのセキュリティより優先される組織向けに作られています。この侵入ポリシーは、**[接続性よりもセキュリティを優先 (Security over Connectivity)]** ポリシー内で有効になっているルールよりもはるかに少ないルールを有効にします。トラフィックをブロックする最も重要なルールだけが有効にされます。

[接続性よりもセキュリティを優先 (Security over Connectivity)] ネットワーク分析ポリシーおよび侵入ポリシー

これらのポリシーは、ネットワークインフラストラクチャのセキュリティがユーザの利便性より優先される組織向けに作られています。この侵入ポリシーは、正式なトラフィックに対して警告またはドロップする可能性のある膨大な数のネットワーク異常侵入ルールを有効にします。

[最大検出 (Maximum Detection)] ネットワーク分析ポリシーおよび侵入ポリシー

このポリシーは、**Security over Connectivity** ポリシー以上にネットワークインフラストラクチャのセキュリティを重視する組織のために作成されています。動作への影響がさらに高くなる可能性があります。たとえば、この侵入ポリシーでは、マルウェア、エクスプロ

イトキット、古い脆弱性や一般的な脆弱性、および既知の流行中のエクスプロイトを含め、多数の脅威カテゴリのルールを有効にします。

No Rules Active 侵入ポリシー

No Rules Active 侵入ポリシーでは、すべての侵入ルールと侵入ルールのしきい値を除くすべての詳細設定が無効にされます。このポリシーは、他のシステムによって提供されるポリシーのいずれかで有効になっているルールをベースにするのではなく、独自の侵入ポリシーを作成する場合の出発点を提供します。



(注) 選択されているシステムから提供されるベースポリシーによって、ポリシーの設定が異なります。ポリシー設定を表示するには、ポリシーの横にある [編集 (Edit)] アイコンをクリックしてから、[ベースポリシー (Base Policy)] リンクをクリックします。

カスタムネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーの利点

システムによって提供されるネットワーク分析ポリシーおよび侵入ポリシーに設定されたインスペクタオプション、侵入ルール、およびその他の詳細設定は、組織のセキュリティのニーズに十分に対応しない場合があります。

カスタム侵入ポリシーを作成すると、環境内のシステムのパフォーマンスを向上させ、ネットワークで発生する悪意のあるトラフィックやポリシー違反を重点的に観察できるようになります。設定できるカスタムポリシーを作成および調整することにより、システムがネットワーク上のトラフィックを処理して侵入の有無について検査する方法を非常にきめ細かく設定できます。

すべてのカスタムポリシーには基本ポリシー（別名「基本レイヤ」）があり、それによって、ポリシー内のすべてのコンフィギュレーションのデフォルト設定が定義されます。レイヤは、複数のネットワーク分析ポリシーまたは侵入ポリシーを効率的に管理するために使用できる構成要素です。

ほとんどの場合、カスタムポリシーはシステム付属のポリシーに基づきますが、別のカスタムポリシーを使用することもできます。ただし、すべてのカスタムポリシーには、ポリシーチェーンの根本的な基礎としてシステム付属ポリシーが含まれています。システム付属のポリシーはルールアップデートによって変更される可能性があるため、カスタムポリシーを基本として使用している場合でも、ルールアップデートをインポートするとポリシーに影響が及びます。ルール更新によって展開が影響を受けると、Web インターフェイスは影響を受けたポリシーを失効として扱います。

カスタム ネットワーク分析ポリシーの利点

デフォルトでは、1つのネットワーク分析ポリシーによって、アクセスコントロールポリシーで処理されるすべての暗号化されていないトラフィックが前処理されます。これは、侵入ポリシー（および侵入ルールセット）に関係なく、すべてのパケットが同じ設定に基づいてデコードされ、処理されることを意味します。

初期段階では、システムによって提供される **Balanced Security and Connectivity** ネットワーク分析ポリシーがデフォルトです。前処理を調整する簡単な方法は、デフォルトとしてカスタムネットワーク分析ポリシーを作成して使用することです。

使用可能な調整オプションはインスペクタによって異なりますが、インスペクタやデコーダを調整できる方法には次のものがあります。

- モニタしているトラフィックに適用しないインスペクタは無効にできます。たとえば、HTTP Inspect インスペクタはHTTP トラフィックを正規化します。ネットワークに Microsoft インターネットインフォメーションサービス (IIS) を使用する Web サーバが含まれていないことが確実な場合は、IIS 特有のトラフィックを検出するインスペクタオプションを無効にすることで、システム処理のオーバーヘッドを軽減できます。



(注) カスタムネットワーク分析ポリシーでインスペクタが無効化されているときに、パケットを有効な侵入ルールまたはインスペクタルールと照合して評価するためにインスペクタを使用する必要がある場合、システムはインスペクタを自動的に有効にして使用します。ただし、ネットワーク分析ポリシーの Web インターフェイスではインスペクタは無効のままになります。

- 必要に応じて、特定のインスペクタのアクティビティを集中させるポートを指定します。たとえば、DNS サーバの応答や暗号化 SSL セッションをモニタするための追加ポートや、Telnet、HTTP、RPC トラフィックを復号化するポートを特定できます。

複雑な環境での高度なユーザの場合は、複数のネットワーク分析ポリシーを作成し、それぞれがトラフィックを別々に前処理するように調整することができます。さらに、トラフィックのセキュリティゾーン、ネットワーク、または VLAN に応じて前処理が制御されるようにこれらのポリシーを設定できます (ASA FirePOWER モジュールでは、VLAN による前処理を制限することはできません)。



(注) カスタムネットワーク分析ポリシー (特に複数のネットワーク分析ポリシー) を使用して前処理を調整することは、高度なタスクです。前処理と侵入インスペクションは非常に密接に関連しているため、単一のパケットを検査するネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーが相互補完することを許可する場合は、注意する**必要があります**。

カスタム侵入ポリシーの利点

侵入防御を実行するように初期設定して、新規にアクセス コントロール ポリシーを作成した場合、そのポリシーでは、デフォルトアクションはすべてのトラフィックを許可しますが、最初にシステム付属の **Balanced Security and Connectivity** 侵入ポリシーでトラフィックをチェックします。アクセス コントロール ルールを追加するか、またはデフォルトアクションを変更しない限り、すべてのトラフィックがその侵入ポリシーによって検査されます。

侵入防御展開をカスタマイズするために、複数の侵入ポリシーを作成し、それぞれがトラフィックを異なる方法で検査するように調整できます。次に、どのポリシーがどのトラフィックを検

査するかを指定するルールを、アクセスコントロールポリシーに設定します。アクセスコントロールルールは単純でも複雑でもかまいません。セキュリティゾーン、ネットワークまたは地理的位置、VLAN、ポート、アプリケーション、要求されたURL、またはユーザなど、複数の基準を使用してトラフィックを照合および検査します。

侵入ポリシーの主な機能は、次のように、どの侵入ルールやインスペクタールールを有効にし、どのように設定するかを管理することです。

- 各侵入ポリシーで、環境に適用されるすべてのルールが有効になっていることを確認し、環境に適用されないルールを無効化することによって、パフォーマンスを向上させます。どのルールで悪質なパケットをドロップまたは変更するかを指定できます。
- Cisco 推奨機能を使用すると、ネットワーク上で検出されたオペレーティングシステム、サーバー、およびクライアントアプリケーションプロトコルを、それらの資産を保護するために作成されたルールに関連付けることができます。
- 必要に応じて、既存のルールの変更や、新しい標準テキストルールの作成により、新たなエクスプロイトの検出やセキュリティポリシーの適用が可能です。

侵入ポリシーに対して行えるその他のカスタマイズは次のとおりです。

- 機密データプリプロセッサは、ASCII テキストのクレジットカード番号や社会保障番号などの機密データを検出します。特定の脅威（Back Orifice 攻撃、何種類かのポートスキャン、および過剰なトラフィックによってネットワークを過負荷状態に陥らせようとするレートベース攻撃）を検出する他のインスペクタは、ネットワーク分析ポリシーで設定します。
- グローバルしきい値を設定すると、侵入ルールに一致するトラフィックが、指定期間内に特定のアドレスまたはアドレス範囲で送受信される回数に基づいて、イベントが生成されます。これにより、大量のイベントによってシステムに過剰な負荷がかかることを回避できます。
- また、個々のルールまたは侵入ポリシー全体に対して、侵入イベント通知を抑制し、しきい値を設定することで、大量のイベントによってシステムに過剰な負荷がかかることを回避することもできます。
- Web インターフェイス内での侵入イベントをさまざまな形式で表示することに加えて、syslog ファシリティへのロギングを有効にしたり、イベントデータを SNMP トラップサーバに送信したりできます。ポリシーごとに、侵入イベントの通知限度を指定したり、外部ロギングファシリティに対する侵入イベントの通知をセットアップしたり、侵入イベントへの外部応答を設定したりできます。これらのポリシー単位のアラート設定に加えて、各ルールまたはルールグループの侵入イベントを通知する電子メールアラートをグローバルに有効化/無効化できます。どの侵入ポリシーがパケットを処理するかに関わらず、ユーザの電子メールアラート設定が使用されます。

カスタム ポリシーの制限

前処理と侵入インスペクションは非常に密接に関連しているため、単一のパケットを処理および検査する、ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーが相互補完することを設定で許可する場合は、注意する**必要があります**。

デフォルトでは、システムは、管理対象デバイスでアクセス コントロール ポリシーにより処理されるすべてのトラフィックを、1つのネットワーク分析ポリシーを使用して前処理します。次の図は、インラインの侵入防御展開で、新たに作成されたアクセス コントロール ポリシーが最初にトラフィックを処理するしくみを示しています。前処理と侵入防御フェーズは強調表示されています。



アクセス コントロール ポリシーで処理されるすべてのトラフィックの前処理が、デフォルトのネットワーク分析ポリシーによってどのように制御されるのか注意してください。初期段階では、システムによって提供される **Balanced Security and Connectivity** ネットワーク分析ポリシーがデフォルトです。

前処理を調整する簡単な方法は、デフォルトとしてカスタムネットワーク分析ポリシーを作成して使用することです。ただし、カスタムネットワーク分析ポリシーでインスペクタを無効にしたときに、前処理されたパケットを有効な侵入ルールまたはインスペクトルールと照合して評価する必要がある場合、システムはインスペクタを自動的に有効にして使用します。ただし、ネットワーク分析ポリシーの **Web** インターフェイスではインスペクタは無効なままになります。



(注) インスペクタを無効にするパフォーマンス上の利点を得るには、侵入ポリシーでそのインスペクタを必要とするルールが有効になっていないことを確認する**必要があります**。

複数のカスタムネットワーク分析ポリシーを使用する場合は、さらに課題があります。複雑な展開内の上級ユーザの場合は、一致したトラフィックの前処理にカスタムネットワーク分析ポリシーを割り当てることによって、特定のセキュリティゾーン、ネットワーク、VLAN に合わせて前処理を調整できます。(ASA FirePOWER では、VLAN による前処理を制限することはできません)。これを実現するには、アクセスコントロールポリシーにカスタムネットワーク分析ルールを追加します。各ルールにはネットワーク分析ポリシーが関連付けられており、ルールに一致するトラフィックの前処理を制御します。

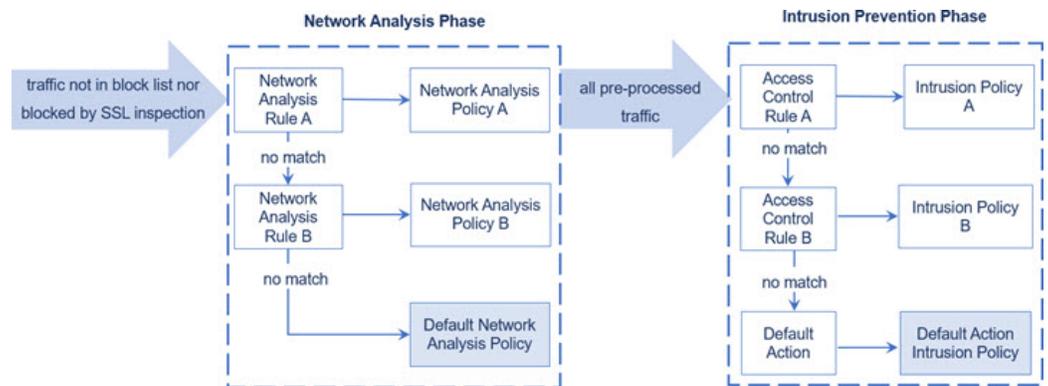


ヒント アクセス コントロール ポリシーの詳細設定としてネットワーク分析ルールを設定します。他のタイプのルールとは異なり、ネットワーク分析ルールは、ネットワーク分析ポリシーに含まれているのではなく、ネットワーク分析ポリシーを呼び出します。

システムは、ルール番号の昇順で、設定済みネットワーク分析ルールとパケットを照合します。いずれのネットワーク分析ルールにも一致しないトラフィックは、デフォルトのネット

ワーク分析ポリシーによって前処理されます。これにより非常に柔軟にトラフィックを前処理できます。ただし、留意すべき点として、パケットがどのネットワーク分析ポリシーによって前処理されるかに**関係なく**、すべてのパケットは、それら独自のプロセスにおいて引き続きアクセスコントロールルールと照合されます（つまり、侵入ポリシーにより検査される可能性があります）。つまり、特定のネットワーク分析ポリシーでパケットを前処理しても、そのパケットが確実に特定の侵入ポリシーで検査されるわけでは**ありません**。アクセスコントロールポリシーを設定するときは、そのポリシーが正しいネットワーク分析ポリシーおよび侵入ポリシーを呼び出して特定の packets を評価するように、慎重に行う**必要があります**。

次の図は、侵入防御（ルール）フェーズよりも前に、別にネットワーク分析ポリシー（前処理）の選択フェーズが発生するしくみを詳細に示しています。簡略化するために、図では検出フェーズとファイル/マルウェア インспекション フェーズが省かれています。また、デフォルトのネットワーク分析ポリシーおよびデフォルトアクションの侵入ポリシーを強調表示しています。



このシナリオでは、アクセスコントロールポリシーに、2つのネットワーク分析ルールとデフォルトのネットワーク分析ポリシーが設定されています。

- Network Analysis Rule A は、一致するトラフィックを Network Analysis Policy A で前処理します。その後、このトラフィックを Intrusion Policy A で検査されるようにすることができます。
- Network Analysis Rule B は、一致するトラフィックを Network Analysis Policy B で前処理します。その後、このトラフィックを Intrusion Policy B で検査されるようにすることができます。
- 残りのトラフィックはすべて、デフォルトのネットワーク分析ポリシーにより前処理されます。その後、このトラフィックをアクセスコントロールポリシーのデフォルトアクションに関連付けられた侵入ポリシーによって検査されるようにすることができます。

システムはトラフィックを前処理した後、侵入についてトラフィックを検査できます。図では、2つのアクセスコントロールルールとデフォルトアクションが含まれるアクセスコントロールポリシーを示しています。

- アクセスコントロールルール A は、一致したトラフィックを許可します。トラフィックはその後、Intrusion Policy A によって検査されます。

- アクセス コントロール ルール B は、一致したトラフィックを許可します。トラフィックはその後、Intrusion Policy B によって検査されます。
- アクセス コントロール ポリシーのデフォルト アクションは一致したトラフィックを許可します。トラフィックはその後、デフォルトアクションの侵入ポリシーによって検査されます。

各パケットの処理は、ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーのペアにより制御されますが、このペアはユーザに合わせて調整**されません**。アクセス コントロール ポリシーが誤って設定されているため、ネットワーク分析ルール A とアクセス コントロール ルール A が同じトラフィックを処理しない場合を想定してください。たとえば、特定のセキュリティゾーンのトラフィックの処理をポリシーペアによって制御することを意図している場合に、誤まって、異なるゾーンを使用するように2つのルールの条件を設定したとします。この誤設定により、トラフィックが誤って前処理される可能性があります。したがって、ネットワーク分析ルールおよびカスタム ポリシーを使用した前処理の調整は、**高度なタスク**です。

単一の接続の場合は、アクセス コントロール ルールよりも前にネットワーク分析ポリシーが選択されますが、一部の**前処理**（特にアプリケーション層の前処理）はアクセスコントロールルールの選択後に実行されます。これは、カスタムネットワーク分析ポリシーでの前処理の設定には**影響しません**。

ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件

Snort 検査エンジンが侵入およびマルウェア分析のトラフィックを処理できるようにするには、Threat Defense デバイスに対して IPS ライセンスを有効にする必要があります。

ネットワーク分析、侵入ポリシーを管理し、移行タスクを実行するには、管理者ユーザーである必要があります。



第 2 章

Snort 2 から Snort 3 への移行

Management Center を使用した 脅威に対する防御 での Snort 3 はバージョン 7.0 以降でサポートされます。新規および再イメージ化されたデバイスの場合、Snort 3 がデフォルトの検査エンジンになります。

Threat Defense のバージョン 7.2 以降へのアップグレードの一環として、構成を展開するときに、対象デバイスを Snort 2 から Snort 3 に自動的にアップグレードできます。カスタム侵入ポリシーやネットワーク分析ポリシーを使用しているためにデバイスが自動アップグレード対象外になる場合は、この章で説明しているように、手動で Snort 3 にアップグレードする必要があります。

- [Snort 3 検査エンジン \(21 ページ\)](#)
- [ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件 \(22 ページ\)](#)
- [Snort 2 から Snort 3 への移行方法 \(22 ページ\)](#)
- [Snort 2 と Snort 3 のベースポリシーのマッピングの表示 \(26 ページ\)](#)
- [Snort 2 のルールと Snort 3 の同期 \(26 ページ\)](#)
- [設定変更の展開 \(28 ページ\)](#)

Snort 3 検査エンジン

Snort 3 は、バージョン 7.0 以降の新規登録 脅威に対する防御 デバイスのデフォルト検査エンジンです。ただし、下位バージョンの 脅威に対する防御 デバイスでは、Snort 2 がデフォルトの検査エンジンです。管理対象の脅威に対する防御 デバイスをバージョン 7.0 以降にアップグレードしても、検査エンジンは Snort 2 のままです。バージョン 7.0 以降のアップグレードされた 脅威に対する防御 で Snort 3 を使用するには、明示的に有効にする必要があります。Snort 3 をデバイスの検査エンジンとして有効にすると、(アクセスコントロールポリシーを介して) デバイ스에適用される侵入ポリシーの Snort 3 バージョンがアクティブ化され、デバイスを通過するすべてのトラフィックに適用されます。

必要に応じて Snort のバージョンを切り替えることができます。Snort 2 と Snort 3 の侵入ルールがマッピングされ、マッピングはシステムによって実行されます。ただし、Snort 2 と Snort 3 のすべての侵入ルールの 1 対 1 のマッピングが見つからない場合があります。Snort 2 で 1 つのルールのルールアクションを変更した場合、Snort 2 と Snort 3 を同期せずに Snort 3 に切り替え

ると、その変更は保持されません。同期の詳細については、[Snort 2 のルールと Snort 3 の同期 \(26 ページ\)](#) を参照してください。

ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件

Snort 検査エンジンが侵入およびマルウェア分析のトラフィックを処理できるようにするには、Threat Defense デバイスに対して IPS ライセンスを有効にする必要があります。

ネットワーク分析、侵入ポリシーを管理し、移行タスクを実行するには、管理者ユーザーである必要があります。

Snort 2 から Snort 3 への移行方法

Snort 2 から Snort 3 に移行するには、脅威に対する防御 デバイスの検査エンジンを Snort 2 から Snort 3 に切り替える必要があります。

要件に応じて、Snort 2 から Snort 3 へのデバイスの移行を完了するためのタスクを次の表に示します。

ステップ	タスク	手順へのリンク
1	Snort 3 の有効化	<ul style="list-style-type: none"> • 個々のデバイス上での Snort 3 の有効化 (23 ページ) • 複数のデバイスでの Snort 3 の有効化 (23 ページ)
2	Snort 2 のカスタムルールの Snort 3 への変換	<ul style="list-style-type: none"> • すべての侵入ポリシーのすべての Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換 (25 ページ) • 単一の侵入ポリシーの Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換 (25 ページ)
3	Snort 2 のルールと Snort 3 の同期	Snort 2 のルールと Snort 3 の同期 (26 ページ)

Snort 2 から Snort 3 への移行の前提条件

以下は、デバイスを Snort 2 から Snort 3 に移行する前に考慮する必要がある推奨される前提条件です。

- Snort の実用的な知識を持っている。Snort 3 アーキテクチャの詳細については、[Snort 3 Adoption](#) を参照してください。

- Management Center をバックアップする。「[Backup the Management Center](#)」を参照してください。
- 侵入ポリシーをバックアップする。「[Exporting Configurations](#)」を参照してください。
- 侵入ポリシーを複製する。複製する場合、既存のポリシーをベースポリシーとして使用して、侵入ポリシーのコピーを作成できます。[侵入ポリシー (Intrusion Policies)] ページで、[ポリシーの作成 (Create Policy)] をクリックし、[ベースポリシー (Base Policy)] ドロップダウンリストから既存の侵入ポリシーを選択します。

個々のデバイス上での Snort 3 の有効化



重要 展開プロセス中に現在の検査エンジンをシャットダウンする必要があるため、一時的なトラフィック損失が発生します。

ステップ 1 [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] の順に選択します。

ステップ 2 デバイスをクリックして、デバイスのホームページに移動します。

(注) デバイスは Snort 2 または Snort 3 としてマークされ、デバイスの現在のバージョンが表示されます。

ステップ 3 [デバイス (Device)] タブをクリックします。

ステップ 4 [検査エンジン (Inspection Engine)] セクションで、[アップグレード (Upgrade)] をクリックします。

(注) Snort 3 を無効にする場合は、[検査エンジン (Inspection Engine)] セクションで [Snort 2 に戻す (Revert to Snort 2)] をクリックします。

ステップ 5 [はい (Yes)] をクリックします。

次のタスク

デバイスに変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

選択した Snort バージョンとの互換性を得るため、システムは展開プロセス中にポリシー設定を変換します。

複数のデバイスでの Snort 3 の有効化

複数のデバイスで Snort 3 を有効にするには、必要なすべての脅威に対する防御 デバイスがバージョン 7.0 以降であることを確認します。



重要 展開プロセス中に現在の検査エンジンをシャットダウンする必要があるため、一時的なトラフィック損失が発生します。

ステップ 1 [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] の順に選択します。

ステップ 2 Snort 3 を有効または無効にするすべてのデバイスを選択します。

(注) デバイスは Snort 2 または Snort 3 としてマークされ、デバイスの現在のバージョンが表示されます。

ステップ 3 [一括アクションの選択 (Select Bulk Action)] ドロップダウンリストをクリックし、[Snort 3 へのアップグレード (Upgrade to Snort 3)] を選択します。

(注) Snort 3 を無効にするには、[Snort 2 へのダウングレード (Downgrade to Snort 2)] をクリックします。

ステップ 4 [はい (Yes)] をクリックします。

次のタスク

デバイスに変更を展開します。 [設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

選択した Snort バージョンとの互換性を得るため、システムは展開プロセス中にポリシー設定を変換します。

Snort 2 のカスタム IPS ルールの Snort 3 への変換

サードパーティベンダーのルールセットを使用している場合は、そのベンダーに連絡して、そのルールが Snort 3 に正常に変換されることを確認するか、または Snort 3 用にネイティブで作成された代替のルールセットを取得します。独自に作成したカスタムルールがある場合は、変換前に Snort 3 ルールの作成に慣れておくと、変換後の Snort 3 検出を最適化するようにルールを更新できます。Snort 3 でのルールの作成の詳細については、次のリンクを参照してください。

- <https://blog.snort.org/2020/08/how-rules-are-improving-in-snort-3.html>
- <https://blog.snort.org/2020/10/talos-transition-to-snort-3.html>

Snort 3 ルールの詳細については、<https://blog.snort.org/> にある他のブログを参照してください。

システム提供のツールを使用して Snort 2 ルールを Snort 3 ルールに変換するには、次の手順を参照してください。

- [すべての侵入ポリシーのすべての Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換 \(25 ページ\)](#)
- [単一の侵入ポリシーの Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換 \(25 ページ\)](#)



重要 Snort 2 ネットワーク分析ポリシー (NAP) の設定を Snort 3 に自動的にコピーすることはできません。NAP 設定は、Snort 3 で手動で複製する必要があります。

すべての侵入ポリシーのすべての Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] > [侵入ルール (Intrusion Rules)] をクリックします。

ステップ 2 [Snort 3 のすべてのルール (Snort 3 All Rules)] タブをクリックします。

ステップ 3 左側のペインで [すべてのルール (All Rules)] が選択されていることを確認します。

ステップ 4 [タスク (Tasks)] ドロップダウンリストから値を選択します。

- **[Snort 2 ルールの変換とインポート (Convert Snort 2 rules and import)]** : すべての侵入ポリシーのすべての Snort 2 カスタムルールを Snort 3 に自動的に変換し、Snort 3 カスタムルールとして Management Center にインポートします。
- **[Snort 2 ルールの変換とダウンロード (Convert Snort 2 rules and download)]** : すべての侵入ポリシーのすべての Snort 2 カスタムルールを Snort 3 に自動的に変換し、それらをローカルシステムにダウンロードします。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

- (注)
- 前の手順で [変換してインポート (Convert and import)] を選択した場合は、変換されたすべてのルールが、[ローカルルール (Local Rules)] の下に新しく作成されたルールグループ [すべての Snort 2 をグローバルに変換 (All Snort 2 Converted Global)] の下に保存されます。
 - 前の手順で [変換してダウンロード (Convert and download)] を選択した場合は、ルールファイルをローカルに保存します。ダウンロードしたファイル内の変換済みのルールを確認します。後で [ルールグループへのカスタムルールの追加 \(54 ページ\)](#) の手順に従ってアップロードできます。

追加のサポートと情報については、「[Snort 2 ルールの Snort 3 への変換](#)」ビデオを参照してください。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

単一の侵入ポリシーの Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 [侵入ポリシー (Intrusion Policies)] タブで、[Snort 3同期ステータスの表示 (Show Snort 3 Sync status)] をクリックします。

ステップ 3 侵入ポリシーの [同期 (Sync)] アイコン () をクリックします。

(注) 侵入ポリシーの Snort 2 バージョンと Snort 3 バージョンが同期されている場合は、[同期 (Sync)] アイコンが緑色の  で表示されます。変換するカスタムルールがないことを示します。

ステップ 4 サマリーを読み、[カスタムルール (Custom Rules)] タブをクリックします。

ステップ 5 次のどちらかを選択します。

- [変換後のルールをこのポリシーにインポートする (Import converted rules to this policy)] : 侵入ポリシーの Snort 2 カスタムルールを Snort 3 に変換し、Snort 3 カスタムルールとして Management Center にインポートします。
- [変換後のルールのダウンロード (Download converted rules)] : 侵入ポリシーの Snort 2 カスタムルールを Snort 3 に変換し、ローカルシステムにダウンロードします。ダウンロードしたファイル内の変換後のルールを確認し、後でアップロードアイコンをクリックしてファイルをアップロードできます。

ステップ 6 [再同期 (Re-Sync)] をクリックします。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

Snort 2 と Snort 3 のベースポリシーのマッピングの表示

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 [侵入ポリシー (Intrusion Policies)] タブが選択されていることを確認します。

ステップ 3 [IPS マッピング (IPS Mapping)] をクリックします。

ステップ 4 [IPSポリシーマッピング (IPS Policy Mapping)] ダイアログボックスで、[マッピングの表示 (View Mappings)] をクリックして、Snort 3 から Snort 2 への侵入ポリシーのマッピングを表示します。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

Snort 2 のルールと Snort 3 の同期

Snort 2 のバージョン設定とカスタムルールが保持され、Snort 3 に引き継がれるための同期機能が Management Center によって提供されます。同期することで、過去数か月または数年にわたって変更または追加されている可能性がある、Snort 2 ルールのオーバーライド設定とカスタ

ムルールを Snort 3 バージョンで複製できます。このユーティリティは、Snort 2 バージョンのポリシー設定を Snort 3 バージョンと同期して、同様の対象範囲で開始するのに役立ちます。

Management Center を 6.7 より前のバージョンから 7.0 以降のバージョンにアップグレードすると、設定が同期されます。Management Center が新しい 7.0 移行のバージョンの場合、より高いバージョンにアップグレードできますが、アップグレード中にコンテンツは同期されません。

デバイスを Snort 3 にアップグレードする前に、Snort 2 バージョンで変更が行われた場合は、このユーティリティを使用して Snort 2 バージョンから Snort 3 バージョンに最新の同期を行うことができ、同様の対象範囲で開始できます。



(注) Snort 3 への移行時に、Snort 3 バージョンのポリシーを別個に管理し、通常の運用としてこのユーティリティを使用しないことを推奨します。

**重要**

- Snort 2 ルールのオーバーライドとカスタムルールのみが Snort 3 にコピーされ、その逆は行われません。Snort 2 と Snort 3 のすべての侵入ルールの 1 対 1 のマッピングが見つからない場合があります。次の手順を実行すると、両方のバージョンに存在するルールのルールアクションに対する変更が同期されます。
- 同期では、カスタムまたはシステムによって提供されるルールのしきい値と抑制の設定は Snort 2 から Snort 3 に移行されません。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 [侵入ポリシー (Intrusion Policies)] タブが選択されていることを確認します。

ステップ 3 [Snort 3 の同期ステータスの表示 (Show Snort 3 Sync status)] をクリックします。

ステップ 4 同期していない侵入ポリシーを特定します。

ステップ 5 [同期 (Sync)] アイコン  をクリックします。

(注) 侵入ポリシーの Snort 2 バージョンと Snort 3 バージョンが同期されている場合は、[同期 (Sync)] アイコンが緑色の  で表示されます。

ステップ 6 サマリーを読み、必要に応じてサマリーのコピーをダウンロードします。

ステップ 7 [再同期 (Re-Sync)] をクリックします。

- (注)
- 同期された設定は、Snort 3 侵入エンジンがデバイスに適用され、展開が成功した後にのみ適用されます。
 - Snort 2 カスタムルールは、システム付属のツールを使用して Snort 3 に変換できます。Snort 2 カスタムルールがある場合は、[カスタムルール (Custom Rules)] タブをクリックし、画面の指示に従ってルールを変換します。詳細については、[単一の侵入ポリシーの Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換 \(25 ページ\)](#) を参照してください。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

設定変更の展開

設定を変更した後に、影響を受けるデバイスに展開します。



- (注) このトピックでは、設定変更を展開する基本的な手順について説明します。手順を進める前に、最新バージョンの『Cisco Secure Firewall Management Center Configuration Guide』の「Deploy Configuration Changes」トピックを参照し、変更を展開する上での前提条件と影響を理解しておくことを強く推奨します。



- 注意** 展開する際にリソースを要求すると、いくつかのパケットがインスペクションなしでドロップされることがあります。また、一部のコンフィギュレーションを展開すると、トラフィックのインスペクションを中断する Snort プロセスが再開します。この中断中にトラフィックがドロップされるか、それ以上インスペクションが行われずに受け渡されるかは、ターゲットデバイスがトラフィックを処理する方法に応じて異なります。

ステップ 1 Secure Firewall Management Center メニューバーで、[展開 (Deploy)] をクリックし、[展開 (Deployment)] を選択します。

[GUI] ページには、期限切れの設定を持ち、ステータスが [保留中 (Pending)] のデバイスのリストが表示されます。

- [変更者 (Modified by)] 列には、ポリシーまたはオブジェクトを変更したユーザーの一覧が表示されます。デバイスリストを展開すると、ポリシーリストごとのポリシーを変更したユーザーが表示されます。

(注) 削除されたポリシーおよびオブジェクトのユーザ名は表示されません。

- [インスペクションの中断 (Inspect Interruption)] 列には、展開時にデバイスでトラフィック インスペクションの中断が発生する可能性があるかどうかが表示されます。
デバイスのこの列のエントリが空白の場合は、展開時にそのデバイス上でのトラフィック インスペクションが中断されないことを示します。
- [最終変更時刻 (Last Modified Time)] 列は、最後に設定変更を行った時刻を示します。
- [プレビュー (Preview)] 列では、次の展開の変更をプレビューできます。
- [ステータス (Status)] 列には、各展開のステータスが表示されます。

ステップ 2 設定変更を展開するデバイスを特定して選択します。

- [検索 (Search)] : [検索 (Search)] ボックスのデバイス名、タイプ、ドメイン、グループ、またはステータスを検索します。
- [展開 (Expand)] : 展開するデバイス固有の設定変更を表示するには、**展開矢印** ([展開矢印 (expand arrow)] アイコン [展開矢印 (expand arrow)] ▶ アイコン) をクリックします。

デバイスの横にあるチェックボックスをオンにすると、デバイスに加えられ、デバイスの下にリストされているすべての変更が展開のためにプッシュされます。ただし、**ポリシーの選択** ([ポリシーの選択 (policy selection)] アイコン [ポリシーの選択 (policy selection)] 🗑️ アイコン) を使用して展開する個々のポリシーや特定の設定を選択し、残りの変更は展開せずに保持することができます。

- (注)
- [インスペクションの中断 (Inspect Interruption)] 列のステータスに [あり (Yes)] と表示され、展開によって脅威に対する防御デバイスでインスペクションと、場合によってはトラフィックが中断される場合は、展開されたリストには中断の原因となった特定の設定が **インスペクションの中断** ([インスペクションの中断 (inspect interruption)] アイコン [インスペクションの中断 (inspect interruption)] 🚫 アイコン) で示されます。
 - インターフェイスグループ、セキュリティゾーン、またはオブジェクトに変更がある場合、影響を受けるデバイスは、**Management Center** で失効として表示されます。これらの変更が有効になるようにするには、これらのインターフェイスグループ、セキュリティゾーン、またはオブジェクトを含むポリシーも、これらの変更とともに展開する必要があります。影響を受けるポリシーは、**Management Center** の [プレビュー (Preview)] ページに失効として表示されます。

ステップ 3 [展開 (Deploy)] をクリックします。

ステップ 4 展開する変更に関するエラーや警告がシステムによって識別された場合は、[検証メッセージ (Validation Messages)] ウィンドウにその内容が表示されます。完全な詳細を表示するには、警告またはエラーの前にある矢印アイコンをクリックします。

次の選択肢があります。

- [展開 (Deploy)] : 警告状態を解決せずに展開を続行します。システムがエラーを確認した場合は続行できません。

- [閉じる (Close)] : 展開せずに終了します。エラーおよび警告状態を解決し、設定の再展開を試行します。

次のタスク

展開中に展開が失敗した場合、その障害がトラフィックに影響を与える可能性があります。ただし、特定の条件によって異なります。展開に特定の設定変更がある場合、展開の失敗によってトラフィックが中断されることがあります。詳細については、最新バージョンの『*Cisco Secure Firewall Management Center Configuration Guide*』の「Deploy Configuration Changes」のトピックを参照してください。



第 1 部

Snort 3 での侵入検知と防御

- [Snort 3 侵入ポリシーを開始するには \(33 ページ\)](#)
- [ルールを使用した侵入ポリシーの調整 \(41 ページ\)](#)
- [ネットワーク資産に応じた侵入防御の調整 \(59 ページ\)](#)



第 3 章

Snort 3 侵入ポリシーを開始するには

この章では、侵入検知と防御のための Snort 3 侵入ポリシーとアクセス制御ルール設定の管理について説明します。

- [侵入ポリシーの概要 \(33 ページ\)](#)
- [ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件 \(35 ページ\)](#)
- [カスタム Snort 3 侵入ポリシーの作成 \(35 ページ\)](#)
- [Snort 3 侵入ポリシーの編集 \(35 ページ\)](#)
- [侵入ポリシーのベースポリシーの変更 \(36 ページ\)](#)
- [侵入ポリシーの管理 \(37 ページ\)](#)
- [侵入防御を実行するためのアクセスコントロールルール設定 \(38 ページ\)](#)

侵入ポリシーの概要

侵入ポリシーは定義済みの侵入検知のセットであり、セキュリティ違反についてトラフィックを検査し、インライン展開の場合は、悪意のあるトラフィックをブロックまたは変更することができます。侵入ポリシーは、アクセスコントロールポリシーによって呼び出され、システムの最終防御ラインとして、トラフィックが宛先に到達することを許可するかどうかを判定します。

各侵入ポリシーの中核となるのは、侵入ルールです。ルールを有効にすると、ルールに一致するトラフィックに対して侵入イベントが生成されます（さらに、必要に応じてトラフィックがブロックされます）。ルールを無効にすると、ルールの処理が停止されます。

システムによって提供されるいくつかの基本侵入ポリシーにより、Cisco Talos Intelligence Group (Talos) の経験を活用できます。これらのポリシーでは、Talos が侵入ルールとインスペクタールールの状態（有効または無効）を設定し、他の詳細設定の初期設定も行います。



ヒント システム提供の侵入ポリシーとネットワーク分析ポリシーには同じような名前が付けられていますが、異なる設定が含まれています。たとえば、「Balanced Security and Connectivity」ネットワーク分析ポリシーと「Balanced Security and Connectivity」侵入ポリシーは連携して動作し、どちらも侵入ルールのアップデートで更新できます。ただし、ネットワーク分析ポリシーは主に前処理オプションを管理し、侵入ポリシーは主に侵入ルールを管理します。

カスタム侵入ポリシーを作成すると、以下を実行できます。

- ルールを有効化/無効化することに加え、独自のルールを作成して追加し、検出を調整する。
- ネットワーク上で検出されたオペレーティングシステム、サーバー、およびクライアントアプリケーションプロトコルをそれらの資産を保護するために明確に書き込まれたルールに関連付けるには、Secure Firewall の推奨事項を使用します。

侵入ポリシーは一致するパケットをドロップして、侵入イベントを生成できます。侵入またはプリプロセッサのドロップルールを設定するには、その状態を [ブロック (Block)] に設定します。

留意事項として、侵入ポリシーを調整する場合（特にルールを有効化して追加する場合）、一部の侵入ルールでは、最初に特定の方法でトラフィックをデコードまたは前処理する必要があります。侵入ポリシーによって検査される前に、パケットはネットワーク分析ポリシーの設定に従って前処理されます。必要なインスペクタを無効にすると、システムは自動的に現在の設定でインスペクタを使用します。ただし、ネットワーク分析ポリシーの Web インターフェイスではインスペクタは無効のままになります。



注意 前処理と侵入インスペクションは非常に密接に関連しているため、単一パケットを検査するネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーは、相互補完する**必要があります**。前処理の調整、特に複数のカスタム ネットワーク分析ポリシーを使用して調整することは、**高度なタスク**です。

カスタム侵入ポリシーを設定した後、それを1つ以上のアクセスコントロールルールまたはアクセスコントロールポリシーのデフォルトアクションに関連付けることによって、カスタム侵入ポリシーをアクセスコントロール設定の一部として使用できます。これによって、システムは、最終宛先に渡す前に、特定の許可されたトラフィックを侵入ポリシーによって検査します。変数セットを侵入ポリシーと組み合わせて使用することにより、ホームネットワークと外部ネットワークに加えて、必要に応じてネットワーク上のサーバを正確に反映させることができます。

デフォルトでは、暗号化ペイロードの侵入インスペクションは無効化されます。これにより、侵入インスペクションが設定されているアクセスコントロールルールと暗号化された接続を照合する際の誤検出が減少し、パフォーマンスが向上します。

追加のサポートと情報については、「[Snort 3 侵入ポリシーの概要](#)」ビデオを参照してください。

ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件

Snort 検査エンジンが侵入およびマルウェア分析のトラフィックを処理できるようにするには、Threat Defense デバイスに対して IPS ライセンスを有効にする必要があります。

ネットワーク分析、侵入ポリシーを管理し、移行タスクを実行するには、管理者ユーザーである必要があります。

カスタム Snort 3 侵入ポリシーの作成

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 [ポリシーの作成 (Create Policy)] をクリックします。

ステップ 3 [名前 (Name)] に一意の名前を入力し、オプションで [説明 (Description)] を入力します。

ステップ 4 [検査モード (Inspection Mode)] を選択します。

選択したアクションによって、侵入ルールでブロックしてアラートを発生させるか (**防御モード**)、またはアラートを発生させるのみにするか (**検出モード**) が決まります。

(注) 防御モードを選択する前に、多くの誤検出の原因となるルールを特定できるように、ブロックルールのみでアラートを発生させることができます。

ステップ 5 [ベースポリシー (Base Policy)] を選択します。

システム提供のポリシーまたは既存のポリシーをベースポリシーとして使用できます。

ステップ 6 [保存 (Save)] をクリックします。

新しいポリシーにはベースポリシーと同じ設定項目が含まれています。

次のタスク

ポリシーをカスタマイズするには、[Snort 3 侵入ポリシーの編集 \(35 ページ\)](#) を参照してください。

Snort 3 侵入ポリシーの編集

Snort 3 ポリシーを編集している間、すべての変更は即座に保存されます。変更を保存するための追加のアクションは必要ありません。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

ルールアクションのロギング

Management Center 7.2.0 以降、[侵入イベント (Intrusion Events)] ページの [インライン結果 (Inline Result)] 列のイベントには、ルールに適用された IPS アクションと同じ名前が表示されるため、ルールに一致するトラフィックに適用されたアクションを確認できます。

IPS アクションについて、次の表に、[侵入イベント (Intrusion Events)] ページの [インライン結果 (Inline Result)] 列と、[統合されたイベント (Unified Events)] ページの [侵入イベントタイプ (Intrusion Event Type)] の [アクション (Action)] 列に表示されるイベントを示します。

IPS アクション (Snort 3)	インライン結果 - Management Center 7.1.0 以前	インライン結果 - Management Center 7.2.0 以降
アラート	成功 (Pass)	アラート
ブロック	Dropped/Would Have Dropped/Partially Dropped	Block/Would Block/Partial Block
削除 (Drop)	Dropped/Would have dropped	Drop/Would drop
拒否 (Reject)	Dropped/Would have dropped	Reject/Would reject
書き換え	[許可 (Allow)]	書き換え



重要

- [置換 (Replace)] オプションのないルールの場合、書き換えアクションは「**Would Rewrite**」と表示されます。
- また、[置換 (Replace)] オプションが指定されているが、IPS ポリシーが検出モードであるか、デバイスがインライン TAP/パッシブモードである場合に、書き換えアクションは「**Would Rewrite**」と表示されます。



- (注) 後方互換性の場合 (Management Center 7.2.0 が Threat Defense 7.1.0 デバイスを管理している)、言及されているイベントは、[成功 (Pass)] がイベントの [アラート (Alert)] として表示されるアラート IPS アクションにのみ適用されます。他のすべてのアクションについては、Management Center 7.1.0 のイベントが適用されます。

侵入ポリシーのベースポリシーの変更

別のシステム提供のポリシーまたはカスタム ポリシーを基本ポリシーとして使用できます。

最大 5 つのカスタム ポリシーをチェーンすることができます。5 つのうちの 4 つのポリシーで事前に作成されたポリシーが基本ポリシーとして使用され、5 つ目のポリシーでシステムによって提供されたポリシーをベースとして使用する必要があります。

-
- ステップ1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。
- ステップ2 設定する侵入ポリシーの横にある [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。
- ステップ3 [ベースポリシー (Base Policy)] ドロップダウンリストからポリシーを選択します。
- ステップ4 [保存 (Save)] をクリックします。
-

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

侵入ポリシーの管理

[侵入ポリシー (Intrusion Policy)] ページ ([ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)]) では、現在のカスタム侵入ポリシーとともに次の情報を表示できます。

- トラフィックの検査に侵入ポリシーを使用しているアクセス コントロール ポリシーとデバイスの数
- マルチドメイン展開では、ポリシーが作成されたドメイン

マルチドメイン展開では、編集できる現在のドメインで作成されたポリシーが表示されます。また、編集できない先祖ドメインで作成されたポリシーも表示されます。下位のドメインで作成されたポリシーを表示および編集するには、そのドメインに切り替えます。

-
- ステップ1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。
- ステップ2 侵入ポリシーを管理します。
- 作成 : [ポリシーの作成 (Create Policy)] をクリックします。[カスタム Snort 3 侵入ポリシーの作成 \(35 ページ\)](#) を参照してください。
 - 削除 : 削除するポリシーの横にある  をクリックします。別のユーザが保存していないポリシーの変更がある場合は、システムによって確認と通知のプロンプトが表示されます。[OK] をクリックして確認します。
コントロールが淡色表示されている場合、設定は先祖ドメインに属しており、設定を変更する権限がありません。
 - 侵入ポリシーの詳細の編集 : 編集するポリシーの横にある [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。侵入ポリシーの [名前 (Name)]、[検査モード (Inspection Mode)]、および [ベースポリシー (Base Policy)] を編集できます。
 - 侵入ポリシー設定の編集 : [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] をクリックします。[Snort 3 侵入ポリシーの編集 \(35 ページ\)](#) を参照してください。

- エクスポート：侵入ポリシーをエクスポートして別の Management Center にインポートする場合は、[エクスポート (Export)] をクリックします。最新バージョンの『Cisco Secure Firewall Management Center Configuration Guide』の「Exporting Configurations」トピックを参照してください。
- 展開：[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] を選択します。設定変更の展開 (28 ページ) を参照してください。
- レポート：[レポート (Report)] をクリックします。最新バージョンの『Cisco Secure Firewall Management Center Configuration Guide』の「Generating Current Policy Reports」トピックを参照してください。ポリシーバージョンごとに 1 つずつ、2 つのレポートを生成します。

侵入防御を実行するためのアクセスコントロールルール設定

アクセスコントロールポリシーは、複数のアクセスコントロールルールを侵入ポリシーに関連付けることができます。侵入インスペクションを許可アクセスコントロールルールまたはインタラクティブブロックアクセスコントロールルールに設定でき、これによって、トラフィックが最終宛先に到達する前に、異なる侵入インスペクションプロファイルをネットワーク上のさまざまなタイプのトラフィックと照合できます。

システムは侵入ポリシーを使用してトラフィックを評価するたびに、関連する変数セットを使用します。セット内の変数は、侵入ルールで一般的に使用される値を表し、送信元および宛先の IP アドレスおよびポートを識別します。侵入ポリシーにある変数を使用して、ルール抑制および動的ルール状態にある IP アドレスを表すこともできます。



ヒント システム提供の侵入ポリシーを使用する場合であっても、正確にネットワーク環境を反映するためにシステムの侵入変数を設定することを強く推奨します。少なくとも、デフォルトセットにあるデフォルトの変数を変更します。

システムによって提供される侵入ポリシーとカスタム侵入ポリシーについて

システムには複数の侵入ポリシーが付属しています。システムによって提供される侵入ポリシーを使用することで、Cisco Talos インテリジェンスグループ (Talos) の経験を活用できます。これらのポリシーでは、Talos は侵入ルールとプリプロセッサルールの状態を設定し、詳細設定の初期設定も提供します。システムによって提供されるポリシーをそのまま使用するか、またはカスタムポリシーのベースとして使用できます。カスタムポリシーを作成すれば、環境内のシステムのパフォーマンスを向上させ、ネットワーク上で発生する悪意のあるトラフィックやポリシー違反に焦点を当てたビューを提供できます。

接続イベントおよび侵入イベントのロギング

アクセス制御ルールによって呼び出された侵入ポリシーが侵入を検出すると、侵入イベントを生成し、そのイベントを Management Center に保存します。また、システムはアクセス制御ルールのロギング設定に関係なく、侵入が発生した接続の終了も Management Center データベースに自動的にロギングします。

アクセスコントロールルール設定と侵入ポリシー

1つのアクセスコントロールポリシーで使用可能な一意の侵入ポリシーの数は、ターゲットデバイスのモデルによって異なります。より強力なデバイスは、より多数のポリシーを処理できます。侵入ポリシーと変数セットの固有のペアはすべて、1つのポリシーと見なされます。異なる侵入ポリシーと変数セットのペアをそれぞれの許可ルールおよびインタラクティブブロックルール（およびデフォルトアクション）と関連付けることができますが、ターゲットデバイスが設定されたとおりに検査を実行するのに必要なリソースが不足している場合は、アクセスコントロールポリシーを展開できません。

侵入防御を実行するアクセスコントロールルールの設定

このタスクを実行するには、管理者、アクセス管理者、またはネットワーク管理者である必要があります。

- ステップ 1 アクセスコントロールポリシーエディタで新しいルールを作成するか、既存のルールを編集します。最新バージョンの『Cisco Secure Firewall Management Center Configuration Guide』の「Access Control Rule Components」を参照してください。
- ステップ 2 ルールアクションが [許可 (Allow)]、[インタラクティブブロック (Interactive Block)]、または [リセットしてインタラクティブブロック (Interactive Block with reset)] に設定されていることを確認します。
- ステップ 3 [検査 (Inspection)] をクリックします。
- ステップ 4 システムによって提供される侵入ポリシーまたはカスタムの侵入ポリシーを選択するか、あるいはアクセスコントロールルールに一致するトラフィックに対する侵入検査を無効にするには [なし (None)] を選択します。
- ステップ 5 侵入ポリシーに関連付けられた変数セットを変更するには、[変数セット (Variable Set)] ドロップダウンリストから値を選択します。
- ステップ 6 [保存 (Save)] をクリックしてルールを保存します。
- ステップ 7 [保存 (Save)] をクリックしてポリシーを保存します。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。



第 4 章

ルールを使用した侵入ポリシーの調整

この章では Short 3 のカスタムルール、侵入ルールアクション、侵入ポリシー内の侵入イベント通知のフィルタ、Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換、およびカスタムルールのあるルールグループの侵入ポリシーへの追加について説明します。

- [侵入ルールの調整の概要 \(41 ページ\)](#)
- [侵入ルールのタイプ \(42 ページ\)](#)
- [ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件 \(43 ページ\)](#)
- [Snort 3 のカスタムルール \(43 ページ\)](#)
- [侵入ポリシーの Snort 3 侵入ルールの表示 \(44 ページ\)](#)
- [侵入ルールアクション \(44 ページ\)](#)
- [侵入ポリシーの侵入イベント通知フィルタ \(46 ページ\)](#)
- [侵入ルールのコメントの追加 \(51 ページ\)](#)
- [Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換 \(52 ページ\)](#)
- [ルールグループへのカスタムルールの追加 \(54 ページ\)](#)
- [カスタムルールを含むルールグループの侵入ポリシーへの追加 \(55 ページ\)](#)
- [Snort 3 でのカスタムルールの管理 \(56 ページ\)](#)
- [カスタムルールの削除 \(57 ページ\)](#)
- [ルールグループの削除 \(57 ページ\)](#)

侵入ルールの調整の概要

共有オブジェクトルール、標準テキストルール、およびインスペクタールールにはルールの状態などを設定できます。

ルールを有効にするには、ルールの状態を [アラート (Alert)] または [ブロック (Block)] に設定します。ルールを有効にすると、システムがそのルールと一致するトラフィックに対するイベントを生成します。ルールを無効にすると、ルールの処理が停止されます。また、[ブロック (Block)] に設定したルールが一致するトラフィック上でイベントを生成したり、ドロップするように侵入ポリシーを設定することもできます。

ルールのサブセットを表示するようにルールをフィルタ処理することによって、ルール状態やルール設定を変更するルールのセットを正確に選択できます。

侵入ルールまたはルールの引数がインスペクタの無効化を必要とする場合、ネットワーク分析ポリシーの Web インターフェイスではインスペクタが無効のままになりますが、システムは自動的に現在の設定でインスペクタを使用します。

侵入ルールのタイプ

侵入ルールとは、ネットワーク内の脆弱性を不正利用する試みを検出するためにシステムが使用する、指定されたキーワードと引数のセットのことです。システムはネットワークトラフィックを分析する際に、パケットを各ルールに指定された条件に照らし合わせ、データパケットがルールに指定されたすべての条件を満たす場合、そのルールをトリガーします。

侵入ポリシーには以下の構成要素があります。

- 侵入ルール。共有オブジェクトルールと標準テキストルールに分割されます。
- インспекタルール。パケットデコーダの検出オプション、またはシステムに付属のインスペクタの1つに関連付けられます

次の表に、以上のルールタイプの属性を要約します。

表 2: 侵入ルールのタイプ

タイプ	ジェネレータ ID (GID)	Snort ID (SID)	ソース	コピーの可否	編集の可否
共有オブジェクトルール	3	1000000 未満	Cisco Talos Intelligence Group (Talos)	○	制限付き
標準テキストルール	1 (グローバルドメインまたはレガシー GID)	1000000 未満	Talos	○	制限付き
	1000~2000 (子孫ドメイン)	1000000 以上	ユーザが作成またはインポート	はい	はい
プリプロセッサルール	デコーダまたはプリプロセッサに固有	1000000 未満	Talos	いいえ	いいえ
		1000000 以上	オプション設定時にシステムにより生成	いいえ	いいえ

Talos によって作成されたルールへの変更は保存できませんが、変更したルールのコピーをカスタムルールとして保存することはできます。ルールで使用される変数またはルールヘッダー情報（送信元と宛先のポートや IP アドレスなど）を変更できます。マルチドメイン展開では、

Talosによって作成されるルールはグローバルドメインに属します。子孫ドメインの管理者は、ルールのローカルコピーを保存してから、ルールを編集できます。

Talosによって作成されるルールには、各デフォルト侵入ポリシー内でデフォルトのルール状態が割り当てられます。ほとんどのプリプロセッサルールがデフォルトで無効になっているため、システムにプリプロセッサルールに対するイベントの生成とインライン展開での違反パケットの破棄を行わせる場合は、これらのルールを有効にする必要があります。

ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件

Snort 検査エンジンが侵入およびマルウェア分析のトラフィックを処理できるようにするには、Threat Defense デバイスに対して IPS ライセンスを有効にする必要があります。

ネットワーク分析、侵入ポリシーを管理し、移行タスクを実行するには、管理者ユーザーである必要があります。

Snort 3 のカスタムルール

カスタム侵入ポリシーは、ローカルルールファイルをインポートすることによって作成できます。ルールファイルの拡張子は、.txt または .rules です。作成方法に関わらず、システムはカスタムルールをローカルルールに分類して保存します。カスタムルールはルールグループに属している必要があります。ただし、カスタムルールは複数のグループの一部になることもできます。

カスタム侵入ルールを作成すると、システムは一意的ルール番号（番号の形式はGID:SID:Rev）を割り当てます。この番号には次の要素が含まれます。

- **GID** : ジェネレータ ID。カスタムルールの場合、GID を指定する必要はありません。システムは、ルールのアップロード中にグローバルドメインまたはサブドメインのどちらに属するかに基づいて GID を自動的に生成します。標準テキストルールでは、グローバルドメインの値は 2000 です。
- **SID** : Snort ID。ルールがシステムルールのローカルルールであるかどうかを示します。新しいルールを作成する場合は、一意の SID をルールに割り当てます。
ローカルルールの SID 番号は 1000000 から始まり、新しいローカルルールにつき番号が 1 ずつ増えます。
- **Rev** : リビジョン番号。新しいルールのリビジョン番号は 1 です。カスタムルールを変更するたびに、リビジョン番号は 1 ずつ増える必要があります。

カスタム標準テキストルールでは、ルールヘッダー設定、ルールキーワード、およびルール引数を設定できます。特定のプロトコルを使用する、特定の IP アドレスまたはポートを行き来するトラフィックだけをルールで照合するよう、ルールヘッダーを設定できます。



- (注) Snort 3 カスタムルールは編集できません。カスタムルールに、ルールテキスト内の `classtype` の有効な分類メッセージがあることを確認します。分類または誤分類なしでルールをインポートする場合は、ルールを削除してから再作成します。

侵入ポリシーの Snort 3 侵入ルールの表示

侵入ポリシー内のルールの表示方法を調整できます。特定のルールの詳細を表示して、ルール設定、ルールドキュメント、およびその他のルール仕様を確認することもできます。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 ポリシーの横にある [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] をクリックします。

ステップ 3 ルールを表示している間、以下を実行できます。

- ルールをフィルタ処理します。
- ルールグループを選択すると、そのグループに関連するルールが表示されます。
- 侵入ルールの詳細を表示します。
- ルールのコメントを表示します。
- ルールのドキュメンテーションを表示する。

これらのタスクの実行の詳細については、「[Snort 3 侵入ポリシーの編集 \(35 ページ\)](#)」を参照してください。

侵入ルールアクション

侵入ルールアクションでは、個々の侵入ポリシー内のルールを有効または無効にできるだけでなく、モニター対象の条件がルールをトリガーした場合にシステムが実行するアクションを指定できます。

Cisco Talos Intelligence Group (Talos) が各デフォルトポリシーの侵入およびインスペクタールールごとにデフォルトアクションを設定します。たとえば、ルールを **Security over Connectivity** デフォルトポリシーでは有効にして、**Connectivity over Security** デフォルトポリシーでは無効にすることができます。Talos がルール更新を使用してデフォルトポリシー内の 1 つ以上のルールのデフォルトアクションを変更する場合があります。ルール更新でのベースポリシーの更新を許可すると、ポリシーの作成時に使用されたデフォルトポリシー（または基礎となるデフォルトポリシー）のデフォルトアクションが変更されたときの、そのポリシー内のルールのデフォルトアクションの変更も許可することになります。ただし、ルールアクションを変更している場合は、ルール更新でその変更がオーバーライドされないことに注意してください。

侵入ルールを作成すると、そのルールは、ポリシーの作成時に使用されたデフォルトポリシー内のルールのデフォルトアクションを継承します。

侵入ルールアクションのオプション

侵入ポリシーでは、ルールのアクションを次の値に設定できます。

アラート (Alert)

システムで特定の侵入試行を検出して、一致したトラフィックが見つかった時点で侵入イベントを生成する場合。悪意のあるパケットがネットワークを通過してルールをトリガーすると、そのパケットが宛先に送信され、システムが侵入イベントを生成します。悪意のあるパケットはその対象に到達しますが、イベントロギングによって通知されます。

ブロック (Block)

システムで特定の侵入試行を検出して、その攻撃を含むパケットをドロップし、一致したトラフィックが見つかった時点で侵入イベントを生成する場合。悪意のあるパケットはその対象に到達せず、イベントロギングによって通知されます。

無効 (Disable)

システムで一致するトラフィックを評価しない場合。



(注) [アラート (Alert)] または [ブロック (Block)] オプションを選択すると、ルールが有効になります。[無効 (Disable)] を選択すると、ルールが無効になります。

侵入ポリシー内のすべての侵入ルールを有効にしないことを強く推奨します。すべてのルールが有効になっている場合は、管理対象デバイスのパフォーマンスが低下する可能性があります。代わりに、できるだけネットワーク環境に合わせてルールセットを調整してください。

侵入ルールアクションの設定

侵入ルールアクションはポリシーに固有です。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 編集するポリシーの横にある [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] をクリックします。

ヒント このページには、次の合計数が表示されます。

- 無効なルール
- [アラート (Alert)] に設定された有効なルール
- [ブロック (Block)] に設定された有効なルール
- オーバーライドされたルール

ステップ 3 ルールアクションを設定する 1 つ以上のルールを選択します。

ステップ 4 [ルールアクション (Rule Action)] ドロップダウンリストからルールアクションのいずれかを選択します。さまざまなルールアクションの詳細については、「[Snort 3 侵入ポリシーの編集 \(35 ページ\)](#)」を参照してください。

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

侵入ポリシーの侵入イベント通知フィルタ

侵入イベントの重要度は、発生頻度、送信元 IP アドレス、または宛先 IP アドレスに基づいて設定できます。イベントが特定の回数発生するまで注意が必要ない場合もあります。たとえば、何者かがサーバにログインしようとしても、特定の回数失敗するまで、気にする必要はありません。一方、ほんの少数の発生を見れば、広範な問題があることを理解できる場合もあります。たとえば、Web サーバに対して DoS 攻撃が行われた場合は、少数の侵入イベントの発生を確認しただけで、その状況に対処しなければならないことが分かります。同じイベントが何百回も確認されれば、システムの機能が麻痺します。

侵入イベントしきい値

指定した期間内にイベントを生成する回数に基づいて、システムが侵入イベントをログに記録して表示する回数を制限するには、個別のルールのしきい値を設定します。これにより、大量の同じイベントが原因で機能が麻痺するのを避けることができます。共有オブジェクトルール、標準テキストルール、またはインスペクタールールごとにしきい値を設定できます。

侵入イベントしきい値の設定

しきい値を設定するには、最初にしきい値のタイプを指定します。

表 3: しきい値設定オプション

オプション	説明
制限 (Limit)	指定された数のパケット (count 引数によって指定される) が、指定された期間内にルールをトリガーとして使用した場合に、イベントを記録して表示します。たとえば、タイプを [制限 (Limit)] に、[カウント (Count)] を 10 に、[秒 (Seconds)] を 60 に設定し、14 個のパケットがルールをトリガーとして使用した場合、システムはその 1 分の間に発生した最初の 10 個を表示した後、イベントの記録を停止します。

オプション	説明
しきい値 (Threshold)	指定された数のパケット (count 引数によって指定される) が、指定された期間内にルールをトリガーとして使用した場合に、1つのイベントを記録して表示します。イベントのしきい値カウンタに達し、システムがそのイベントを記録した後、時間のカウンタは再び開始されることに注意してください。たとえば、タイプを [しきい値 (Threshold)] に、[カウント (Count)] を 10 に、[秒 (Seconds)] を 60 に設定して、ルールが 33 秒間で 10 回トリガーされたとします。システムは、1 個のイベントを生成してから、[秒 (Seconds)] と [カウント (Count)] のカウンタを 0 にリセットします。次の 25 秒間にルールがさらに 10 回トリガーされたとします。33 秒でカウンタが 0 にリセットされたため、システムが別のイベントを記録します。
両方	指定された数 (カウント) のパケットがルールをトリガーとして使用した後で、指定された期間ごとに 1 回イベントを記録して表示します。たとえば、タイプを [両方 (Both)] に、[カウント (Count)] を 2 に、[秒 (Seconds)] を 10 に設定した場合、イベント数は以下のようになります。 <ul style="list-style-type: none"> • ルールが 10 秒間に 1 回トリガーされた場合、システムはイベントを生成しません (しきい値が満たされていない)。 • ルールが 10 秒間に 2 回トリガーされた場合、システムは 1 つのイベントを生成します (ルールが 2 回目にトリガーとして使用されたときにしきい値が満たされるため)。 • ルールが 10 秒間に 4 回トリガーされた場合、システムは 1 つのイベントを生成します (ルールが 2 回目にトリガーとして使用されたときにしきい値に達し、それ以降のイベントは無視される)。

次に、トラッキングを指定します。これにより、イベントしきい値が送信元 IP アドレス単位と宛先 IP アドレス単位のどちらで計算されるかが決まります。

表 4: IP しきい値設定オプション

オプション	説明
ソース (Source)	送信元 IP アドレス単位でイベント インスタンス カウントを計算します。
接続先 (Destination)	宛先 IP アドレス単位でイベント インスタンス カウントを計算します。

最後に、しきい値を定義するインスタンスの数と期間を指定します。

表 5: インスタンス/時間のしきい値設定オプション

オプション	説明
カウント (Count)	しきい値を満たすために必要な、追跡する IP アドレス単位で指定された期間単位のイベント インスタンスの数。

オプション	説明
秒 (Seconds)	カウントがリセットされるまでの秒数。しきい値タイプを [制限 (limit)] に、トラッキングを [送信元 IP (Source IP)] に、[カウント (count)] を [10] に、[秒 (seconds)] を [10] に設定した場合は、システムが指定された送信元ポートから 10 秒間に発生した最初の 10 のイベントを記録して表示します。最初の 10 秒で 7 個のイベントだけが発生した場合、システムはそれらを記録して表示します。最初の 10 秒で 40 個のイベントが発生した場合、システムは 10 個を記録して表示し、10 秒経過してからカウントを再度開始します。

侵入イベントのしきい値設定は、単独で使用することも、レートベースの攻撃防御、`detection_filter` キーワード、および侵入イベント抑制のいずれかと組み合わせて使用することもできます。



ヒント 侵入イベントのパケットビューでしきい値を追加することもできます。

Snort 3 での侵入ルールのしきい値の設定

[ルールの詳細 (Rule Detail)] ページで、ルールの単一のしきい値を設定できます。しきい値を追加すると、ルールの既存のしきい値が上書きされます。

- ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] > [侵入ルール (Intrusion Rules)] をクリックします。
- ステップ 2 [Snort 3 のすべてのルール (Snort 3 All Rules)] タブをクリックします。
- ステップ 3 侵入ルールの [アラート設定 (Alert Configuration)] 列で、[なし (None)] リンクをクリックします。
- ステップ 4 [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。
- ステップ 5 [アラート設定 (Alert Configuration)] ウィンドウで、[しきい値 (Threshold)] タブをクリックします。
- ステップ 6 [タイプ (Type)] ドロップダウンリストから、設定するしきい値のタイプを選択します。
 - 指定された期間あたりのイベントインスタンス数に通知を制限する場合は、[制限 (Limit)] を選択します。
 - 指定された期間あたりのイベントインスタンス数ごとに通知を提供する場合は、[しきい値 (Threshold)] を選択します。
 - 指定されたイベントインスタンス数に達した後で、期間あたり 1 回ずつ通知を提供する場合は、[両方 (Both)] を選択します。
- ステップ 7 [追跡対象 (Track By)] フィールドで [送信元 (Source)] または [宛先 (Destination)] を選択し、イベントインスタンスの追跡を送信元 IP アドレスで行うか、宛先の IP アドレスで行うかを指定します。
- ステップ 8 [カウント (Count)] フィールドに、しきい値として使用するイベントインスタンスの数を入力します。
- ステップ 9 [秒数 (Seconds)] フィールドに、イベントインスタンスを追跡する期間 (秒数) を指定する数値を入力します。
- ステップ 10 [保存 (Save)] をクリックします。

追加のサポートと情報については、「[Snort 3 の抑制としきい値](#)」ビデオを参照してください。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開](#)を参照してください。

侵入イベントしきい値の表示と削除

ルールのしきい値の既存の設定を表示または削除するには、[[ルールの詳細 \(Rules Details\)](#)] ビューを使用して、しきい値の構成済み設定を表示し、それらがシステムに適切かどうかを確認します。そうでない場合は、新しいしきい値を追加して既存の値を上書きすることができます。

ステップ 1 [[オブジェクト \(Objects\)](#)] > [[侵入ルール \(Intrusion Rules\)](#)] をクリックします。

ステップ 2 [[Snort 3 のすべてのルール \(Snort 3 All Rules\)](#)] タブをクリックします。

ステップ 3 [[アラート設定 \(Alert Configuration\)](#)] 列に表示されるしきい値が設定されているルールを選択します ([[アラート設定 \(Alert Configuration\)](#)] 列には、ルールのリンクとして [[しきい値 \(Threshold\)](#)] が表示されません)。

ステップ 4 ルールのしきい値を削除するには、[[アラート設定 \(Alert Configuration\)](#)] 列の [[しきい値 \(Threshold\)](#)] リンクをクリックします。

ステップ 5 [[編集 \(Edit\)](#)] () をクリックします。

ステップ 6 [[しきい値 \(Threshold\)](#)] タブをクリックします。

ステップ 7 [[リセット \(Reset\)](#)] をクリックします。

ステップ 8 [[保存 \(Save\)](#)] をクリックします。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

侵入ポリシー抑制の設定

特定の IP アドレスまたは IP アドレスの範囲でインスペクタの特定のルールをトリガーしたときの侵入イベント通知を抑制できます。これは、誤検出を回避するのに役立ちます。たとえば、特定の 익스プロイトのように見えるパケットを伝送しているメールサーバが存在する場合は、そのメールサーバによってトリガーとして使用されたイベントに関するイベント通知を抑制できます。ルールはすべてのパケットに対してトリガーとして使用されますが、本物の攻撃に対するイベントだけが表示されます。

侵入ポリシー抑制タイプ

侵入イベント抑制は、単独で使用することも、レートベースの攻撃防御、`detection_filter` キーワード、および侵入イベントしきい値構成のいずれかと組み合わせて使用することもできることに注意してください。



ヒント 侵入イベントのパケットビュー内から抑制を追加できます。侵入ルールエディタページ ([**オブジェクト (Objects)**] > [**侵入ルール (Intrusion Rules)**] > [**Snort 3 のすべてのルール (Snort 3 All Rules)**]) の [**アラート設定 (Alert Configuration)**] 列を使用して、抑制設定にアクセスすることもできます

Snort 3 での侵入ポリシーの抑制の設定

侵入ポリシーのルールに対して 1 つ以上の抑制を設定できます。

始める前に

送信元または宛先の抑制に追加する必要があるネットワークオブジェクトを作成していることを確認します。

ステップ 1 [**オブジェクト (Objects)**] > [**侵入ルール (Intrusion Rules)**] をクリックします。

ステップ 2 [**Snort 3 のすべてのルール (Snort 3 All Rules)**] タブをクリックします。

ステップ 3 侵入ルールの [**アラート設定 (Alert Configuration)**] 列の [**なし (None)**] リンクをクリックします。

ステップ 4 [**編集 (Edit)**] () をクリックします。

ステップ 5 [**抑制 (Suppressions)**] タブで、次のオプションの横にある追加アイコン (+) をクリックします。

- 指定した送信元 IP アドレスから送信されるパケットによって生成されるイベントを抑制する場合は、[**送信元ネットワーク (Source Networks)**] を選択します。
- 指定した宛先 IP アドレスに送信されるパケットによって生成されるイベントを抑制する場合は、[**宛先ネットワーク (Destination Networks)**] を選択します。

ステップ 6 [**ネットワーク (Network)**] ドロップダウンリストからプリセットネットワークを選択します。

ステップ 7 [**保存 (Save)**] をクリックします。

ステップ 8 (任意) 必要に応じて、最後の 3 つの手順を繰り返します。

ステップ 9 [**アラート設定 (Alert Configuration)**] ウィンドウで [**保存 (Save)**] をクリックします。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

抑制条件の表示と削除

既存の抑制条件を表示または削除することもできます。たとえば、メールサーバがエクスプロイトのように見えるパケットを普段から送信しているという理由で、そのメールサーバのIPアドレスから送信されたパケットに関するイベント通知を抑制できます。その後、そのメールサーバが使用停止になり、そのIPアドレスが別のホストに再割り当てされたら、その送信元IPアドレスの抑制条件を削除する必要があります。

- ステップ1 [オブジェクト (Objects)] > [侵入ルール (Intrusion Rules)] をクリックします。
- ステップ2 [Snort 3 のすべてのルール (Snort 3 All Rules)] タブをクリックします。
- ステップ3 抑制を表示または削除するルールを選択します。
- ステップ4 [アラート設定 (Alert Configuration)] 列の [抑制 (Suppression)] をクリックします。
- ステップ5 [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。
- ステップ6 [抑制 (Suppressions)] タブをクリックします。
- ステップ7 抑制の横にある [クリア (Clear)] (✕) をクリックして、抑制を削除します。
- ステップ8 [保存 (Save)] をクリックします。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

侵入ルールのコメントの追加

侵入ポリシーのルールにコメントを追加できます。このようにして追加されたコメントはポリシー専用のコメントとなります。よって、ある侵入ポリシーのルールに追加したコメントは、他の侵入ポリシーでは表示されません。

- ステップ1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。
- ステップ2 編集するポリシーの横にある [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] をクリックします。
- ステップ3 すべてのルールがリストされているページの右側で、コメントを追加するルールを選択します。
- ステップ4 [コメント (Comments)] 列の下にある **コメント** ([コメント (comment)] アイコン [コメント (comment)] アイコン) をクリックします。
- ステップ5 [コメント (Comments)] フィールドに、ルールコメントを入力します。
- ステップ6 [コメントを追加 (Add a Comment)] をクリックします。
- ステップ7 [保存 (Save)] をクリックします。

ヒント [コメント (Comments)] 列のルールの横に [コメント (Comment)] () が表示されます。

次のタスク

設定変更を展開します。設定変更の展開 (28 ページ) を参照してください。

Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換

カスタムルールを使用している場合は、Snort 2 から Snort 3 に変換する前に、Snort 3 のルールセットを管理する準備ができていることを確認してください。サードパーティベンダーのルールセットを使用している場合は、そのベンダーに連絡して、そのルールが Snort 3 に正常に変換されることを確認するか、または Snort 3 用にネイティブに作成された置換ルールセットを取得します。独自に作成したカスタムルールがある場合は、変換前に Snort 3 ルールの作成に慣れておくと、変換後の Snort 3 検出を最適化するようにルールを更新できます。Snort 3 でのルールの作成の詳細については、次のリンクを参照してください。

- <https://blog.snort.org/2020/08/how-rules-are-improving-in-snort-3.html>
- <https://blog.snort.org/2020/10/talos-transition-to-snort-3.html>

Snort 3 ルールの詳細については、<https://blog.snort.org/>にある他のブログを参照してください。

システム付属のツールを使用して Snort 2 ルールを Snort 3 ルールに変換するには、[Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換 \(52 ページ\)](#) を参照してください。



重要 Snort 2 ネットワーク分析ポリシー (NAP) の設定を Snort 3 に自動的にコピーすることはできません。NAP 設定は、Snort 3 で手動で複製する必要があります。

すべての侵入ポリシーのすべての Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] > [侵入ルール (Intrusion Rules)] をクリックします。

ステップ 2 [Snort 3 のすべてのルール (Snort 3 All Rules)] タブをクリックします。

ステップ 3 左側のペインで [すべてのルール (All Rules)] が選択されていることを確認します。

ステップ 4 [タスク (Tasks)] ドロップダウンリストから値を選択します。

- [Snort 2 ルールの変換とインポート (Convert Snort 2 rules and import)] : すべての侵入ポリシーのすべての Snort 2 カスタムルールを Snort 3 に自動的に変換し、Snort 3 カスタムルールとして Management Center にインポートします。

- **[Snort 2 ルールの変換とダウンロード (Convert Snort 2 rules and download)]** : すべての侵入ポリシーのすべての Snort 2 カスタムルールを Snort 3 に自動的に変換し、それらをローカルシステムにダウンロードします。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

- (注)
- 前の手順で [変換してインポート (Convert and import)] を選択した場合は、変換されたすべてのルールが、[ローカルルール (Local Rules)] の下に新しく作成されたルールグループ [すべての Snort 2 をグローバルに変換 (All Snort 2 Converted Global)] の下に保存されます。
 - 前の手順で [変換してダウンロード (Convert and download)] を選択した場合は、ルールファイルをローカルに保存します。ダウンロードしたファイル内の変換済みのルールを確認します。後で [ルールグループへのカスタムルールの追加 \(54 ページ\)](#) の手順に従ってアップロードできます。

追加のサポートと情報については、「[Snort 2 ルールの Snort 3 への変換](#)」ビデオを参照してください。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

単一の侵入ポリシーの Snort 2 カスタムルールの Snort 3 への変換

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 [侵入ポリシー (Intrusion Policies)] タブで、[Snort 3同期ステータスの表示 (Show Snort 3 Sync status)] をクリックします。

ステップ 3 侵入ポリシーの [同期 (Sync)] アイコン (➡) をクリックします。

- (注) 侵入ポリシーの Snort 2 バージョンと Snort 3 バージョンが同期されている場合は、[同期 (Sync)] アイコンが緑色の ➡ で表示されます。変換するカスタムルールがないことを示します。

ステップ 4 サマリーを読み、[カスタムルール (Custom Rules)] タブをクリックします。

ステップ 5 次のどちらかを選択します。

- [変換後のルールをこのポリシーにインポートする (Import converted rules to this policy)] : 侵入ポリシーの Snort 2 カスタムルールを Snort 3 に変換し、Snort 3 カスタムルールとして Management Center にインポートします。
- [変換後のルールのダウンロード (Download converted rules)] : 侵入ポリシーの Snort 2 カスタムルールを Snort 3 に変換し、ローカルシステムにダウンロードします。ダウンロードしたファイル内の変換後のルールを確認し、後でアップロードアイコンをクリックしてファイルをアップロードできます。

ステップ 6 [再同期 (Re-Sync)] をクリックします。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

ルールグループへのカスタムルールの追加

Management Center でカスタムルールをアップロードすると、ローカルで作成したカスタムルールがすべての Snort 3 ルールのリストに追加されます。

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] > [侵入ルール (Intrusion Rules)] をクリックします。

ステップ 2 [Snort 3 のすべてのルール (Snort 3 All Rules)] タブをクリックします。

ステップ 3 [タスク (Tasks)] ドロップダウンリストをクリックします。

ステップ 4 [Snort 3 ルールのアップロード (Upload Snort 3 Rules)] をクリックします。

ステップ 5 作成した Snort 3 カスタムルールを含む .txt または .rules ファイルをドラッグアンドドロップします。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

(注) 選択したファイルにエラーがある場合、それ以上先に進むことはできません。エラーファイルをダウンロードし、エラーを修正した後に [ファイルの置換 (Replace File)] リンクをクリックし、ファイルのバージョン 2 をアップロードできます。

ステップ 7 ルールをルールグループに関連付けて、そのグループに新しいルールを追加します。

新しいカスタムルールグループを作成し ([新しいカスタムルールグループの作成 (Create New Custom Rule Group)] リンクをクリック)、新しいグループにルールを追加することもできます。

(注) 既存のローカルルールグループがない場合は、[新しいカスタムルールグループの作成 (Create New Custom Rule Group)] をクリックして続行します。新しいルールグループの [名前 (Name)] を入力して、[保存 (Save)] をクリックします。

ステップ 8 次のいずれかを選択します。

- [ルールのマージ (Merge Rules)] は、追加する新しいルールをルールグループ内の既存のルールとマージします。
- [グループ内のすべてのルールをファイルの内容に置換 (Replace all rules in the group with file contents)] は、既存のすべてのルールを追加する新しいルールに置換します。

(注) 前の手順で複数のルールグループを選択した場合は、使用できるオプションは [ルールのマージ (Merge Rules)] のみになります。

ステップ 9 [次へ (Next)] をクリックします。

サマリーを確認して、追加する新しいルール ID を確認し、必要に応じてダウンロードします。

ステップ 10 [終了 (Finish)] をクリックします。



重要 アップロードされたすべてのルールのルールアクションは無効な状態になっています。ルールをアクティブにするために必要な状態に変更する必要があります。

次のタスク

- **Management Center** でカスタムルールをアップロードすると、作成したカスタムルールがすべての **Snort 3** ルールのリストに追加されます。これらのカスタムルールをトラフィックに適用するには、必要な侵入ポリシーでこれらのルールを追加して有効にします。カスタムルールを含むルールグループを侵入ポリシーに追加する方法については、[カスタムルールを含むルールグループの侵入ポリシーへの追加 \(55 ページ\)](#) を参照してください。カスタムルールを有効にする方法については、[Snort 3 でのカスタムルールの管理 \(56 ページ\)](#) を参照してください。
- 設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

カスタムルールを含むルールグループの侵入ポリシーへの追加

システムにアップロードされたカスタムルールを侵入ポリシーで有効にし、それらのルールをトラフィックに適用する必要があります。**Management Center** にカスタムルールをアップロードした後、侵入ポリシーに新しいカスタムルールを含むルールグループを追加します。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 [侵入ポリシー (Intrusion Policies)] タブで、侵入ポリシーの [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] をクリックします。

ステップ 3 [ルールグループ (Rule Groups)] 検索バーの横にある [追加 (Add)] (+) をクリックします。

ステップ 4 [ルールグループの追加 (Add Rule Groups)] ウィンドウで、ルールグループの横にある [>] アイコンをクリックして、ローカルルールグループを展開します。

ステップ 5 アップロードしたカスタムルールグループの横にあるチェックボックスをオンにします。

ステップ 6 [保存 (Save)] をクリックします。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

Snort 3 でのカスタムルールの管理

システムにアップロードしたカスタムルールを侵入ポリシーに追加し、それらのルールを有効にしてトラフィックに適用する必要があります。アップロードされたカスタムルールは、すべてのポリシーで有効にすることも、個々のポリシーで選択して有効にすることもできます。

次の手順に従って、1つ以上の侵入ポリシーでカスタムルールを有効にします。

-
- ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] > [侵入ルール (Intrusion Rules)] をクリックします。
 - ステップ 2 [Snort 3 のすべてのルール (Snort 3 All Rules)] タブをクリックします。
 - ステップ 3 [ローカルルール (Local Rules)] を展開します。
 - ステップ 4 必要なルールグループを選択します。
 - ステップ 5 ルールの横にあるチェックボックスをオンにしてルールを選択します。
 - ステップ 6 [ルールアクション (Rule Actions)] ドロップダウンリストから [侵入ポリシーごと (Per Intrusion Policy)] を選択します。
 - ステップ 7 次のどちらかを選択します。
 - [すべてのポリシー (All Policies)] : 追加するすべてのルールに対して同じルールアクションを設定します。
 - [侵入ポリシーごと (Per Intrusion Policy)] : 侵入ポリシーごとに異なるルールアクションを設定します。
 - ステップ 8 ルールアクションを次のように設定します。
 - 前の手順で [すべてのポリシー (All Policies)] を選択した場合は、[オーバーライド状態の選択 (Select Override state)] ドロップダウンリストから必要なルールアクションを選択します。
 - 前の手順で [侵入ポリシーごと (Per Intrusion Policy)] を選択した場合は、ポリシー名に [ルールアクション (Rule Action)] を選択します。さらにポリシーを追加するには、[別のポリシーの追加 (Add Another)] をクリックします。
 - ステップ 9 必要に応じて、[コメント (Comments)] テキストボックスにコメントを追加します。
 - ステップ 10 [保存 (Save)] をクリックします。
-

次のタスク

デバイスに変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。 .

カスタムルールの削除

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] > [侵入ルール (Intrusion Rules)] をクリックします。

ステップ 2 [Snort 3 のすべてのルール (Snort 3 All Rules)] タブをクリックします。

ステップ 3 左側のペインの [ローカルルール (Local Rules)] を展開します。

ステップ 4 削除するルールのチェックボックスをオンにします。

ステップ 5 選択したすべてのルールのルールアクションが [無効 (Disable)] であることを確認します。

必要に応じて次の手順に従い、選択した複数のルールのルールアクションを無効にします。

- [ルールアクション (Rule Actions)] ドロップダウンボックスから、[侵入ポリシーごと (Per Intrusion Policy)] を選択します。
- [すべてのポリシー (All Policies)] オプションボタンを選択します。
- [オーバーライド状態の選択 (Select Override state)] ドロップダウンリストから [無効 (Disable)] を選択します。
- [保存 (Save)] をクリックします。
- 削除するルールのチェックボックスをオンにします。

ステップ 6 [ルールアクション (Rule Actions)] ドロップダウンリストから、[削除 (Delete)] を選択します。

ステップ 7 [ルールの削除 (Delete Rules)] ポップアップウィンドウで [削除 (Delete)] をクリックします。

次のタスク

設定変更を展開します。 [設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。

ルールグループの削除

始める前に

含めたすべての侵入ポリシーから削除するルールグループを除外します。侵入ポリシーからルールグループを除外する手順については、[Snort 3 侵入ポリシーの編集 \(35 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] > [侵入ルール (Intrusion Rules)] をクリックします。

ステップ 2 [Snort 3 のすべてのルール (Snort 3 All Rules)] タブをクリックします。

ステップ 3 左側のペインの [ローカルルール (Local Rules)] を展開します。

ステップ 4 削除するルールグループを選択します。

ステップ 5 続行する前に、グループ内のすべてのルールのルールアクションが [無効 (Disable)] に設定されていることを確認します。

いずれかのルールのルールアクションが [無効 (Disable)] 以外の場合、ルールグループは削除できません。必要に応じて、次の手順に従ってすべてのルールのルールアクションを無効にします。

- a) [ルールアクション (Rule Actions)] ドロップダウンリストの下にあるチェックボックスをオンにして、グループ内のすべてのルールを選択します。
- b) [ルールアクション (Rule Actions)] ドロップダウンボックスから、[侵入ポリシーごと (Per Intrusion Policy)] を選択します。
- c) [すべてのポリシー (All Policies)] オプションボタンを選択します。
- d) [オーバーライド状態の選択 (Select Override state)] ドロップダウンリストから [無効 (Disable)] を選択します。
- e) [保存 (Save)] をクリックします。

ステップ 6 ルールグループの横にある [削除 (Delete)] () をクリックします。

ステップ 7 [ルールグループの削除 (Delete Rule Group)] ポップアップウィンドウで [OK] をクリックします。

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。



第 5 章

ネットワーク資産に応じた侵入防御の調整

この章では、Cisco Secure Firewall の推奨ルールと、Cisco Secure Firewall 推奨ルールの生成と適用について説明します。

- [LSP 更新での Snort 3 ルールの変更 \(59 ページ\)](#)
- [Cisco Secure Firewall 推奨ルールの概要 \(60 ページ\)](#)
- [ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件 \(61 ページ\)](#)
- [Snort 3 での新しい Cisco Secure Firewall 推奨事項の生成 \(61 ページ\)](#)

LSP 更新での Snort 3 ルールの変更

通常の Snort 3 Lightweight Security Package (LSP) の更新中に、既存のシステム定義の侵入ルールが新しい侵入ルールに置き換えられることがあります。1 つのルールが複数のルールに置き換えられたり、または複数のルールが 1 つのルールに置き換えられたりする可能性があります。これは、結合または拡張されたルールに対してより適切な検出が可能な場合に発生します。管理を向上させるために、既存のシステム定義ルールの一部を LSP アップデートの一部として削除することもできます。

LSP 更新中にオーバーライドされたシステム定義ルールの変更に関する通知を受け取るには、[削除された Snort 3 ルールのユーザオーバーライドの保持 (Retain user overrides for deleted Snort 3 rules)] チェックボックスがオンになっていることを確認します。

[削除された Snort 3 ルールのユーザオーバーライドの保持 (Retain user overrides for deleted Snort 3 rules)] チェックボックスに移動するには、[歯車 (Cog)]  をクリックして、[設定 (Configuration)] > [侵入ポリシー設定 (Intrusion Policy Preferences)] を選択します。

デフォルトでは、チェックボックスがオンになっています。このチェックボックスをオンにすると、LSP 更新の一部として追加される新しい置換ルールのルールオーバーライドが保持されます。通知は、[歯車 (Cog)]  の横にある [通知 (Notification)] アイコンの下にある [タスク (Task)] タブに表示されます。

Cisco Secure Firewall 推奨ルールの概要

侵入ルールの推奨事項を使用して、ネットワークで検出されたホストアセットに関連付けられている脆弱性を対象にすることができます。たとえば、オペレーティングシステム、サーバ、クライアントアプリケーションプロトコルなどです。これにより、モニタ対象のネットワークの特定ニーズに合わせて侵入ポリシーを調整できます。

システムは、侵入ポリシーごとに個別の推奨事項のセットを作成します。これにより、通常、標準テキストルールと共有オブジェクトルールのルール状態の変更が推奨されます。ただし、インスペクタやデコーダのルールの変更も推奨されています。

ルール状態の推奨事項を生成する場合は、デフォルト設定を使用するか、詳細設定を指定できます。詳細設定では次の操作が可能です。

- システムが脆弱性をモニタするネットワーク上のホストを再定義する。
- ルール オーバーヘッドに基づき、システムが推奨するルールに影響を与える。
- ルールを無効にする推奨事項を生成するかどうかを指定する。

推奨事項をすぐに使用するか、推奨事項（および影響を受けるルール）を確認してから受け入れることができます。

推奨ルール状態を使用することを選択すると、読み取り専用の **Secure Firewall 推奨レイヤ**が侵入ポリシーに追加されますが、後で、推奨ルール状態を使用しないことを選択すると、そのレイヤが削除されます。

侵入ポリシーに最近保存された構成設定に基づいて自動的に推奨を生成するためのタスクをスケジュールできます。

システムは、次のような手動で設定されたルール状態を変更しません。

- 推奨を生成する前に指定したルールの状態を手動で設定すると、その後、システムはそのルールの状態を変更できなくなる。
- 推奨の生成後に指定したルールの状態を手動で設定すると、そのルールの推奨状態が上書きされる。



ヒント 侵入ポリシーレポートには、推奨状態と異なるルール状態を持つルールのリストを含めることができます。

推奨が絞り込まれた [ルール (Rules)] ページを表示している最中に、あるいは、ナビゲーションパネルまたは [ポリシー情報 (Policy Information)] ページから [ルール (Rules)] ページに直接アクセスした後に、手動で、ルール状態を設定したり、ルールをソートしたり、[ルール (Rules)] ページで可能なその他の操作（ルールの抑制やルールしきい値の設定など）を実行することができます。



- (注) Cisco Talos Intelligence Group (Talos) は、システムによって提供されるポリシーでの各ルールの適切な状態を決定します。システムによって提供されるポリシーをベースポリシーとして使用し、システムがルールを Cisco Secure Firewall の推奨ルール状態に設定できるようにすると、侵入ポリシーのルールは、ネットワークアセットに推奨された設定と一致します。

ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件

Snort 検査エンジンが侵入およびマルウェア分析のトラフィックを処理できるようにするには、Threat Defense デバイスに対して IPS ライセンスを有効にする必要があります。

ネットワーク分析、侵入ポリシーを管理し、移行タスクを実行するには、管理者ユーザーである必要があります。

Snort 3 での新しい Cisco Secure Firewall 推奨事項の生成

侵入ポリシーの Cisco Secure Firewall 推奨事項を生成し、ここに記載されている手順に従って、推奨された新しいルール設定を Snort 3 に作成します。ルールのオーバーヘッドは、Snort 3 で選択したしきい値ポリシーに基づいてセキュリティレベルとして解釈されます。推奨されるアクションが、選択したセキュリティレベルに基づいていて、それがベースポリシーよりも高い場合、推奨されるのはイベントの生成だけではありません。

Secure Firewall 推奨事項を設定する前に、以下にリストされている 3 つのポイントのうちどれが目標に最も近いかを尋ねる必要があります。

- 保護の強化：ホストデータベースで見つかった脆弱性に基づいて追加のルールを有効にし、ルールを自動的に無効にしません。これにより、ルールセットが大きくなる可能性があります。
- 保護の集中：ホストデータベースで見つかった脆弱性に基づいて追加のルールを有効にし、既存のルールを無効にします。これにより、検出された脆弱性に応じてルールの数を増減できます。
- より高い効率：現在有効になっているルールセットを使用し、ホストデータベースで見つからない脆弱性のルールを無効にします。これにより、有効なルールセットが小さくなる可能性があります。

応答に基づく、推奨アクションは次のとおりです。

- 推奨事項を次に高いセキュリティレベルに設定し、無効化ルールのチェックを外します。
- 推奨事項を次に高いセキュリティレベルに設定し、無効化ルールを確認します。
- 推奨事項を現在のセキュリティレベルに設定し、無効化ルールを確認します。

始める前に

Secure Firewall 推奨事項には、次の要件があります。

- 推奨を生成するホストがシステムに存在することを確認します。
- 推奨事項に設定された保護されたネットワークは、システムに存在するホストにマッピングする必要があります。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 侵入ポリシーの [Snort 3バージョン (Snort 3 Version)] ボタンをクリックします。

ステップ 3 [推奨事項 (未使用) (Recommendations (Not in Use))] レイヤをクリックして、ルール of 推奨事項を設定します。[Start] をクリックします。

[Secure Firewallルールの推奨事項 (Firepower Rule Recommendations)] ウィンドウでは、次の項目を設定できます。

- [セキュリティレベル (Security Level)] : クリックして、セキュリティレベルを選択します。必要に応じて、[ルールを無効にする推奨を受け入れる (Accept Recommendations to Disable Rules)] チェックボックスをオンにして、入力セキュリティレベルおよび保護されたネットワークで有効になっていないルールを無効にできます。アラートの数が多いためにルールセットをトリミングする必要がある場合、またはインスペクションのパフォーマンスを向上させる必要がある場合にのみ、このオプションを有効にします。セキュリティレベルは次のとおりです。

- セキュリティレベル 1 : セキュリティよりも接続性を優先 (Connectivity Over Security)

[影響なし (No Impact)] : 新しいルールは有効にならず、既存のルールも無効になりません。保護を強化するには、より高いセキュリティレベルを選択してください。

[セキュリティの低減 (Lower Security)] (チェックボックスがオン) : 検出されたホストの潜在的な脆弱性に一致する Connectivity Over Security ルールセットのルールを除き、すべてのルールが無効になります。代わりにベースポリシーを調整することを推奨します。

- セキュリティレベル 2 : バランスのとれた接続性よりもセキュリティを優先 (Balanced Security Over Connectivity)

[影響なし (No Impact)] : 新しいルールは有効にならず、既存のルールも無効になりません。保護を強化するには、より高いセキュリティレベルを選択してください。

[より高い効率 (Higher Efficiency)] (チェックボックスがオン) : 検出されたホストの潜在的な脆弱性に一致する既存のルールを保持し、ネットワークで検出されなかった脆弱性に関するルールを無効にします。

- セキュリティレベル 3 : 接続性よりもセキュリティを優先 (Security Over Connectivity)

[セキュリティの向上 (Increased Security)] : Maximum Detection ルールセットに基づいて、検出されたホストの潜在的な脆弱性に一致する追加のルールを有効にします。

[集中型セキュリティ (Focused Security)] (チェックボックスがオン) : Security Over Connectivity ルールセットに基づいて、検出されたホストの脆弱性に一致する追加のルールを有効にし、検出されたホストの潜在的な脆弱性に一致しない既存のルールを無効にします。

- セキュリティレベル 4 : 最大検出 (Maximum Detection)

[セキュリティの向上 (Increased Security)] : Security Over Connectivity ルールセットに基づいて、検出されたホストの潜在的な脆弱性に一致する追加のルールを有効にします。

[集中型セキュリティ (Focused Security)] (チェックボックスがオン) : Maximum Detection ルールセットに基づいて、検出されたホストの脆弱性に一致する追加のルールを有効にし、検出されたホストの潜在的な脆弱性に一致しない既存のルールを無効にします。

(注) Maximum Detection ルールは非常に多くのルールを有効にするため、パフォーマンスに影響する可能性があります。実稼働環境に導入する前に、この設定を確認してテストすることをお勧めします。

- [保護されたネットワーク (Protected Networks)] : モニタ対象のネットワークまたは個々のホストを指定して、推奨事項を調べます。ドロップダウンリストから、1 つ以上のシステムまたはカスタム定義のネットワークオブジェクトを選択できます。デフォルトでは、IPv4 ネットワークまたは IPv6 ネットワークが選択されます (選択されていない場合)。

重要 Secure Firewall ルールの推奨事項は、ネットワーク検出に依存します。保護されたネットワークは、ネットワーク検出ポリシーで構成された範囲内で検出されたすべてのホストに適用されます。詳細については、『*Cisco Secure Firewall Management Center Device Configuration guide*』の「[Network Discovery Policies](#)」の章を参照してください。

[追加+ (Add+)] ボタンをクリックして、タイプが [ホスト (Host)] または [ネットワーク (Network)] の新しいネットワークオブジェクトを作成し、[保存 (Save)] をクリックします。

ステップ 4 推奨事項の生成と適用 :

- [生成 (Generate)] : 侵入ポリシーの推奨事項を生成します。このアクションは、[推奨ルール (未使用) (Recommended Rules (Not in use))] の下にルールのリストを表示します。
- [生成して適用 (Generate and Apply)] : 侵入ポリシーの推奨事項を生成して適用します。このアクションは、[推奨ルール (使用中) (Recommended Rules (in use))] の下にルールのリストを表示します。

推奨事項が正常に生成されました。すべての推奨ルールと対応する推奨アクションが新しい推奨タブに表示されます。ルールアクションの事前設定フィルタは、新しい推奨事項に加えて、このタブでも使用できます。

ステップ 5 推奨事項を確認し、それに応じて適用することを選択できます。

- [受け入れる (Accept)] : 生成済みの侵入ポリシーの推奨事項を適用します。
- [更新 (Refresh)] : 侵入ポリシーのルール推奨事項を再生成および更新します。
- [編集 (Edit)] : [推奨事項 (Recommendations)] ダイアログボックスが開くので、推奨入力値を入力して推奨事項を生成します。
- [すべて削除 (Remove All)] : 適用された推奨ルールを元に戻すか、ポリシーから削除し、推奨タブも削除します。

[すべてのルール (All Rules)] の下に、推奨ルールを表示する [推奨ルール Recommended Rules] セクションがあります。

- (注) 侵入ルールの最終アクションは、ルールアクションの優先順位に基づいて適用されます。次に、ルールアクションの優先順位を示します。

[ルールのオーバーライド (Rule Override)] > [生成された推奨事項 (Generated Recommendations)]
> [グループのオーバーライド (Group Override)] > [ベースポリシーのデフォルトアクション (Base Policy Default Action)]

推奨事項が有効になっている場合、Management Center では現在の状態 (グループのオーバーライド、ベースポリシー、および推奨の設定) が考慮されます。アクションの優先順位は次のとおりです。

[パス (Pass)] > [ブロック (Block)] > [拒否 (Reject)] > [ドロップ (Drop)] > [書き換え (Rewrite)] > [アラート (Alert)]

次のタスク

設定変更を展開します。[設定変更の展開 \(28 ページ\)](#) を参照してください。



第 II 部

Snort 3 での詳細なネットワーク分析

- [ネットワーク分析ポリシーを開始するには \(67 ページ\)](#)



第 6 章

ネットワーク分析ポリシーを開始するには

この章では、ネットワーク分析ポリシーの基礎、前提条件、およびネットワーク分析ポリシーの管理方法について説明します。カスタムネットワーク分析ポリシーの作成とネットワーク分析ポリシーの設定に関する情報も提供します。

- [ネットワーク分析ポリシーの概要 \(67 ページ\)](#)
- [ネットワーク分析ポリシーの管理 \(68 ページ\)](#)
- [ネットワーク分析ポリシーの Snort 3 の定義と用語 \(69 ページ\)](#)
- [ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件 \(72 ページ\)](#)
- [Snort 3 の場合のカスタムネットワーク分析ポリシーの作成 \(73 ページ\)](#)
- [ネットワーク分析ポリシーの設定とキャッシュされた変更 \(100 ページ\)](#)

ネットワーク分析ポリシーの概要

ネットワーク分析ポリシーは、多数のトラフィックの前処理オプションを制御し、アクセスコントロールポリシーの詳細設定で呼び出されます。ネットワーク分析に関連する前処理は、セキュリティインテリジェンスによる照合や SSL 復号化の後、侵入またはファイル検査の開始前に実行されます。

デフォルトでは、システムは *Balanced Security and Connectivity* ネットワーク分析ポリシーを使用して、アクセスコントロールポリシーによって処理されるすべてのトラフィックを前処理します。ただし、この前処理を実行するために別のデフォルトのネットワーク分析ポリシーを選択できます。便宜を図るため、システムによっていくつかの変更不可能なネットワーク分析ポリシーが提供されます。これらのポリシーは、Cisco Talos Intelligence Group (Talos) によってセキュリティおよび接続の一定のバランスがとれるように調整されています。カスタム前処理設定を使用して、カスタム ネットワーク分析ポリシーを作成することもできます。



ヒント システム提供の侵入ポリシーとネットワーク分析ポリシーには同じような名前が付けられていますが、異なる設定が含まれています。たとえば、「Balanced Security and Connectivity」ネットワーク分析ポリシーと「Balanced Security and Connectivity」侵入ポリシーは連携して動作し、どちらも侵入ルールのアップデートで更新できます。ただし、ネットワーク分析ポリシーは主に前処理オプションを管理し、侵入ポリシーは主に侵入ルールを管理します。ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーが連動してトラフィックを検査します。

複数のカスタムネットワーク分析ポリシーを作成し、それらに異なるトラフィックの前処理を割り当てることにより、特定のセキュリティゾーン、ネットワーク、VLAN 用に前処理オプションを調整できます。（ただし、ASA FirePOWER VLAN による前処理を制限することはできないことに注意してください）。

ネットワーク分析ポリシーの管理

マルチドメイン展開では、編集できる現在のドメインで作成されたポリシーが表示されます。また、編集できない先祖ドメインで作成されたポリシーも表示されます。下位のドメインで作成されたポリシーを表示および編集するには、そのドメインに切り替えます。

ツールバーのユーザ名の下に、利用可能なドメインのツリーが表示されます。ドメインを切り替えるには、アクセスするドメインを選択します。

ステップ 1 ネットワーク分析ポリシーにアクセスするには、次のいずれかのパスを選択します。

- [ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)]、次に [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policy)] をクリックします。
- [Policies] > [Access Control] > [Intrusion]、次に [Network Analysis Policies]
- [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] > [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policy)]

(注) カスタムユーザロールに、ここにリストされている最初のパスへのアクセス制限がある場合は、2 番目のパスを使用してポリシーにアクセスします。

ステップ 2 ネットワーク分析ポリシーを管理します。

- 比較: [ポリシーの比較 (Compare Policies)] をクリックします。Cisco Secure Firewall Management Center コンフィギュレーションガイド [英語] の「Comparing Policies」を参照してください。

(注) Snort 2 ポリシーのみを比較できます。

- 作成: 新しいネットワーク分析ポリシーを作成する場合は、[ポリシーの作成 (Create Policy)] をクリックします。

ネットワーク分析ポリシーの 2 つのバージョン ([Snort 2 バージョン (Snort 2 Version)] と [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)]) が作成されます。

- Snort 2 バージョンの場合は、『Cisco Secure Firewall Management Center Configuration Guide』の「Custom Network Analysis Policy Creation for Snort 2」を参照してください。
 - Snort 3 バージョンについては、「[Snort 3 の場合のカスタムネットワーク分析ポリシーの作成 \(73 ページ\)](#)」を参照してください。
- 削除：ネットワーク分析ポリシーを削除する場合は、[削除 (Delete)] アイコンをクリックして、ポリシーの削除を確認します。アクセスコントロールポリシーが参照しているネットワーク分析ポリシーは削除できません。
- コントロールが淡色表示されている場合、設定は先祖ドメインに属しており、設定を変更する権限がありません。
- 編集：既存のネットワーク分析ポリシーを編集する場合は、[編集 (Edit)] アイコンをクリックします。
- 代わりに [表示 (View)] (👁) が表示される場合、設定は先祖ドメインに属しており、設定を変更する権限がありません。
- レポート：[レポート (Report)] アイコンをクリックします。『Cisco Secure Firewall Management Center Configuration Guide』の「Generating Current Policy Reports」を参照してください。

ネットワーク分析ポリシーの Snort 3 の定義と用語

次の表に、ネットワーク分析ポリシーで使用される Snort 3 の概念と用語を示します。

表 6: ネットワーク分析ポリシーの Snort 3 の定義と用語

用語	説明
インスペクタ	インスペクタは、パケットを処理するプラグインです (Snort 2 プリプロセッサと同様)。
バインダインスペクタ	バインダインスペクタは、特定のインスペクタにアクセスして考慮する必要がある場合のフローを定義します。 トラフィックがバインダインスペクタで定義された条件に一致すると、そのインスペクタの値/設定のみが有効になります。 詳細については、 Snort 3 の場合のカスタムネットワーク分析ポリシーの作成 (73 ページ) の「バインダインスペクタ」を参照してください。

用語	説明
シングルトンインスペクタ	<p>シングルトンインスペクタには1つのインスタンスが含まれています。これらのインスペクタは、マルチトンインスペクタのようなインスタンスの追加をサポートしていません。シングルトンインスペクタ設定は、特定のトラフィックセグメントではなく、そのインスペクタに一致しているトラフィック全体に適用されます。</p> <p>詳細については、Snort 3 の場合のカスタムネットワーク分析ポリシーの作成 (73 ページ) の「シングルトンインスペクタ」を参照してください。</p>
マルチトンインスペクタ	<p>マルチトンインスペクタには、必要に応じて設定できる複数のインスタンスが含まれています。これらのインスペクタは、ネットワーク、ポート、VLAN などの特定の条件に基づく設定をサポートしています。サポートされている一式の設定をインスタンスと呼びます。</p> <p>詳細については、Snort 3 の場合のカスタムネットワーク分析ポリシーの作成 (73 ページ) の「マルチトンインスペクタ」を参照してください。</p>
スキーマ	<p>スキーマファイルは OpenAPI JSON 仕様に基づいており、アップロードまたはダウンロードしたコンテンツを検証します。スキーマファイルをダウンロードします。このファイルは、Swagger エディタなどのサードパーティ製 JSON エディタで開くことができます。スキーマファイルを使用すると、インスペクタに設定できるパラメータと、対応する許容値、範囲、および使用する際に受け入れられるパターンを識別できます。</p> <p>詳細については、ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ (79 ページ) を参照してください。</p>

用語	説明
ファイルのサンプル	<p>これは、インスペクタ設定に役立つ設定例が含まれた既存のテンプレートです。</p> <p>サンプルファイルに含まれている設定例を参照して、必要に応じて変更を加えることができます。</p> <p>詳細については、ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ (79 ページ) を参照してください。</p>
完全な設定	<p>インスペクタ設定全体を 1 つのファイルにダウンロードできます。</p> <p>インスペクタ設定に関するすべての情報がこのファイルで入手できます。</p> <p>完全な設定は、デフォルト設定 (Cisco Talos による LSP 更新の一部として展開) とカスタム NAP インスペクタ設定がマージされた設定です。</p> <p>詳細については、ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ (79 ページ) を参照してください。</p>

用語	説明
オーバーライドされた設定	<p>ネットワーク分析ポリシーページの [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] で、次の手順を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> オーバーライドされた設定を含んでいる JSON ファイルをアップロードするには、[アクション (Actions)] > [アップロード (Upload)] で [オーバーライドされた設定 (Overridden Configuration)] をクリックします。 オーバーライドされたインスペクタ設定をダウンロードするには、[アクション (Actions)] > [ダウンロード (Download)] で [オーバーライドされた設定 (Overridden Configuration)] をクリックします。 <p>インスペクタ設定をオーバーライドしていない場合、このオプションは無効になります。インスペクタ設定をオーバーライドすると、このオプションが自動的に有効になり、ダウンロードできるようになります。</p> <p>詳細については、ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ (79 ページ) を参照してください。</p>

関連トピック

[Snort 3 の場合のカスタムネットワーク分析ポリシーの作成 \(73 ページ\)](#)

[ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ \(79 ページ\)](#)

[ネットワーク分析ポリシーのマッピング \(76 ページ\)](#)

ネットワーク分析と侵入ポリシーの前提条件

Snort 検査エンジンが侵入およびマルウェア分析のトラフィックを処理できるようにするには、Threat Defense デバイスに対して IPS ライセンスを有効にする必要があります。

ネットワーク分析、侵入ポリシーを管理し、移行タスクを実行するには、管理者ユーザーである必要があります。

Snort 3 の場合のカスタムネットワーク分析ポリシーの作成

デフォルトのネットワーク分析ポリシーは、一般的なネットワーク要件を満たし、また、最適なパフォーマンスが得られるように調整されています。通常、ほとんどのネットワーク要件はデフォルトのネットワーク分析ポリシーで十分であり、ポリシーをカスタマイズする必要はありません。ただし、特定のネットワーク要件がある場合やパフォーマンスに問題がある場合は、デフォルトのネットワーク分析ポリシーをカスタマイズできます。ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズは高度な設定であるため、上級ユーザーまたはシスコのサポート以外には行えないことに注意してください。

Snort 3 のネットワーク分析ポリシーの設定は、JSON と JSON スキーマに基づくデータ駆動型モデルです。スキーマは OpenAPI 仕様に基いており、サポートされているインスペクタ、設定、設定タイプ、および有効な値を確認するのに役立ちます。Snort 3 インスペクタは、パケットを処理するプラグインです (Snort 2 プリプロセッサと同様)。ネットワーク分析ポリシーの設定は、JSON 形式でダウンロードできます。

Snort 3 では、インスペクタと設定のリストは Snort 2 のプリプロセッサと設定のリストと 1 対 1 でマッピングされていません。また、Management Center で使用可能なインスペクタと設定の数は、Snort 3 がサポートするインスペクタと設定の一部です。Snort 3 の詳細については、<https://snort.org/snort3> を参照してください。Management Center で使用可能なインスペクタの詳細については、<https://www.cisco.com/go/snort3-inspectors> を参照してください。



- (注)
- Management Center を 7.0 リリースにアップグレードする際に、ネットワーク分析ポリシーの Snort 2 バージョンで行った変更については、アップグレード後も Snort 3 に移行されません。
 - 侵入ポリシーとは異なり、Snort 2 のネットワーク分析ポリシーの設定を Snort 3 に同期するオプションはありません。

デフォルトのインスペクタ更新

Lightweight Security Package (LSP) の更新には、新しいインスペクタまたは既存のインスペクタ設定の整数範囲への変更が含まれている場合があります。LSP のインストール後、新しいインスペクタや更新された範囲は、ネットワーク分析ポリシーの Snort 3 バージョンのインスペクタで使用できます。

バインディングインスペクタ

バインディングインスペクタは、特定のインスペクタにアクセスして考慮する必要がある場合のフローを定義します。トラフィックがバインディングインスペクタで定義された条件に一致すると、そのインスペクタの値/設定のみが有効になります。次に例を示します。

imap インспекタの場合、バインダはアクセスする必要があるときに次の条件を定義します。つまり、次の場合です。

- サービスが *imap* と等しい。
- ロールが *any* と等しい。

これらの条件が満たされている場合は、*imap* タイプを使用します。

```

▼ binder
185      {
186          "when": {
187              "service": "imap",
188              "role": "any"
189          },
190          "use": {
191              "type": "imap"
192          }
193      },

```

シングルトンインспекタ

シングルトンインспекタに含まれているインスタンスは1つです。これらのインспекタは、マルチトンインспекタのようなインスタンスの追加をサポートしていません。シングルトンインспекタ設定は、特定のトラフィックセグメントではなく、トラフィック全体に適用されます。

次に例を示します。

```

{
  "normalizer":{
    "enabled":true,
    "type":"singleton",
    "data":{

```

```

        "ip4":{
            "df":true
        }
    }
}

```

マルチトンインスペクタ

マルチトンインスペクタには、必要に応じて設定できる複数のインスタンスが含まれています。これらのインスペクタは、ネットワーク、ポート、VLANなどの特定の条件に基づく設定をサポートしています。サポートされている一式の設定をインスタンスと呼びます。デフォルトのインスタンスはありますが、特定の条件に基づいてインスタンスを追加することもできます。トラフィックがその条件に一致すると、そのインスタンスの設定が適用されます。それ以外の場合は、デフォルトインスタンスの設定が適用されます。また、デフォルトインスタンスの名前はインスペクタの名前と同じです。

マルチトンインスペクタの場合、オーバーライドされたインスペクタ設定をアップロードするときは、JSON ファイル内の各インスタンスの一致するバイнда条件（インスペクタにアクセスまたは使用する必要がある場合の条件）も含めるか、または定義する必要があります。そうしないと、アップロードはエラーになります。新しいインスタンスを作成することもできますが、エラーを回避するために、作成するすべての新しいインスタンスに必ずバイнда条件を含めてください。

次に例を示します。

- デフォルトインスタンスが変更されたマルチトンインスペクタ。

```

{
  "http_inspect":{
    "enabled":true,
    "type":"multiton",
    "instances":[
      {
        "name":"http_inspect",
        "data":{
          "response_depth":5000
        }
      }
    ]
  }
}

```

- デフォルトのインスタンスとデフォルトのバイндаが変更されたマルチトンインスペクタ。

```

{
  "http_inspect":{
    "enabled":true,
    "type":"multiton",
    "instances":[
      {
        "name":"http_inspect",
        "data":{
          "response_depth":5000
        }
      }
    ]
  }
}

```

```

    },
    "binder":{
      "type":"binder",
      "enabled":true,
      "rules":[
        {
          "use":{
            "type":"http_inspect"
          },
          "when":{
            "role":"any",
            "ports":"8080",
            "proto":"tcp",
            "service":"http"
          }
        }
      ]
    }
  }
}

```

- カスタムインスタンスとカスタムバインダが追加されたマルチトンインスペクタ。

```

{
  "http_inspect":{
    "enabled":true,
    "type":"multiton",
    "instances":[
      {
        "name":"http_inspect1",
        "data":{
          "response_depth":5000
        }
      }
    ]
  },
  "binder":{
    "type":"binder",
    "enabled":true,
    "rules":[
      {
        "use":{
          "type":"http_inspect",
          "name":"http_inspect1"
        },
        "when":{
          "role":"any",
          "ports":"8080",
          "proto":"tcp",
          "service":"http"
        }
      }
    ]
  }
}

```

ネットワーク分析ポリシーのマッピング

ネットワーク分析ポリシーの場合、Cisco Talos は Snort 3 バージョンのポリシーに対応する Snort 2 バージョンを見つけるために使用するマッピング情報を提供します。

このマッピングにより、Snort 3 バージョンのポリシーが Snort 2 バージョンと同等になります。

ネットワーク分析ポリシーのマッピングの表示

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] > [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policies)] に移動します。

ステップ 2 [NAP マッピング (NAP Mapping)] をクリックします。

ステップ 3 [マッピングの表示 (View Mappings)] の矢印を展開します。

Snort 2 同等ポリシーに自動的にマッピングされる Snort 3 ネットワーク分析ポリシーが表示されます。

ステップ 4 [OK] をクリックします。

ネットワーク分析ポリシーの作成

既存のすべてのネットワーク分析ポリシーは、対応する Snort 2 バージョンでも Snort 3 バージョンでも Management Center で使用できます。新しいネットワーク分析ポリシーを作成すると、Snort 2 バージョンと Snort 3 バージョンの両方で作成されます。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] > [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policies)] に移動します。

ステップ 2 [ポリシーの作成 (Create Policy)] をクリックします。

ステップ 3 [名前 (Name)] と [説明 (Description)] に入力します。

ステップ 4 使用可能な選択肢から [検査モード (Inspection Mode)] を選択します。

- [検出 (Detection)]
- [防御 (Prevention)]

ステップ 5 [ベースポリシー (Base Policy)] を選択し、[保存 (Save)] をクリックします。

(注) Snort 3 および SSL 復号または TLS サーバーアイデンティティを使用している場合は、防止モードでネットワーク分析ポリシー (NAP) を構成します。

新しいネットワーク分析ポリシーが、対応する Snort 2 バージョンと Snort 3 バージョンで作成されます。

ネットワーク分析ポリシーの変更

ネットワーク分析ポリシーを変更して、名前、説明、またはベースポリシーを変更できます。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] > [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policies)] に移動します。

ステップ 2 名前、説明、検査モード、またはベースポリシーを変更するには、[編集 (Edit)] をクリックします。

(注) ネットワーク分析ポリシーの名前、説明、ベースポリシー、および検査モードを編集すると、編集内容は Snort 2 と Snort 3 の両方のバージョンに適用されます。特定のバージョンの検査モードを変更する場合は、それぞれのバージョンのネットワーク分析ポリシーページから変更できます。

ステップ 3 [保存 (Save)] をクリックします。

[ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policy)] ページでのインスペクタの検索

[ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policy)] ページの Snort 3 バージョンで、検索バーに関連するテキストを入力してインスペクタを検索する必要がある場合があります。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] > [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policies)] に移動します。

ステップ 2 ネットワーク分析ポリシーの [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] に移動します。

ステップ 3 [検索 (Search)] バーに、検索するインスペクタの名前または関連するテキストを入力します。

検索するテキストに一致するすべてのインスペクタが表示されます。

たとえば、**pop** と入力すると、一致する結果としてポップインスペクタとバインダインスペクタが画面に表示されます。

関連トピック

[カスタムネットワーク分析ポリシーの設定例 \(89 ページ\)](#)

[インスペクタとオーバーライドのリストの表示 \(85 ページ\)](#)

[ネットワーク分析ポリシーの Snort 3 の定義と用語 \(69 ページ\)](#)

[ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ \(79 ページ\)](#)

[設定をオーバーライドするインスペクタのインライン編集 \(83 ページ\)](#)

インスペクタ設定のコピー

要件に応じて、ネットワーク分析ポリシーの Snort 3 バージョンのインスペクタ設定をコピーできます。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] > [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policies)] に移動します。

ステップ 2 ネットワーク分析ポリシーの [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] に移動します。

ステップ 3 [インスペクタ (Inspectors)] で、設定をコピーする必要があるインスペクタを展開します。

デフォルト設定は左側の列に表示され、オーバーライドされた設定はインスペクタの下の右側の列に表示されます。

ステップ 4 [クリップボードにコピー (Copy to clipboard)] アイコンをクリックして、次のいずれかまたは両方のインスペクタ設定をクリップボードにコピーします。

- 左側の列の [デフォルト設定 (Default Configuration)]
- 右側の列の [オーバーライドされた設定 (Overridden Configuration)]

ステップ 5 コピーしたインスペクタ設定を JSON エディタに貼り付けて、必要に応じて編集します。

関連トピック

[ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ](#) (79 ページ)

ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ

Snort 3 バージョンのネットワーク分析ポリシーは、要件に応じてカスタマイズできます。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] > [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policies)] に移動します。

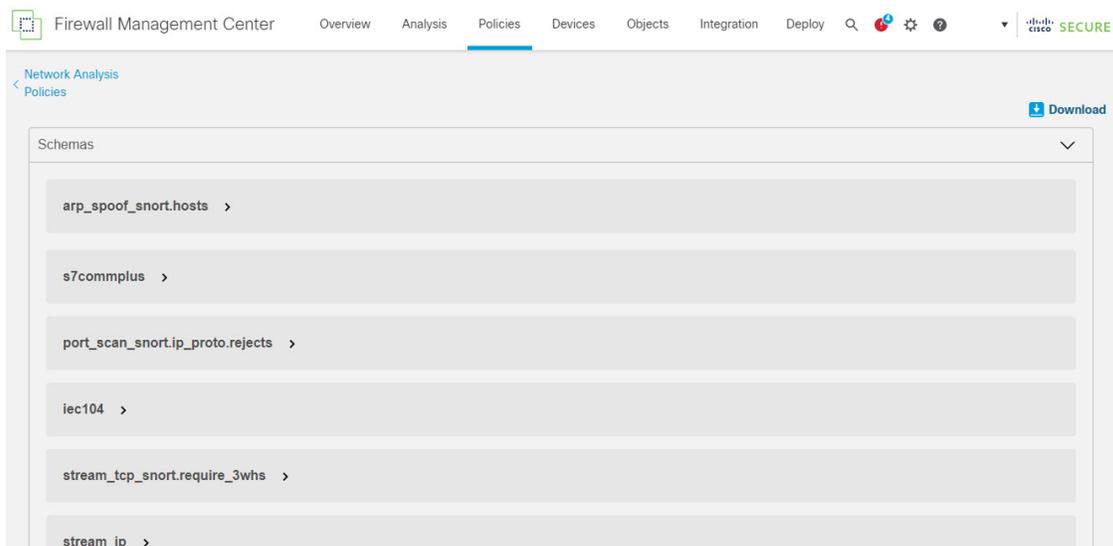
ステップ 2 ネットワーク分析ポリシーの [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] に移動します。

ステップ 3 [アクション (Actions)] ドロップダウンメニューをクリックします。

次のオプションが表示されます。

- スキーマの表示 (View Schema)
- スキーマのダウンロードおよびサンプルファイル/テンプレートのダウンロード
- 完全な設定のダウンロード
- オーバーライドされた設定のダウンロード
- オーバーライドされた設定のアップロード

ステップ 4 [スキーマの表示 (View Schema)] をクリックして、スキーマファイルをブラウザで直接開きます。



ステップ 5 必要に応じてスキーマファイル、サンプルファイル/テンプレート、完全な設定、またはオーバーライドされた設定をダウンロードできます。

これらのオプションでは、許容値、範囲、パターン、既存およびデフォルトのインスペクタ設定、ならびにオーバーライドされたインスペクタ設定に関する情報が得られます。

a) **[スキーマのダウンロード (Download Schema)]** をクリックしてスキーマファイルをダウンロードします。

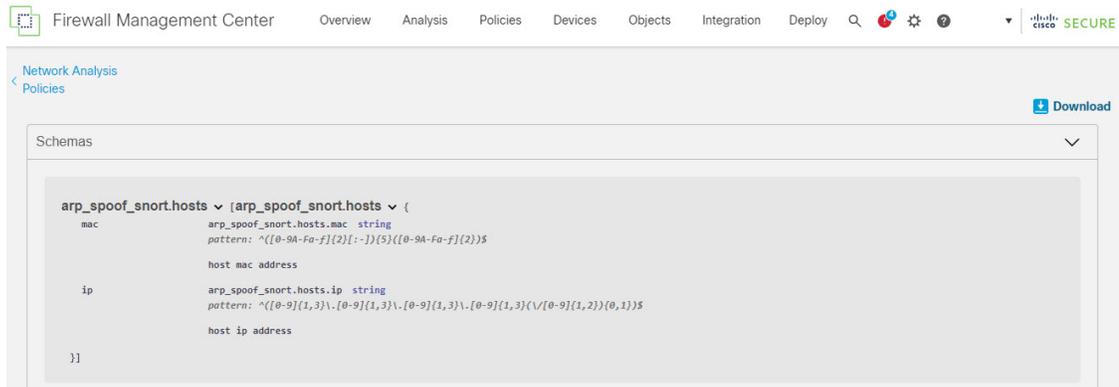
スキーマファイルはアップロードまたはダウンロードしたコンテンツを検証します。スキーマファイルをダウンロードし、サードパーティ製 JSON エディタを使用して開くことができます。スキーマファイルを使用すると、インスペクタに設定できるパラメータと、対応する許容値、範囲、および使用する際に受け入れられるパターンを識別できます。

たとえば、*arp_spoof_snort* インスペクタの場合は、ホストを設定できます。ホストには、MAC アドレスと IP アドレスの値が含まれます。スキーマファイルは、これらの値に対して受け入れられる次のパターンを示します。

- **mac : pattern:** `^([0-9A-Fa-f]{2}[:-]){5}([0-9A-Fa-f]{2})$`

- **ip : pattern:**

- `^([0-9]{1,3}\. [0-9]{1,3}\. [0-9]{1,3}\. [0-9]{1,3}) (/ [0-9]{1,2}) {0,1}$`



インスペクタ設定を正常にオーバーライドできるようにするには、スキーマファイルで受け入れられる値、範囲、パターンに従って値、範囲、パターンを指定する必要があります。指定しないと、エラーメッセージが表示されます。

- b) インスペクタ設定に役立つ設定例を含んだ既存のテンプレートを使用するには、[**サンプルファイル/テンプレートのダウンロード (Download Sample File/Template)**] をクリックします。

サンプルファイルに含まれている設定例を参照して、必要に応じて変更を加えることができます。

- c) [**完全な設定のダウンロード (Download Full Configuration)**] をクリックして、インスペクタ設定全体を1つのJSONファイルにダウンロードします。

インスペクタを個別に展開する代わりに、完全な設定をダウンロードして必要な情報を探すことができます。インスペクタ設定に関するすべての情報がこのファイルで入手できます。

- d) [**オーバーライドされた設定のダウンロード (Download Overridden Configuration)**] をクリックして、オーバーライドされたインスペクタ設定をダウンロードします。

ステップ 6 既存の設定をオーバーライドするには、次の手順を実行します。

次の方法を使用して、インスペクタ設定をオーバーライドすることができます。

- Management Center でインスペクタのインライン編集を直接行います。『Cisco Secure Firewall Management Center Snort 3 Configuration Guide』の「**Getting Started with Network Analysis Policies**」の章にある「**Make Inline Edit for an Inspector to Override Configuration**」トピックを参照してください。
- [アクション (Actions)] ドロップダウンメニューを使用してオーバーライドされたコンフィギュレーションファイルをアップロードする現在の手順を続行します。

Management Center でインライン編集を直接行った場合は、これ以上現在の手順に従う必要はありません。それ以外の場合は、この手順を完全に実行する必要があります。

- a) [インスペクタ (Inspectors)] で、デフォルト設定をオーバーライドする必要があるインスペクタを展開します。

デフォルト設定は左側の列に表示され、オーバーライドされた設定はインスペクタの下の右側の列に表示されます。

検索バーに関連するテキストを入力して、インスペクタを検索する必要がある場合があります。

- b) [クリップボードにコピー (Copy to clipboard)] アイコンをクリックして、デフォルトのインスペクタ設定をクリップボードにコピーします。
- c) JSON ファイルを作成し、デフォルト設定を貼り付けます。
- d) オーバーライドするインスペクタ設定を保持し、他のすべての設定とインスタンスを JSON ファイルから削除します。

[サンプルファイル/テンプレート (Sample File/Template)] を使用すると、デフォルト設定をオーバーライドする方法を理解することもできます。これは、Snort 3 のネットワーク分析ポリシーをカスタマイズする方法について説明する JSON スニペットを含むサンプルファイルです。

- e) 必要に応じて、インスペクタ設定に変更を加えます。
変更を検証し、スキーマファイルに準拠していることを確認します。マルチトンインスペクタの場合は、すべてのインスタンスのバインダ条件が JSON ファイルに含まれていることを確認します。詳細については、『Cisco Secure Firewall Management Center Snort 3 Configuration Guide』の「**Custom Network Analysis Policy Creation for Snort 3**」トピックの「Multiton Inspectors」を参照してください。
- f) さらにデフォルトのインスペクタ設定をコピーする場合は、オーバーライドされた設定を含んでいる既存のファイルにそのインスペクタ設定を追加します。

(注) コピーしたインスペクタ設定は、JSON 標準に準拠する必要があります。

- g) オーバーライドされたコンフィギュレーション ファイルをシステムに保存します。

ステップ 7 オーバーライドされた設定を含んでいる JSON ファイルをアップロードするには、[アクション (Actions)] ドロップダウンメニューから [オーバーライドされた設定のアップロード (Upload Overridden Configuration)] を選択します。

注意 必要な変更のみをアップロードします。オーバーライドが本質的にスティッキーになるため、設定全体をアップロードしないでください。その場合、LSP 更新の一部としてのデフォルトの設定に対する後続の変更は適用されません。

ファイルをドラッグアンドドロップするか、またはクリックして、オーバーライドされたインスペクタ設定を含むシステムに保存された JSON ファイルを参照します。

- [インスペクタオーバーライドのマージ (Merge inspector overrides)] : 共通のインスペクタがない場合は、アップロードされたファイルの内容が既存の設定にマージされます。共通のインスペクタがある場合は、アップロードされたファイル (共通のインスペクタ用) のコンテンツが以前のコンテンツより優先され、それらのインスペクタの以前の設定が置き換えられます。
- [インスペクタオーバーライドの置換 (Replace inspector overrides)] : 以前のすべてのオーバーライドを削除し、アップロードされたファイル内の新しいコンテンツに置き換えます。

注目 このオプションを選択すると、以前のオーバーライドがすべて削除されます。このオプションを使用して設定をオーバーライドする前に、十分な情報を得た上で決定してください。

オーバーライドされたインスペクタのアップロード中にエラーが発生した場合は、[オーバーライドされた設定ファイルのアップロード (Upload Overridden Configuration File)] ポップアップウィンドウにエラーが表示されます。また、エラーのあるファイルをダウンロードしてからエラーを修正してファイルを再アップロードすることもできます。

ステップ 8 [オーバーライドされた設定ファイルのアップロード (Upload Overridden Configuration File)] ポップアップウィンドウで、[インポート (Import)] をクリックして、オーバーライドされたインスペクタ設定をアップロードします。

オーバーライドされたインスペクタ設定をアップロードすると、インスペクタの横にオレンジ色のアイコンが表示され、オーバーライドされたインスペクタであることを示します。

また、インスペクタの下の [オーバーライドされた設定 (Overridden Configuration)] 列には、オーバーライドされた値が表示されます。

また、検索バーの横にある [オーバーライドのみを表示 (Show Overrides Only)] チェックボックスを使用して、オーバーライドされたすべてのインスペクタを表示することもできます。

(注) 常にオーバーライドされた設定をダウンロードし、JSON ファイルを開いて、このファイルにインスペクタ設定に対する新しい変更/オーバーライドを追加します。このアクションは、オーバーライドされた古い設定を失わないようにするために必要です。

ステップ 9 (任意) 新しいインスペクタ設定に変更を加える前に、システム上のオーバーライドされたコンフィギュレーションファイルのバックアップを作成します。

ヒント インスペクタ設定をオーバーライドするときは、バックアップを適宜作成することを推奨します。

関連トピック

[オーバーライドした設定のデフォルト設定の復元 \(85 ページ\)](#)

[インスペクタとオーバーライドのリストの表示 \(85 ページ\)](#)

[\[ネットワーク分析ポリシー \(Network Analysis Policy\)\] ページでのインスペクタの検索 \(78 ページ\)](#)

[インスペクタ設定のコピー \(78 ページ\)](#)

設定をオーバーライドするインスペクタのインライン編集

ネットワーク分析ポリシーの Snort 3 バージョンでは、インスペクタ設定のインライン編集を行い、要件に応じて設定をオーバーライドできます。

または、[アクション (Actions)] ドロップダウンメニューを使用して、オーバーライドされたコンフィギュレーションファイルをアップロードすることもできます。詳細については、[ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ \(79 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] > [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policies)] に移動します。

ステップ 2 ネットワーク分析ポリシーの [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] に移動します。

ステップ 3 [インスペクタ (Inspectors)] で、デフォルト設定をオーバーライドする必要があるインスペクタを展開します。

デフォルト設定は左側の列に表示され、オーバーライドされた設定はインスペクタの下の右側の列に表示されます。

ステップ 4 右側の列の [オーバーライドされた設定 (Overridden Configuration)] で、[インスペクタの編集 (Edit Inspector)] (鉛筆) アイコンをクリックして、インスペクタ設定を変更します。

[設定のオーバーライド (Override Configuration)] ポップアップが表示され、必要な編集を行うことができます。

- (注)
- オーバーライドする設定のみを保持するようにしてください。設定を同じ値のままにすると、そのフィールドはスティッキーになります。つまり、その設定が将来 Talos によって変更されたときに、現在の値が保持されることを意味します。
 - カスタムインスタンスを追加または削除する場合は、そのインスタンスのバインダールールもバインダインスペクタに追加するか、または削除します。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

JSON 標準に従ってエラーが発生した場合は、エラーメッセージが表示されます。

ステップ 6 [保存 (Save)] をクリックして、変更内容を保存します。

変更が OpenAPI スキーマ仕様に準拠している場合は、Management Center で設定を保存できます。それ以外の場合は、[オーバーライドされた設定の保存中にエラーが発生しました (Error Saving Overridden Configuration)] ポップアップが表示され、エラーが示されます。エラーのあるファイルをダウンロードすることもできます。

関連トピック

[ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ](#) (79 ページ)

[インライン編集時の未保存の変更を元に戻す](#) (84 ページ)

[オーバーライドした設定のデフォルト設定の復元](#) (85 ページ)

[カスタムネットワーク分析ポリシーの設定例](#) (89 ページ)

インライン編集時の未保存の変更を元に戻す

インスペクタ設定をオーバーライドするインライン編集を行っている間、未保存の変更を元に戻すことができます。このアクションでは、未保存のすべての変更が最後に保存された値に戻りますが、インスペクタのデフォルト設定には戻りません。

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] > [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policies)] に移動します。

ステップ 2 ネットワーク分析ポリシーの [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] に移動します。

ステップ 3 [インスペクタ (Inspectors)] で、未保存の変更を元に戻す必要があるインスペクタを展開します。

デフォルト設定は左側の列に表示され、オーバーライドされた設定はインスペクタの下の右側の列に表示されます。

- ステップ 4** 右側の列の [オーバーライドされた設定 (Overridden Configuration)] で、[十字 (Cross)] (X) アイコンをクリックして、インスペクタの未保存の変更を元に戻します。
- または、[キャンセル (Cancel)] をクリックして変更をキャンセルします。
- インスペクタ設定に未保存の変更がない場合、このオプションは表示されません。

関連トピック

- [オーバーライドした設定のデフォルト設定の復元 \(85 ページ\)](#)
- [設定をオーバーライドするインスペクタのインライン編集 \(83 ページ\)](#)

インスペクタとオーバーライドのリストの表示

オーバーライドされたすべてのインスペクタのリストを表示できます。

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] > [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policies)] に移動します。
- ステップ 2** ネットワーク分析ポリシーの [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] に移動します。
- ステップ 3** 検索バーの横にある [オーバーライドのみ表示 (Show Overrides Only)] チェックボックスをオンにして、オーバーライドされたインスペクタのリストを表示します。
- オーバーライドされたすべてのインスペクタは、識別しやすいように名前の横にオレンジ色のアイコンが表示されます。

関連トピック

- [\[ネットワーク分析ポリシー \(Network Analysis Policy\) \] ページでのインスペクタの検索 \(78 ページ\)](#)
- [設定をオーバーライドするインスペクタのインライン編集 \(83 ページ\)](#)
- [ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ \(79 ページ\)](#)

オーバーライドした設定のデフォルト設定の復元

インスペクタのデフォルト設定をオーバーライドするために行った変更を元に戻すことができます。このアクションは、オーバーライドされた設定をインスペクタのデフォルト設定に戻します。

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] > [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policies)] に移動します。
- ステップ 2** ネットワーク分析ポリシーの [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] に移動します。
- ステップ 3** [インスペクタ (Inspectors)] で、オーバーライドされた設定を元に戻す必要があるインスペクタを展開します。

オーバーライドされたインスペクタは、名前の横にオレンジ色のアイコンが表示されます。

デフォルト設定は左側の列に表示され、オーバーライドされた設定はインスペクタの下の右側の列に表示されます。右側の列の [オーバーライドされた設定 (Overridden Configuration)] で、[デフォルト設定に戻す (Revert to default configuration)] (戻る矢印) アイコンをクリックして、インスペクタのオーバーライドされた設定をデフォルト設定に戻します。

インスペクタのデフォルト設定を変更しなかった場合、このオプションは無効になります。

ステップ 4 [元に戻す (Revert)] をクリックして、決定を確定します。

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックして、変更内容を保存します。

変更内容を保存しない場合は、[キャンセル (Cancel)] または [十字 (Cross)] (X) アイコンをクリックします。

関連トピック

[インライン編集時の未保存の変更を元に戻す](#) (84 ページ)

[ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ](#) (79 ページ)

[設定をオーバーライドするインスペクタのインライン編集](#) (83 ページ)

[カスタムネットワーク分析ポリシーの設定例](#) (89 ページ)

Snort 3 ポリシーの検証

Snort 3 ポリシーを検証するために、ユーザーがメモできる基本情報のリストを次に示します。

- 現在のバージョンの Management Center は複数の脅威に対する防御バージョンを管理できます。
- Management Center の現在のバージョンは、以前のバージョンの脅威に対する防御デバイスには適用できない NAP 構成をサポートしています。
- 現在の NAP ポリシーと検証は、現在のバージョンのサポートに基づいて機能します。
- 変更には、以前のバージョンの脅威に対する防御では無効なコンテンツが含まれる場合があります。
- ポリシー構成の変更は、現在のバージョンで有効な構成であり、現在の Snort 3 バイナリと NAP スキーマを使用して実行されている場合に受け入れられます。
- 以前のバージョンの脅威に対する防御の場合、検証は展開中にその特定のバージョンの NAP スキーマと Snort 3 バイナリを使用して実行されます。特定のバージョンに適用できない構成がある場合、ユーザーには、特定のバージョンでサポートされていない構成はデプロイされず、残りの構成がデプロイされるという情報または警告が表示されます。

この手順では、NAP ポリシーをアクセスコントロールポリシーに関連付けてデバイスに展開するときに、たとえば、レートフィルタ設定のようなインスペクタを適用して Snort 3 ポリシーを検証します。

ステップ 1 **NAP** ポリシー設定を上書きする手順：ネットワーク分析ポリシーの [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] の [インスペクタ (Inspectors)] で、デフォルト設定をオーバーライドする必要なインスペクタを展開します。

デフォルト設定は左側の列に表示され、オーバーライドされた設定はインスペクタの下の右側の列に表示されます。

ステップ 2 右側の列の [オーバーライドされた設定 (Overridden Configuration)] で、[インスペクタの編集 (Edit Inspector)] (鉛筆) アイコンをクリックして、`rate_filter` のようなインスペクタを変更します。

`rate_filter` インスペクタに必要な編集を加えることができる [オーバーライドされた設定 (Override Configuration)] ポップアップが表示されます。

ステップ 3 [OK] をクリックします。

ステップ 4 [保存 (Save)] をクリックして、変更内容を保存します。

または、[アクション (Actions)] ドロップダウンメニューを使用して、オーバーライドされたコンフィギュレーションファイルをアップロードすることもできます。

ステップ 5 ネットワーク分析ポリシーの [Snort 3 バージョン (Snort 3 Version)] の [アクション (Actions)] ドロップダウンメニューをクリックします。

ステップ 6 [アップロード (Upload)] で、[オーバーライドされた設定 (Overridden Configuration)] をクリックして、オーバーライドされた設定を含む JSON ファイルをアップロードできます。

注意 必要な変更のみをアップロードします。オーバーライドが本質的にスティッキーになるため、設定全体をアップロードしないでください。その場合、LSP 更新の一部としてのデフォルトの設定に対する後続の変更は適用されません。

ファイルをドラッグアンドドロップするか、またはクリックして、オーバーライドされたインスペクタ設定を含むシステムに保存された JSON ファイルを参照します。

- [インスペクタオーバーライドのマージ (Merge inspector overrides)] : 共通のインスペクタがない場合は、アップロードされたファイルの内容が既存の設定にマージされます。共通のインスペクタがある場合は、アップロードされたファイル (共通のインスペクタ用) のコンテンツが以前のコンテンツより優先され、それらのインスペクタの以前の設定が置き換えられます。
- [インスペクタオーバーライドの置換 (Replace inspector overrides)] : 以前のすべてのオーバーライドを削除し、アップロードされたファイル内の新しいコンテンツに置き換えます。

注目 このオプションを選択すると、以前のすべてのオーバーライドが削除されます。そのため、このオプションを使用して設定をオーバーライドする前に、十分な情報を得た上で決定してください。

オーバーライドされたインスペクタのアップロード中にエラーが発生した場合は、[オーバーライドされた設定ファイルのアップロード (Upload Overridden Configuration File)] ポップアップウィンドウにエラーが表示されます。また、エラーのあるファイルをダウンロードしてからエラーを修正してファイルを再アップロードすることもできます。

- ステップ 7** アクセスコントロールポリシーに **NAP** ポリシーを関連付ける手順：アクセスコントロールポリシーエディタで、[詳細設定 (Advanced)] をクリックし、[ネットワーク分析と侵入ポリシー (Network Analysis and Intrusion Policies)] セクションの横にある [編集 (Edit)] をクリックします。
- ステップ 8** [デフォルトのネットワーク分析ポリシー (Default Network Analysis Policy)] ドロップダウンリストから、デフォルトのネットワーク分析ポリシーを選択します。
- ユーザが作成したポリシーを選択した場合は、[編集 (Edit)] をクリックして、新しいウィンドウでポリシーを編集できます。システムによって提供されたポリシーは編集できません。
- ステップ 9** [OK] をクリックします。
- ステップ 10** [保存 (Save)] をクリックしてポリシーを保存します。
- ステップ 11** または、アクセスコントロールポリシーエディタで、[詳細設定 (Advanced)] をクリックし、[ネットワーク分析と侵入ポリシー (Network Analysis and Intrusion Policies)] セクションの横にある [編集 (Edit)] をクリックします。
- ステップ 12** [ルール追加 (Add Rule)] をクリックします。
- ステップ 13** 追加する条件をクリックして、ルールの条件を設定します。
- ステップ 14** [ネットワーク分析 (Network Analysis)] タブをクリックし、このルールに一致するトラフィックの前処理に使用する [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policy)] を選択します。
- ステップ 15** [追加 (Add)] をクリックします。
- ステップ 16** **展開**：Management Center メニューバーで、[展開 (Deploy)] をクリックして、[展開 (Deployment)] を選択します。
- ステップ 17** 設定変更を展開するデバイスを特定して選択します。
- [検索 (Search)]：[検索 (Search)] ボックスのデバイス名、タイプ、ドメイン、グループ、またはステータスを検索します。
 - [展開 (Expand)]：展開するデバイス固有の設定変更を表示するには、[展開矢印 (Expand Arrow)] をクリックします。
- デバイスのチェックボックスを選択すると、デバイスの下に表示されているデバイスのすべての変更がプッシュされ、展開されます。ただし、[ポリシーの選択 (Policy Selection)] を使用すると、展開する個々のポリシーまたは設定を選択できるとともに、残りの変更は展開せずに保留できます。
- 必要に応じて、[ポリシーの表示または非表示 (Show or Hide Policy)] を使用して、関連付けられている未変更のポリシーを選択して表示したり、非表示にしたりできます。
- ステップ 18** [展開 (Deploy)] をクリックします。
- ステップ 19** 展開する変更に関するエラーや警告がシステムによって識別された場合は、[検証メッセージ (Validation Messages)] ウィンドウにその内容が表示されます。完全な詳細を表示するには、警告またはエラーの前にある矢印アイコンをクリックします。
- (注) Snort 3 ネットワーク分析ポリシーに、この脅威に対する防御バージョンでは無効なインスペクタまたは属性が含まれていることを示す警告が表示されます。この場合、無効な設定は展開時にスキップされます。無効なインスペクタは、バージョン 7.1 より前のデバイスの場合のみ ["rate_filter"] です。

カスタムネットワーク分析ポリシーの設定例

これは、Snort 3 のネットワーク分析ポリシーをカスタマイズする方法について説明する JSON スニペットを含むサンプルファイルです。次の方法を使用して、インスペクタ設定をオーバーライドできます。

- **Management Center** でインスペクタのインライン編集を直接行います。設定をオーバーライドするインスペクタのインライン編集 (83 ページ) を参照してください。
- [アクション (Actions)] ドロップダウンメニューを使用して、オーバーライドされたコンフィギュレーションファイルをアップロードします。ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ (79 ページ) を参照してください。

これらのオプションのいずれかを選択する前に、ネットワーク分析ポリシーのオーバーライドを正常に定義するのに役立つ次の詳細情報と例をすべて確認してください。リスクとエラーを回避するために、ここで説明するさまざまなシナリオの例を読んで理解する必要があります。

[アクション (Actions)] ドロップダウンメニューからインスペクタ設定をオーバーライドする場合は、ネットワーク分析ポリシーのオーバーライド用の JSON ファイルを作成し、そのファイルをアップロードする必要があります。

ネットワーク分析ポリシーでインスペクタ設定をオーバーライドするには、必要な変更のみをアップロードする必要があります。オーバーライドが本質的にスティッキーになるため、設定全体をアップロードしないでください。その場合、LSP 更新の一部としてのデフォルト値や設定に対する後続の変更は適用されません。

さまざまなシナリオの例を次に示します。

ベースポリシーのデフォルトの状態が無効な場合のシングルトンインスペクタの有効化

```
{
  "rate_filter": {
    "enabled": true,
    "type": "singleton",
    "data": []
  }
}
```

ベースポリシーのデフォルトの状態が有効な場合のシングルトンインスペクタの無効化

```
{
  "rate_filter": {
    "enabled": false,
    "type": "singleton",
    "data": []
  }
}
```

ベースポリシーのデフォルトの状態が無効な場合のマルチトンインスペクタの有効化

```
{
  "ssh": {
    "enabled": true,
    "type": "multiton",
    "instances": []
  }
}
```

```

}
}

```

ベースポリシーのデフォルトの状態が有効な場合のマルチトンインスペクタの無効化

```

{
  "ssh": {
    "enabled": false,
    "type": "multiton",
    "instances": []
  },
  "iecl104": {
    "type": "multiton",
    "enabled": false,
    "instances": []
  }
}

```

シングルトンインスペクタの特定の設定のデフォルト値のオーバーライド

```

{
  "normalizer": {
    "enabled": true,
    "type": "singleton",
    "data": {
      "tcp": {
        "block": true
      },
      "ip6": true
    }
  }
}

```

マルチトンインスペクタでのデフォルトインスタンス（インスタンス名がインスペクタタイプと一致する）の特定の設定のオーバーライド

```

{
  "http_inspect": {
    "enabled": true,
    "type": "multiton",
    "instances": [
      {
        "data": {
          "unzip": false
        },
        "name": "http_inspect"
      }
    ]
  }
}

```

必要な変更を含むデフォルトインスタンスのバインダールールの追加



(注) デフォルトのバインダールールは編集できません。常に最後に追加されます。

```

{
  "binder": {
    "enabled": true,

```

```

    "type": "binder",
    "rules": [
      {
        "use": {
          "type": "http_inspect"
        },
        "when": {
          "role": "server",
          "service": "http",
          "dst_nets": "10.1.1.0/24"
        }
      }
    ]
  }
}

```

新しいカスタムインスタンスの追加



(注) 対応するバインダールールエントリは、バインダインスpekタで定義する必要があります。

```

{
  "telnet": {
    "enabled": true,
    "type": "multiton",
    "instances": [
      {
        "name": "telnet_my_instance",
        "data": {
          "encrypted_traffic": true
        }
      }
    ]
  },
  "binder": {
    "enabled": true,
    "type": "binder",
    "rules": [
      {
        "when": {
          "role": "any",
          "service": "telnet"
        },
        "use": {
          "type": "telnet",
          "name": "telnet_my_instance"
        }
      }
    ]
  }
}

```

シングルトンインスタンス、マルチトン デフォルト インスタンスのオーバーライド、および単一の **JSON** オーバーライドでの新しいマルチトンインスタンスの作成

単一の JSON オーバーライドで次を表示する例：

- シングルトンインスタンスのオーバーライド (**normalizer** インспекタ)

- マルチトン デフォルト インスタンスのオーバーライド (**http_inspect** インспекタ)
- 新しいマルチトンインスタンスの作成 (**telnet** インспекタ)

```
{
  "normalizer": {
    "enabled": true,
    "type": "singleton",
    "data": {
      "tcp": {
        "block": true
      },
      "ip6": true
    }
  },
  "http_inspect": {
    "enabled": true,
    "type": "multiton",
    "instances": [
      {
        "data": {
          "unzip": false,
          "xff_headers": "x-forwarded-for true-client-ip x-another-forwarding-header"
        },
        "name": "http_inspect"
      }
    ]
  },
  "telnet": {
    "enabled": true,
    "type": "multiton",
    "instances": [
      {
        "name": "telnet_my_instance",
        "data": {
          "encrypted_traffic": true
        }
      }
    ]
  },
  "binder": {
    "enabled": true,
    "type": "binder",
    "rules": [
      {
        "when": {
          "role": "any",
          "service": "telnet"
        },
        "use": {
          "type": "telnet",
          "name": "telnet_my_instance"
        }
      },
      {
        "use": {
          "type": "http_inspect"
        },
        "when": {
          "role": "server",
          "service": "http",
          "dst_nets": "10.1.1.0/24"
        }
      }
    ]
  }
}
```

```

    }
  ]
}
}

```



(注) バインダールールでデフォルトインスタンスの **name** 属性を指定する必要はありません。

arp_spoof の設定

arp_spoof の設定例 :

arp_spoof インспекタには、属性のデフォルト設定はありません。次に、オーバーライドを指定できる場合を示します。

```

{
  "arp_spoof": {
    "type": "singleton",
    "data": {
      "hosts": [
        {
          "ip": "1.1.1.1",
          "mac": "ff:0f:f1:0f:0f:ff"
        },
        {
          "ip": "2.2.2.2",
          "mac": "ff:0f:f2:0f:0f:ff"
        }
      ]
    },
    "enabled": true
  }
}

```

rate_filter の設定

```

{
  "rate_filter": {
    "data": [
      {
        "apply_to": "[10.1.2.100, 10.1.2.101]",
        "count": 5,
        "gid": 135,
        "new_action": "alert",
        "seconds": 1,
        "sid": 1,
        "timeout": 5,
        "track": "by_src"
      }
    ],
    "enabled": true,
    "type": "singleton"
  }
}

```

マルチ階層ネットワーク分析ポリシーを使用する場合のバインダールールの設定

この例では、子ポリシーに新しいカスタムインスタンスを追加し、バインダールールを作成する方法を示します。バインダールールはリストとして定義されます。そのため、ルールは自動的にマージされないため、親ポリシーで定義されたルールを選択し、その上に新しいルールを作成することが重要です。子ポリシーで使用可能なバインダールールは、全体として真の情報源です。

脅威に対する防御では、デフォルトの Cisco Talos ポリシールールがこれらのユーザー定義のオーバーライドに追加されます。

親ポリシー :

telnet_parent_instance という名前と対応するバインダールールでカスタムインスタンスを定義しました。

```
{
  "telnet": {
    "type": "multiton",
    "instances": [
      {
        "data": {
          "normalize": true,
          "encrypted_traffic": true
        },
        "name": "telnet_parent_instance"
      }
    ],
    "enabled": true
  },
  "binder": {
    "enabled": true,
    "type": "binder",
    "rules": [
      {
        "when": {
          "role": "any",
          "service": "telnet"
        },
        "use": {
          "type": "telnet",
          "name": "telnet_parent_instance"
        }
      }
    ]
  }
}
```

子ポリシー :

このネットワーク分析ポリシーには、ベースポリシーとして前述のポリシーがあります。

telnet_child_instance という名前でカスタムインスタンスを定義し、このインスタンスのバインダールールも定義しました。親ポリシーからのバインダールールをここにコピーする必要があります。その後、子ポリシーのバインダールールはルールの性質に基づいて最上部の先頭または末尾に追加できるようになります。

```
{
  "telnet": {
    "type": "multiton",
    "instances": [
```

```

    {
      "data": {
        "normalize": true,
        "encrypted_traffic": false
      },
      "name": "telnet_child_instance"
    }
  ],
  "enabled": true
},
"binder": {
  "enabled": true,
  "type": "binder",
  "rules": [
    {
      "when": {
        "role": "any",
        "service": "telnet",
        "nets": "10.2.2.0/24"
      },
      "use": {
        "type": "telnet",
        "name": "telnet_child_instance"
      }
    },
    {
      "when": {
        "role": "any",
        "service": "telnet"
      },
      "use": {
        "type": "telnet",
        "name": "telnet_parent_instance"
      }
    }
  ]
}
}
}
}

```

一般的なリストインスペクタ属性の設定

タイプリストの属性のオーバーライドを変更する場合、部分的なオーバーライドではなく、内容全体を渡すことが重要です。つまり、ベースポリシー属性が次のように定義されている場合です。

```

{
  "list-attribute": [
    {
      "entry1": {
        "key1": "value1"
      }
    },
    {
      "entry2": {
        "key2": "value2"
      }
    }
  ]
}

```

value1 を **value1-new** に変更する場合、オーバーライドのペイロードは次のようになります。

正しい方法 :

```
{
  "list-attribute": [
    {
      "entry1": {
        "key1": "value1-new"
      }
    },
    {
      "entry2": {
        "key2": "value2"
      }
    }
  ]
}
```

不正な方法 :

```
{
  "list-attribute": [
    {
      "entry1": {
        "key1": "value1-new"
      }
    }
  ]
}
```

この設定を理解するには、**smtp** インспекタで **alt_max_command_line_len** 属性のトリム値を取得します。**smtp** インспекタのデフォルト（基本）ポリシー設定が次のようになっています。

```
{
  "smtp": {
    "type": "multiton",
    "instances": [
      {
        "name": "smtp",
        "data": {
          "decompress_zip": false,
          "normalize_cmds": "ATRN AUTH BDAT CHUNKING DATA DEBUG EHLO
            EMAL ESAM ESND ESOM ETRN EVFY EXPN HELO HELP IDENT MAIL
            NOOP ONEX QUEU QUIT RCPT RSET SAML SEND SOML STARTTLS TICK
            TIME TURN TURNME VERB VRFY X-ADAT XADR XAUTH XCIR X-DRCP X-
            ERCP XEXCH50 X-EXCH50 X-EXPS XGEN XLICENSE X-LINK2STATE XQUE
            XSTA XTRN XUSR",
          "ignore_data": false,
          "max_command_line_len": 512,
          "max_header_line_len": 1000,
          "log_rcptto": false,
          "decompress_swf": false,
          "max_response_line_len": 512,
          "b64_decode_depth": -1,
          "max_auth_command_line_len": 1000,
          "log_email_hdrs": false,
          "xlink2state": "alert",
          "binary_data_cmds": "BDAT XEXCH50",
          "auth_cmds": "AUTH XAUTH X-EXPS",
          "log_filename": false,
          "uu_decode_depth": -1,
          "ignore_tls_data": false,
          "data_cmds": "DATA",
          "bitenc_decode_depth": -1,

```

```

    "alt_max_command_line_len": [
      {
        "length": 255,
        "command": "ATRN"
      },
      {
        "command": "AUTH",
        "length": 246
      },
      {
        "length": 255,
        "command": "BDAT"
      },
      {
        "length": 246,
        "command": "DATA"
      }
    ],
    "log_mailfrom": false,
    "decompress_pdf": false,
    "normalize": "none",
    "email_hdrs_log_depth": 1464,
    "valid_cmds": "ATRN AUTH BDAT CHUNCKING DATA DEBUG EHLO
EMAL ESAM ESND ESOM ETRN EVFY EXPN HELO HELP IDENT MAIL
NOOP ONEX QUEU QUIT RCPT RSET SAML SEND SOML STARTTLS TICK
TIME TURN TURNME VERB VRFY X-ADAT XADR XAUTH XCIR X-DRCP X-
ERCP XEXCH50 X-EXCH50 X-EXPS XGEN XLICENSE X-LINK2STATE XQUE
XSTA XTRN XUSR",
    "qp_decode_depth": -1
  }
}
},
"enabled": true
}
}

```

ここで、次のように `alt_max_command_line_len` リストにさらに2つのオブジェクトを追加します。

```

{
  "length": 246,
  "command": "XEXCH50"
},
{
  "length": 246,
  "command": "X-EXPS"
}

```

カスタムネットワーク分析ポリシーのオーバーライド JSON は次のようになります。

```

{
  "smtp": {
    "type": "multiton",
    "instances": [
      {
        "name": "smtp",
        "data": {
          "alt_max_command_line_len": [
            {
              "length": 255,
              "command": "ATRN"
            },
            {
              "command": "AUTH",

```

```

        "length": 246
      },
      {
        "length": 255,
        "command": "BDAT"
      },
      {
        "length": 246,
        "command": "DATA"
      },
      {
        "length": 246,
        "command": "XEXCH50"
      },
      {
        "length": 246,
        "command": "X-EXPS"
      }
    ]
  }
},
"enabled": true
}
}

```

マルチトンインスペクタで多階層ネットワーク分析ポリシーが使用されている場合のオーバーライドの設定

この例では、子ポリシーの属性のオーバーライドと、マージされた設定がどのようにインスタンスの子ポリシーで使用されるかを示します。子ポリシーで定義されたオーバーライドは、親ポリシーとマージされます。したがって、`attribute1` と `attribute2` が親ポリシーでオーバーライドされ、`attribute2` と `attribute3` が子ポリシーでオーバーライドされると、マージされた設定は子ポリシー用になります。つまり、`attribute1` (親ポリシーで定義)、`attribute2` (子ポリシーで定義)、および `attribute3` (子ポリシーで定義) がデバイスに設定されます。

親ポリシー：

これまでに、`telnet_parent_instance` という名前前でカスタムインスタンスを定義し、カスタムインスタンスの `normalize` と `encrypted_traffic` の2つの属性をオーバーライドしました。

```

{
  "telnet": {
    "type": "multiton",
    "instances": [
      {
        "data": {
          "normalize": true,
          "encrypted_traffic": false
        },
        "name": "telnet_parent_instance"
      }
    ],
    "enabled": true
  },
  "binder": {
    "enabled": true,
    "type": "binder",
    "rules": [

```

```

    {
      "when": {
        "role": "any",
        "service": "telnet"
      },
      "use": {
        "type": "telnet",
        "name": "telnet_parent_instance"
      }
    }
  ]
}

```

子ポリシー：

このネットワーク分析ポリシーには、ベースポリシーとして前述のポリシーがあります。親ポリシーから属性 **encrypted_traffic** をオーバーライドし、新しい属性 **ayt_attack_thresh** もオーバーライドしました。

```

{
  "telnet": {
    "type": "multiton",
    "instances": [
      {
        "data": {
          "encrypted_traffic": true,
          "ayt_attack_thresh": 1
        },
        "name": "telnet_parent_instance"
      }
    ],
    "enabled": true
  }
}

```

上記のポリシー JSON では、ネットワーク分析ポリシーを展開すると、次のマージされた JSON がデバイスに設定されます。

```

{
  "telnet": {
    "type": "multiton",
    "instances": [
      {
        "data": {
          "normalize": true,
          "encrypted_traffic": true,
          "ayt_attack_thresh": 1
        },
        "name": "telnet_parent_instance"
      }
    ],
    "enabled": true
  },
  "binder": {
    "enabled": true,
    "type": "binder",
    "rules": [
      {
        "when": {
          "role": "any",
          "service": "telnet"
        },
        "use": {

```

```

        "type": "telnet",
        "name": "telnet_parent_instance"
    }
  ]
}

```

次に、カスタムネットワーク分析ポリシーの詳細の例を示します。同じ動作がデフォルトインスタンスでも発生します。また、シングルトンインスペクタでも同様のマージが行われます。

ネットワーク分析ポリシーのすべてのインスペクタオーバーライドの削除：

特定のネットワーク分析ポリシーのすべてのオーバーライドを削除する場合は、空の JSON をアップロードできます。オーバーライドをアップロードする際に、[インスペクタのオーバーライドの置換 (Replace inspector overrides)] オプションを選択します。

```

{
}

```

関連トピック

[ネットワーク分析ポリシーの Snort 3 の定義と用語](#) (69 ページ)

[ネットワーク分析ポリシーのマッピング](#) (76 ページ)

[Snort 3 の場合のカスタムネットワーク分析ポリシーの作成](#) (73 ページ)

[\[ネットワーク分析ポリシー \(Network Analysis Policy\)\] ページでのインスペクタの検索](#) (78 ページ)

[インスペクタ設定のコピー](#) (78 ページ)

[ネットワーク分析ポリシーのカスタマイズ](#) (79 ページ)

[インスペクタとオーバーライドのリストの表示](#) (85 ページ)

ネットワーク分析ポリシーの設定とキャッシュされた変更

新しいネットワーク分析ポリシーを作成すると、そのポリシーには基本ポリシーと同じ設定が付与されます。

ネットワーク分析ポリシーの調整時に、特にインスペクタを無効にするときは、インスペクタと侵入ルールによっては、トラフィックを特定の方法で最初にデコードまたは前処理する必要があります。必要なインスペクタを無効にすると、システムは自動的に現在の設定でインスペクタを使用します。ただし、ネットワーク分析ポリシーの Web インターフェイスではインスペクタは無効のままになります。



(注) 前処理と侵入インスペクションは非常に密接に関連しているため、単一パケットを検査するネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーは、相互補完する**必要があります**。前処理の調整、特に複数のカスタム ネットワーク分析ポリシーを使用して調整することは、**高度なタスク**です。

システムは、ユーザごとに1つのネットワーク分析ポリシーをキャッシュします。ネットワーク分析ポリシーの編集に、任意のメニューまたは別のページへの他のパスを選択した場合、変更内容はそのページを離れてもシステム キャッシュにとどまります。



第 III 部

Snort 3 向けの Encrypted Visibility Engine

- [暗号化された可視性エンジン \(105 ページ\)](#)



第 7 章

暗号化された可視性エンジン

Encrypted Visibility Engine (EVE) は、TLS 暗号化を使用するクライアントアプリケーションとプロセスを識別するために使用されます。可視性を実現し、管理者が環境内でアクションを実行してポリシーを適用できるようにします。EVEテクノロジーは、マルウェアの特定と阻止にも使用できます。

- [Encrypted Visibility Engine の概要 \(105 ページ\)](#)
- [EVE の仕組み \(106 ページ\)](#)
- [EVE の設定 \(107 ページ\)](#)

Encrypted Visibility Engine の概要

暗号化された可視性エンジン (EVE) は、復号を必要とせずに暗号化セッションの可視性を高めるために使用されます。暗号化されたセッションに関する洞察は、シスコの脆弱性データベース (VDB) にパッケージ化されているシスコのオープンソースライブラリによって取得されます。ライブラリは、着信暗号化セッションをフィンガープリントして分析し、一連の既知のフィンガープリントと照合します。この既知のフィンガープリントのデータベースも、Cisco VDB で利用できます。



(注) 暗号化された可視性エンジンの機能は、Snort 3 を実行している Management Center の管理対象デバイスでのみサポートされます。この機能は、Snort 2 デバイス、Device Manager の管理対象管理デバイス、または CDO ではサポートされていません。

EVE の重要な機能の一部を次に示します。

- EVE から取得した情報を使用して、トラフィックに対してアクセスコントロールポリシーアクションを実行できます。
- Cisco Secure Firewall に含まれる VDB には、EVE によって高い信頼値で検出された一部のプロセスにアプリケーションを割り当てる機能があります。または、次の目的でカスタムアプリケーションディテクタを作成できます。

- EVE で検出されたプロセスを新しいユーザー定義アプリケーションにマッピングする。
- EVE で検出されたプロセスにアプリケーションを割り当てるために使用されるプロセス確実性の組み込み値を上書きする。

『[Cisco Secure Firewall Management Center Device Configuration Guide](#)』の「**Application Detection**」の章にある項「**Configuring Custom Application Detectors**」と「**Specifying EVE Process Assignments**」を参照してください。

- EVE は、暗号化されたトラフィックで Client Hello パケットを作成したクライアントのオペレーティングシステムのタイプとバージョンを検出できます。
- EVE は、Quick UDP Internet Connections (QUIC) トラフィックのフィンガープリントと分析もサポートします。Client Hello パケットからのサーバー名は、[接続イベント (Connection Events)] ページの [URL] フィールドに表示されます。



注目 Management Center で EVE を使用するには、デバイスに有効な 脅威 ライセンスが必要です。脅威ライセンスがない場合、ポリシーによって警告が表示され、展開は許可されません。



(注) EVE は SSL セッションのオペレーティングシステムのタイプとバージョンを検出できます。アプリケーションやパッケージ管理ソフトウェアの実行など、オペレーティングシステムの通常の使用により、OS 検出がトリガーされる可能性があります。クライアント OS 検出を表示するには、EVE トグルボタンを有効にすることに加えて、[ポリシー (Policies)] > [ネットワークの検出 (Network Discovery)] で [ホスト (Hosts)] を有効にする必要があります。ホスト IP アドレスで使用可能なオペレーティングシステムのリストを表示するには、[分析 (Analysis)] > [ホスト (Hosts)] > [ネットワークマップ (Network Map)] をクリックし、該当するホストを選択します。

関連リンク

[EVE の設定 \(107 ページ\)](#)

EVE の仕組み

Encrypted Visibility Engine (EVE) は、TLS ハンドシェイクの Client Hello 部分を検査して、クライアントプロセスを識別します。Client Hello は、サーバーに送信される最初のデータパケットです。これにより、ホスト上のクライアントプロセスがよくわかります。このフィンガープリントと、宛先 IP アドレスなどの他のデータが組み合わせられて、EVE のアプリケーション識別の基礎となります。TLS セッションの確立で特定のアプリケーションフィンガープリントを識別することで、システムはクライアントプロセスを識別し、適切なアクション（許可/ブロック）を実行することができます。

EVE は、5,000 を超えるクライアントプロセスを識別できます。システムは、アクセス制御ルールの基準として使用するために、多数のこれらのプロセスをクライアントアプリケーションにマッピングします。これにより、システムは TLS 復号を有効にすることなく、これらのアプリケーションを識別して制御することができます。既知の悪意のあるプロセスのフィンガープリントを使用することで、EVE テクノロジーを使用して、アウトバウンド復号を使用せずに暗号化された悪意のあるトラフィックを識別してブロックすることもできます。

機械学習 (ML) テクノロジーにより、シスコは 10 億を超える TLS フィンガープリントと 10,000 を超えるマルウェアサンプルを毎日処理し、EVE フィンガープリントを作成および更新しています。これらの更新は、その後、シスコの脆弱性データベース (VDB) パッケージを使用してお客様に配信されます。

EVE の設定

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)] を選択します。

ステップ 2 編集するアクセス コントロール ポリシーの横にある [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。

ステップ 3 パケットフロー行の最後にある [詳細 (More)] ドロップダウン矢印から [詳細設定 (Advanced Settings)] を選択します。

ステップ 4 [Encrypted Visibility Engine] の横にある [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。

ステップ 5 [Encrypted Visibility Engine] ページで、[Encrypted Visibility Engine (EVE)] トグルボタンを有効にします。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

ステップ 7 [保存 (Save)] をクリックします。

次のタスク

設定変更を展開します。

EVE イベントの表示

[Encrypted Visibility Engine] を有効にして、アクセス コントロール ポリシーを展開すると、システムを介してライブトラフィックの送信を開始できます。ログに記録された接続イベントは、[接続イベント (Connection Events)] ページで表示できます。接続イベントにアクセスするには、Management Center で次の手順を実行します。

ステップ 1 [分析 (Analysis)] > [接続 (Connection)] > [イベント (Events)] の順にクリックします。

ステップ 2 [接続イベントのテーブルビュー (Table View of Connection Events)] タブをクリックします。

[分析 (Analysis)] メニューにある [統合イベント (Unified Events)] ビューアに接続イベントフィールドを表示することもできます。

で暗号化された可視性エンジンでは、接続を開始したクライアントプロセス、クライアントのOS、そのプロセスにマルウェアが含まれているかどうかを特定できます。

ステップ 3 [接続イベント (Connection Events)] ページで、Encrypted Visibility Engine 用に追加された次の列を表示します。以下の列を明示的に有効にする必要があることに注意してください。

- [暗号化された可視性プロセス名 (Encrypted Visibility Process Name)]
- [暗号化された可視性プロセスの信頼スコア (Encrypted Visibility Process Confidence Score)]
- [暗号化された可視性脅威の信頼度 (Encrypted Visibility Threat Confidence)]
- [暗号化された可視性脅威の信頼スコア (Encrypted Visibility Threat Confidence Score)]
- [Detection Type]

これらのフィールドの詳細については、『Cisco Secure Firewall Management Center Administration Guide』の「**Connection and Security-Related Connection Events**」の章の「**Connection and Security Intelligence Event Fields**」の項を参照してください。

(注) プロセスにアプリケーションが割り当てられている場合、[接続イベント (Connection Events)] ページの [検出タイプ (Detection Type)] 列には、クライアントアプリケーションが EVE によって識別されたことを示す [暗号化された可視性エンジン (Encrypted Visibility Engine)] が表示されます。プロセス名へのアプリケーションの割り当てがない場合、[検出タイプ (Detection Type)] 列には、クライアントアプリケーションを識別したエンジンが AppID であることを示す [AppID] が表示されます。

EVE ダッシュボードの表示

EVE 分析情報は2つのダッシュボードに表示できます。ダッシュボードにアクセスするには、次の手順を実行します。

ステップ 1 [Overview] > [Dashboards] に移動し、[Dashboard] をクリックします。

ステップ 2 [概要ダッシュボード (Summary Dashboard)] ウィンドウで、スイッチダッシュボードのリンクをクリックし、ドロップダウンボックスから [アプリケーション統計 (Application Statistics)] を選択します。

ステップ 3 [Encrypted Visibility Engine] タブを選択し、次の2つのダッシュボードを表示します。

- [上位のTLSフィンガープリントで検出されたプロセス (Top TLS Fingerprint Discovered Processes)] [上位の暗号化された可視性エンジンで検出されたプロセス (Top Encrypted Visibility Engine Discovered Processes)] : ネットワークで使用されている上位のTLSプロセス名と接続数が表示されます。テーブルのプロセス名をクリックすると、[接続イベント (Connection Events)] ページのフィルタリングされたビューが表示されます。このビューはプロセス名でフィルタリングされています。
- [TLSフィンガープリントマルウェア別の接続 (Connections by TLS Fingerprint Malware)] [暗号化可視性エンジンの脅威の信頼度別の接続 (Connections by Encrypted Visibility Engine Threat Confidence)] : マルウェアの確実性レベル (非常に高い、非常に低いなど) 別に接続が表示されます。テーブル内の

脅威の信頼レベルをクリックすると、[接続イベント (Connection Events)] ページのフィルタリングされたビューが表示されます。このビューは、信頼レベルによってフィルタリングされています。



第 **IV** 部

Snort 3 のエレファントフロー検出

- [エレファントフローの検出 \(113 ページ\)](#)



第 8 章

エレファントフローの検出

エレファントフローは（合計バイト数が）非常に大きい連続フローであり、ネットワークリンク上で測定される TCP（または他のプロトコル）フローによって設定されます。デフォルトでは、エレファントフローとは 1 GB/10 秒を超えるフローです。これらのフローは、Snort コアでのパフォーマンス拘束の原因となります。エレファントフローはそれほど多くありませんが、一定期間にわたってそう帯域幅の不均衡な割合を占める可能性があります。これらのフローは、CPU 使用率の上昇やパケットドロップなどの問題につながる可能性があります。

Management Center 7.2.0 以降（Snort 3 デバイスのみ）では、エレファントフロー機能を使用して、エレファントフローを検出および修復できます。こうしたアクションはシステムストレスを軽減し、前述の問題を解決するために役立ちます。

- [エレファントフローの検出と修復について（113 ページ）](#)
- [インテリジェントアプリケーションバイパスからのエレファントフローのアップグレード（114 ページ）](#)
- [エレファントフローの設定（114 ページ）](#)

エレファントフローの検出と修復について

エレファントフロー検出機能を使用して、エレファントフローを検出して修復できます。次の修復アクションを適用できます。

- **エレファントフローをバイパスする**：Snort インспекションをバイパスするようにエレファントフローを設定できます。このアクションが設定されている場合、Snort はエレファントフローからパケットを受信しません。
- **エレファントフローをスロットルする**：フローにレート制限を適用して、フローの検査を続行できます。フローレートは動的に計算され、フローレートの 10% が削減されます。Snort は、判定結果（フローレートが 10% 少ない QoS フロー）をファイアウォールエンジンに送信します。識別されていないアプリケーションを含むすべてのアプリケーションをバイパスすることを選択した場合、いずれのフローに対してもスロットルアクション（レート制限）を設定できません。



(注) エレファントフロー検出を機能させるには、Snort 3 を検出エンジンにする必要があります。

インテリジェントアプリケーションバイパスからのエレファントフローのアップグレード

バージョン 7.2.0 以降の Snort 3 デバイスでは、インテリジェントアプリケーションバイパス (IAB) は廃止されました。

7.2.0 以降を実行しているデバイスの場合、AC ポリシー ([詳細設定 (Advanced Settings)] タブ) の [エレファントフロー設定 (Elephant Flow Settings)] セクションでエレファントフロー設定を構成する必要があります。

7.2.0 (または以降) へのアップグレード後、Snort 3 デバイスを使用している場合、エレファントフロー構成設定は、[インテリジェントアプリケーションバイパス設定 (Intelligent Application Bypass Settings)] セクションからではなく、[エレファントフロー設定 (Elephant Flow Settings)] セクションから選択されて展開されるため、エレファントフロー構成設定に移行していない場合、次の展開時にデバイスのエレファントフロー構成は失われます。

次の表は、Snort 3 または Snort 2 エンジンを実行しているバージョン 7.2.0 以降およびバージョン 7.1.0 以前に適用できる IAB またはエレファントフロー構成を示しています。

Management Center	Threat Defense	エレファントフローまたは IAB 構成
Management Center 7.0 または 7.1	Snort 2 デバイス	IAB の構成が適用されます。
	Snort 3 デバイス	IAB の構成が適用されます。
Management Center 7.2.0	Snort 2 デバイス	IAB の構成が適用されます。
	Snort 3 デバイス (7.1.0 以前)	IAB の構成が適用されます。
	Snort 3 デバイス (7.2.0 以降)	エレファントフローの構成が適用されます。

エレファントフローの設定

エレファントフローでアクションを実行するようにエレファントフローを設定できるため、システムの危機、高い CPU 使用率、パケットドロップなどの問題の解決に役立ちます。



注目 エレファントフロー検出は、Snortを介して処理されない、事前フィルタリングされたフロー、信頼されたフロー、または高速転送フローには適用できません。エレファントフローはSnortによって検出されるため、エレファントフロー検出は暗号化されたトラフィックには適用されません。

ステップ 1 アクセスコントロールポリシーエディタで、[詳細 (Advanced)] をクリックして、[エレファントフロー設定 (Elephant Flow Settings)] の横にある [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。

代わりに [表示 (View)] (👁) が表示される場合、設定は先祖ポリシーから継承されており、設定を変更する権限がありません。設定がロック解除されている場合は、[Inherit from base policy] をオフにして、編集を有効にします。

図 1: エレファントフロー検出の設定

ステップ 2 [エレファントフロー検出 (Elephant Flow Detection)] トグルボタンはデフォルトで有効になっています。フローバイトとフロー期間の値を設定できます。設定した値を超えると、エレファントフローイベントが生成されます。

ステップ 3 エレファントフローを修復するには、[エレファントフローの修復 (Elephant Flow Remediation)] トグルボタンを有効にします。

ステップ 4 エレファントフローの修復基準を設定するには、CPU使用率%、固定時間ウィンドウの継続時間、およびパケットドロップ%の値を設定します。

ステップ 5 設定された基準を満たしている場合、エレファントフローの修復に対して次のアクションを実行できます。

1. [フローをバイパスする (Bypass the flow)]: 選択したアプリケーションまたはフィルタのSnortインスタンスをバイパスするには、このボタンを有効にします。次から選択します。
 - [識別されていないアプリケーションを含むすべてのアプリケーション (All applications including unidentified applications)]: すべてのアプリケーショントラフィックをバイパスするには、このオ

プションを選択します。このオプションを設定すると、すべてのフローにスロットルアクション（レート制限）を設定できなくなります。

- [アプリケーション/フィルタの選択 (Select Applications/Filters)] : トラフィックをバイパスするアプリケーションまたはフィルタを選択するには、このオプションを選択します。『Cisco Secure Firewall Management Center Device Configuration Guide』の「Access Control Rules」の章にある「Configuring Application Conditions and Filters」トピックを参照してください。

2. [フローをスロットルする (Throttle the flow)] : フローにレート制限を適用し、フローの検査を続行するには、このボタンを有効にします。Snort インспекションをバイパスし、残りのフローをスロットルするアプリケーションまたはフィルタを選択できます。

(注) スロットルされたエレファントフローからスロットルが自動的に削除されるのは、システムが危機を脱した場合、つまり、Snort パケットドロップのパーセンテージが設定されたしきい値よりも低い場合です。その結果、レート制限も削除されます。

次の Threat Defense コマンドを使用して、スロットルされたエレファントフローからスロットルを手動で削除することもできます。

- **clear efd-throttle <5-tuple/all> bypass** : このコマンドは、スロットルされたエレファントフローからスロットルを削除し、Snort インспекションをバイパスします。
- **clear efd-throttle <5-tuple/all>** : このコマンドは、スロットルされたエレファントフローからスロットルを削除し、Snort インспекションを続行します。このコマンドを使用すると、エレファントフローの修復はスキップされます。

これらのコマンドの詳細については、『Cisco Secure Firewall Threat Defense コマンドリファレンス』を参照してください。

(注) エレファントフローに対するアクション（フローのバイパスとスロットル）の実行は、Cisco Firepower 2100 シリーズ デバイスではサポートされていません。

ステップ 6 [OK] をクリックして、エレファントフロー設定を保存します。

ステップ 7 [保存 (Save)] をクリックしてポリシーを保存します。

次のタスク

設定変更を展開します。

エレファントフロー設定を構成した後、接続イベントをモニターして、フローが検出、バイパス、またはスロットリングされているかどうかを確認します。これは、接続イベントの [理由 (Reason)] フィールドで確認できます。エレファントフロー接続の 3 つの理由は次のとおりです。

- エレファントフロー
- エレファントフローがスロットリングされている (Elephant Flow Throttled)

- エレファントフローが信頼されている (Elephant Flow Trusted)



注目 エレファントフロー検出を有効にただけでは、エレファントフローの接続イベントは生成されません。接続イベントが別の理由ですでにログに記録されており、フローもエレファントフローである場合、[理由 (Reason)] フィールドにはこの情報が含まれます。ただし、すべてのエレファントフローを確実にロギングするには、該当するアクセス制御ルールで接続ロギングを有効にする必要があります。

詳細については、『[Cisco Secure Firewall Elephant Flow Detection](#)』を参照してください。

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。